# 薬屋のひとりごと

うりぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薬屋のひとりごと

【Ｎコード】
Ｎ９６３６Ｘ

【作者名】
うりぼう

【あらすじ】
薬草を取りに出かけたら、後宮の女官狩りに遭いました。

花街で薬師をやっていた猫猫は、そんなわけで雅なる場所で下女などやっている。現状に不満を抱きつつも、奉公が明けるまでおとなしくしていようと思うのだが、彼女の好奇心と知識はそうはさせない。

ふとした事件を解決したことから帝の寵妃や宦官に目をつけられる

ことになる。

早く市井に戻りたい、猫猫はきょうも洗濯籠を片手にため息をつくのだった。

# 1　猫猫

（露天の串焼きが食べたいなあ）

曇天を見上げて猫猫は溜息をついた。

周りは自分が今まで見た中で最も美しくきらびやかな世界、そして瘴気蠢く濁った澱の中だった。

（もう三か月かあ、おやじ、飯食ってんだろうか）

先日、薬草を探しに森に出かけてみれば出会ったのは、村人その壱、弐、参という名の人さらいだった。

まったく強大で迷惑極まりない結婚活動、略して婚活、宮廷の女狩りである。

まあ、給金はもらえるし、二年ほど働けば市井に戻れなくもないので、就職先としては悪くないのだが、それは個人の意思で来た場合である。

薬師としてそれなりの生活をしていた猫猫にははた迷惑な話なのだ。

人さらいどもは、妙齢の娘を捕まえては宦官に売り酒代を稼いだか、それとも己の娘の身代わりにさせたのか猫猫にはどうでもいい話である。どんな理由があれ、とばっちりを受けたのは変わらないのである。

でなければ、後宮なる場所に一生関わりたくなかった。

むせ返る化粧と香、美しい衣を纏った女官の唇には薄っぺらい笑み

が張り付いていた。

薬屋をやってきて思うこと、女の笑みほど恐ろしい毒はないと。
それは殿上人の住まう御殿も城下の花街も変わらないのだと。

足元に置いた洗濯籠を抱え、建物の奥に向かう。表とは違い、殺風景な中庭には石畳の水場があり、男とも女ともつかない召使たちが大量の洗濯物を洗っていた。

後宮は基本男子禁制である。入れるのは、国で最も高貴なかたとその血縁、あと大切なものを失った元男性だけである。もちろん、そこにいるのは後者である。
歪(いびつ)だと思いつつ、それが利にかなっているからやっていることなのだろうと猫猫は考える。

籠を置くと、そばの建物の中にある並べられた籠を見る。汚れ物ではなく、日の当たった洗濯済みのものだ。

持ち手にかけられた木札を見る。植物を模した絵と数字が書かれている。

女官の中には字が読めないものもいる、なんせ人さらいのごとく攫(さら)われたものさえいるのだから。宮廷に連れ込まれる前に最低限の礼儀くらいは教えられるが、文字となると難しい。識字率は田舎の娘で半分越せばいいほうなのである。

大きくなり過ぎた後宮の弊害(へいがい)といえる、量は増えたが質が悪い。
先帝の花の園には到底及ばないものの、妃、女官合わせて二千人、宦官を加えると三千の大所帯だった。

猫猫はその中で最下層の下女であり、官職すらもらっていない。特に後ろ盾もなく、攫われて数合わせにされた娘にはそれが妥当なところである。まあ、牡丹のような豊満な肉体や、満月のような白い肌でも持っていればまだ、下妃の位につける可能性もあったかもしれないが、猫猫の持つのはそばかすの浮いた健康的な肌と枯れ枝のような手足くらいである。

（はやく仕事終わらせよう）

梅の花と『壱七』と書かれた札の籠を見つけると、小走りに歩く。重く曇った空が泣き出す前に部屋に戻りたかった。

籠の洗濯物の主は、下級妃嬪（かきゅうひひん）である。与えられた個室は他の下妃に比べ調度の質が豪華だが派手すぎる。部屋の主は、豪商の娘かなにかと予想される。位持ちともなれば自分専用の下女を持つことができるが、位の低い妃はせいぜい二人までしか置くことができない。ゆえに、猫猫のような特に仕えるべき主人のいない下女がこうして洗濯物を運んだりするのである。

下級妃嬪は後宮内で個室を持つことを許されているが、場所は宮内の端にあり、皇帝の目につくことはめったにない。それでも、一度でも夜伽（よとぎ）を命じられれば部屋の移動ができ、二度目の御手付きは出世を意味している。

一方、食指（しょくし）を動かされることなく適齢を過ぎた妃は、よほど実家の権力がない限り位が下げられるなり、最悪、下賜（かし）されてしまう。それが不幸かどうかは相手にもよるが、宦官（かんがん）に下賜されることを官女たちは一番恐れているようだ。

猫猫は扉を軽く叩く。

「そこにおいといて」

扉を開け無愛想な返事をするのは、部屋付の侍女だった。
中では、甘ったるい匂いを漂わせた妃が酒杯を揺らしている。
宮内に入る前は誉めそやされた美しい容姿であるが、所詮、井の中の蛙だったのであろう。絢爛（けんらん）の花々に気圧され、鼻っ柱を折られ、最近は部屋の外にも出ようとしなくなった。

（部屋の中じゃあ、だれも迎えに来てくれないよ）

猫猫は隣の部屋の洗濯籠をもらうと、また洗い場に戻った。

仕事はまだたくさん残っている。
好きできたわけではないが、お給金はいただいているのでその分の働きはするつもりである。

基本は真面目、それが元薬屋猫猫である。

大人しく働いていればそのうち出られる。
まさか、御手付きになることはありえないだろう。

残念なことに猫猫の考えは甘かったといえる。
何が起こるかわからない、それが人生というものだ。

齢十七の娘にしては達観した思考の持ち主であるが、それでも抑えられないものがあった。

好奇心と知識欲。

そして、ほんの少しの正義感。

この数日後、猫猫はある怪奇の真相を暴くことになる。

後宮で生まれる乳幼児の連続死。

先代の側室の呪いだと言われたそれは猫猫にとって怪奇でもなんでもなかった。

## 2　二人の妃

「あーあ、やっぱりそうなんだ」
「ええ、お医者様が入っていったのを見たって」

汁物をすすりながら猫猫は耳を傾ける。広い食堂には数百人の下女が朝餉（あさげ）をいただいていた。内容は汁物と雑穀（ざっこく）の粥である。

斜め前に座っている下女が噂話を続ける。気の毒そうな表情をしているが、それ以上に好奇心が目の奥で輝いていた。

「玉葉（ギョクヨウ）さまのところも、梨花（リファ）さまのところにも」
「うわー、二人ともなんだ。まだ、半年と三か月だっけ？」
「そうそう、やっぱり呪いなのかしらね」

でてきた名前は、皇帝のお気に入りの妃たちの名前である。半年と三か月というのはそれぞれが生んだ宮のことであろう。

宮内では噂話が闊歩（かっぽ）する。それは、帝の御手付きの宮女の話やお世継ぎについて、はたまたいじめや僻（ひが）みによる悪評もあれば、うだる暑さにふさわしい怪談めいたものまである。

「そうよね、でなければ三人も亡くなられるわけないわ」

それは、妃たちの生んだ子ども、つまり世継ぎとなられる宮たちのことを指していた。東宮時代に一人、皇帝になられてから二人、どれも乳幼児のころに見まかられている。幼子の死亡率が高いのは当たり前であるが、殿上人の子が三人ともとなるとおかしい。
現在、玉葉妃と梨花妃の二人の子どもだけが生き残っている。

（毒殺ではなかろうか？）

白湯を含みながら猫猫は考えるがそれは違うと結論に至る。
三人の子どものうち、二人は公主だったからだ。男子にのみ継承権の与えられる中で、姫君を殺す理由などほとんどない。

前に座っている二人は箸も進めず、呪いだの祟りだの言っている。

（だからといって呪いはねえ）

くだらない、その一言である。呪いをかけるだけで一族郎党皆殺しとなる法がある中に猫猫の考えはむしろ異端といえる。しかし、猫猫の頭にはそれが言い切れる根拠となる知識があった。

（なんらかの病気か？もしかして遺伝的なもの？どういうふうに亡くなられたのだろう？）

無愛想で無口と言われた下女がおしゃべりな下女たちに話しかけたのはそのときだった。

好奇心に負けて後悔するのはそれからしばらくのことである。

「くわしくは知らないけど、皆、だんだん弱っていったんだってー」

おしゃべりな下女、小蘭は猫猫が話しかけてきたことに興味を持っ

たらしく、その後もことあるごとに噂話を教えてくれた。

「お医者さまの訪問回数から、梨花さまのほうが重いのかしら？」

窓の桟を絞った雑巾で拭きながら言った。

「梨花さまご自身？」

「ええ、母子ともによ」

医師が梨花妃のほうに出向くのは、病の重さというより東宮だからであろう。玉葉妃の子は公主である。

帝のご寵愛は玉葉妃のほうに重いが、生まれてくる子に性差があればどちらを重きに置くかは明白である。

「さすがに詳しい症状はわからないけど、頭痛とか腹痛とか、吐き気もあるっていうけど」

小蘭は知っていることをすべて話すと満足したらしく、次の仕事に向かう。

猫猫はお礼代わりに、甘草入りの茶を渡す。中庭の隅に生えていたもので作ったのだ。薬臭いが甘味は強い。甘味を滅多に食べられない下女はとても喜んでくれた。

（頭痛に腹痛に吐き気か）

思い当る症状だったが、決定打はない。

予測だけで物事を考えるのはいけないと、散々おやじどのから言われていた。

（ちいとばかし、行ってみるか）

猫猫は手早く仕事を終わらせることにした。

後宮と一括りに言ってもその規模は広大である。常時、二千人の官女に、泊まり込みの宦官（かんがん）は五百をこえる。

猫猫たち下女は大部屋に十人単位で詰め込まれているが、下妃は部屋持ち、中妃は棟持ち、上妃は宮持ちと大きくなり、食堂、庭園を含めればそこいらの町よりもずっと広いのだ。

ゆえに、猫猫は自分の持ち場である東側を出ることはない。用事を言いつけられたときぐらいしか離れる暇はない。

（用事がなければ作ればいいだけ）

猫猫は籠を持った女官に話しかける。女官の持っている籠には、上等の絹が入っており、西側の水場で洗わねばならなかった。水質に差があるのか、それとも洗う人間の違いなのか、東側で洗うとすぐに傷んでしまうのである。

猫猫は、絹の劣化は陰干しするかしないかの違いだとわかっていたが、それをいう必要はない。

「中央にいるというものすごく綺麗な宦官を見てみたい」

小蘭からついでに聞いた話をすると、快くかわってくれた。

色恋の刺激の少ないここでは、宦官ですら刺激の対象になるらしい。女官を辞めた後、宦官の妻になるという話はちらほら聞く。女色（にょしょく）に比べればまだ健全なのだろうが、やはり首を傾げてしまう。

（そのうち自分もこうなるのだろうか？）

己の問いかけに猫猫は腕を組んで唸（うな）った。

足早に洗濯籠を届けると、中央に位置する赤塗の建物を見る。東のはずれよりも洗練された、手の込んだ宮である。

現在、後宮で一番大きな部屋に住むのは、東宮のご生母梨花妃（リファ）である。帝が后を持たぬ中、男児を唯一持つ梨花妃がここの最高権力者といえる。

そんな中、見えた光景はさほど市井（しせい）と変わらないものだった。

罵（ののし）る女とうつむく女と狼狽（うろた）える女たちと仲裁する男である。

（妓楼（ぎろう）とあんまり変わらないな）

至極冷静な感想を持ち、第三者、つまり野次馬に加わる猫猫。

罵る女は後宮の最高権力者で、うつむく女はそれに次ぐ存在、狼狽えるのは侍女たちで、仲裁に入るのはすでに男でなくなった薬師だと、周りのささやきと風貌からわかった。

「おまえが悪いんだ。自分が娘を産んだからって、男子の吾子を呪い殺す気だろう！」

美しい顔は歪むとそれは恐ろしいものになる。幽鬼のような白い肌と悪鬼のごときまなざしは、頬に手を添える美女に向けられている。

「そんなわけないとわかっているでしょう。小鈴も同じように苦しんでいるのですから」

赤い髪に翡翠の目を持つ女性は、冷静に答える。西方の血を色濃く継ぐ玉葉妃は顔を上げると医者の顔を見る。

「ですので、娘のほうの容体も見ていただきたいのです」

仲裁に入ったものの、原因は医師にあるらしい。

医者が東宮ばかり見て、自分の娘を見ないことに抗議をしにきたようである。

母親としてはわからなくもないが、後宮という仕組みから男児優先は当然である。

医師にしてみれば、いわれのないと言いたい顔であるのだが。

（馬鹿だろう、あのやぶ）

妃二人のあんなに近くにいて気づかないとは。いや、それ以前に知らないのか？

乳幼児の死亡、頭痛、腹痛、吐き気。そして、梨花妃の白い肌とおぼつかない身体。

ぶつぶつとひとりごとをつぶやきながら、猫猫は騒動の場を後にした。

（なにか、書き物はないか）

と、考えながら。

よって、通り過ぎる人物に目もくれなかった。

# 3　壬氏

「またやってるな」

壬氏（ジンシ）は端正な顔に憂（うれ）いを含む。女性と見まごうような繊細な輪郭に、切れ長の目、絹の髪を布で包んで残りを背中に流している。

宮中の花たちがこんなところで騒ぎを起こすなどはしたない、それを収めるのが彼の仕事の一つだった。

人だかりを分けようとする中、一人だけ我関せずという雰囲気で歩いてくるものがいる。

小柄な下女で鼻から頬にかけてそばかすが密集している。他は目立った風貌ではないものの、自分に目もくれずなにかひとりごとをいう姿が印象に残った。

ただ、それだけのはずだった。

東宮（とうぐう）が身まかられたという話が回ってきたのは、それからひと月もしない頃であろうか。

泣きわめく梨花妃（リファ）は、先日よりもさらにやせ細り、大輪の薔薇（ばら）といわれた頃の面影はなかった。息子と同じ病に侵されているのか、それとも気の病が重いのか。

あれでは、次の子を望むこともできまい。

東宮の異母姉である鈴麗（リンリー）公主は、一時の体調不良から状態を持ち直し、母とともに東宮を失った帝を慰めるようになっていた。帝の通いようから次の子も近いかもしれない。

同じように公主と東宮は原因不明の病にかかっていた。一方は持ち直し、一方は倒れた。

年齢による違いであろうか、三か月の差とはいえ乳幼児の体力には大きく影響を受ける。

しかし、梨花妃はどうであろう？

公主が持ち直したのなら、梨花妃も持ち直してもいいであろうに。

それとも、息子を亡くした精神的なものであろうか。

壬氏は頭にぐるぐると考えをめぐらせながらも、書類に目を通し、判を押していく。

なにか違いがあるとすれば玉葉（ギョクヨウ）妃のほうだろうか。

「少し留守にする」

最後の判を押し終わると、壬氏は部屋を後にした。

蒸したての万頭（まんじゅう）のような頬をした公主は、赤子の無邪気な笑顔を見せる。小さな手のひらはぎゅっと拳を作り、壬氏の人差し指を掴ん

でいた。

「これこれ、はなしなさい」

赤毛の美女は優しく娘をおくるみに包むと、籠の中に寝かせた。
赤子は暑いとおくるみをはねのけ、来訪者のほうを見ては言葉にもならない声を機嫌よく鳴らしていた。

「なにか聞きたいことでもあるようですが」

聡明な妃は、壬氏の思惑を感じ取っているようだ。

「なぜ、公主殿は持ち直されたのですか？」

単刀直入に申し上げると、玉葉妃はふっと小さな笑みをこぼすと懐から布きれを取り出した。
はさみも使わず裂いた布に、不恰好（ぶかっこう）な字が書いてある。字が汚いというわけでなく、草の汁を使って書いたため、にじんで読みにくくなっているのだ。

『おしろいはどく、赤子（あかご）にふれさすな』

たどたどしく書いたのもわざとであろうか？
壬氏は首を傾げる。

「おしろいですか？」
「ええ」

玉葉妃は乳母に公主を任せると、引出から何かを取り出す。
布にくるまれたそれは、陶器製の器だった。蓋を開けると、白い粉

が舞う。

「おしろい？」

「ええ、おしろいです」

ただ白いだけの粉になにがあるのだろうとつまむ。そういえば、玉葉妃は元々肌が美しいのでおしろいをしておらず、梨花妃は顔色が悪いのをごまかすように塗りたくっていた。

「公主は食いしん坊でして、私の乳だけでは足りず、乳母に足りない分を飲ませてもらっていたのです」

赤子を生まれてすぐなくしたものを、乳母として雇い入れたのだ。

「それは、乳母が使っていたものです。ほかのおしろいに比べて白さが際立つと好んで使っていたものです」

「その乳母は？」

「体調が悪かったようなので暇を出しました。退職金も十分与えたはずです」

理知的で優しすぎる妃の言葉だ。

おしろいの中になにかしら毒があれば、どうだろう。

使うものが母親ならば、胎児に影響を与え、生まれた後も授乳の際口に含むこともあるだろう。

壬氏も玉葉妃もそれがどんなものかわからない、ただそれが東宮を殺した毒だということは理解できた。

「無知は罪ですね。赤子の口に入るものなら、もっと気にかけてい

ればよかった」
「それは私も同様です」

結果、帝の子を四人も失わせてしまった。母の胎内にいたものを加えたら、もっといるのかもしれない。

「梨花妃にも伝えましたが、私が何を言っても逆効果だったみたいです」

梨花妃は今も目にくまのはった顔色の悪い肌をおしろいで塗りたくっている。それが毒とも知らずに。

壬氏は生成りの布きれを見る。不思議とどこかで見覚えがあるような気がする。
たどたどしい字は、筆跡をごまかすようにも見える。しかし、どこかしら女性的な文字に見えた。

「いったい、だれがこんなものを」
「あの日、私が薬師に娘を見てもらうようにいったときです。結局、貴方の手を煩わせただけの後、窓辺に置いてありました。石楠花（しゃくなげ）の枝に結んで」

では、あの騒動が原因でなにかしら気づいたものが助言したというのだろうか。
いったい、だれが。

「宮中の医師はそのような遠回しなことをしないでしょう」
「ええ、最後まで東宮の処置がわからないようでしたから」

あのときの騒動。

そういえば、野次馬の中にひとりわれ関せずという下女がいたというのを思い出した。
なにかをぶつぶつ言っていた。
なにを言っていた?
『なにか、書き物はないか?』
ふと、なにかが頭の中につながった。
くくくっと、笑いがこぼれる。天女のような艶やかな笑みが浮かんだ。
「玉葉妃、この文の主、見つけたらどうなさいます?」
「それはもう、恩人ですもの。お礼をしなくてはね」
「了解しました。これはしばらく預かってよいですか」
「朗報を期待します」
壬氏はさわり心地のある布に記憶をたどらせた。
「寵妃の願いとあらば、必ずや見つけねばならぬな」
天女の笑みに、宝探しをする子どもの無邪気さが加わった。

## 4　天女の微笑（前書き）

役職とか規則とか深く考えずに読んでいただけると助かります。

## 4　天女の微笑

東宮が身まかられたのを知ったのは、夕餉の際に黒い帯が配られたときだった。

喪に服す意味合いで七日間つけるのである。

その際、食事にはただでさえ少ない肉類が全くなかったので口をとがらすものもいた。

端女の食事は一日二回、雑穀と汁物、時折、菜が一品振舞われる程度である。やせぎすの猫猫には十分な量であるが、足りないと思うものがほとんどだろう。

下女と一括りにいってもいろんなものがいる。

農民出身のものもいれば、町娘もおり、数は少ないものの官の娘もいた。親が官であればいくらか待遇はいいはずだが、それでも下働きの理由となると本人の素養の問題である。文字の読み書きもできないものを部屋持ちの妃にできるわけがない。妃というのは、職業である。

（結局、意味なかったのか？）

猫猫は東宮の病の原因を知っていた。

梨花妃と侍女たちは真っ白なおしろいをふんだんに使っていた。庶民には手を出せない高級品だ。

それは妓楼の高級遊女たちも使っていた。一晩で農民一生分の銀を稼ぐ妓女もいる、自分で買うものもいれば、貢物にもらうものもいた。

顔から首にかけて真っ白にはたかれるそれは、妓女の身体を蝕(むしば)み、幾人かを死に至らしめた。
おやじが「やめろ」といっても使い続けたからだ。
やせ細り、衰弱して死んでいく妓女を猫猫はおやじのそばで幾人も見てきた。

命と美貌を天秤にかけ、結局どちらも失ったのだ。

だから手短な枝を折り、簡単な文を書いて二人の妃の元に置いた。
まあ、紙も筆も調達できない端女の書いた警告を信じるとは思えなかったが。

喪が明けて、だれも黒い帯が見かけられなくなった頃、玉葉妃(ギョクヨウ)の噂を聞いた。東宮を失い、傷心の帝は、生き残った公主を慈しんでいるらしい。
同じくわが子を失った梨花妃(リファ)のもとに通う話は聞こえない。

（都合のよいことで）

猫猫は魚のかけらがほんの少し入った汁を飲み干すと、食器を片づけて仕事場に向かった。

「呼び出し、ですか？」

洗濯籠を抱えた猫猫は宦官（かんがん）に呼び止められた。
中央にある宮官長の部屋に来いとのこと。
宮官とは、後宮を大きく分ける三部門の一つであり、下位に位置する女官のことをいう。他の二つ、部屋持ちの妃たちは内官、宦官は内侍省にあたる。

（なんの用だろう？）

宦官は周りの下女にも話しかけている。どうやら自分だけではないらしい。

きっと人出が足りないのだろう。
猫猫は籠を部屋の前に置くと、宦官の後について行った。

宮官長の棟（むね）は後宮と外部をつなぐ四門のうち正門のそばにある。帝が後宮に訪れる際、ここの門を必ず通る。

呼び出されたとはいえ、あまり居心地のいい場所ではなかった。ようは頭（ず）が高いというものである。

隣の内官長の棟に比べ幾分劣るものの、中級妃の棟よりも豪奢な造りである。欄干の一つ一つに彫り物が施されており、朱の柱には鮮やかな龍が巻き付いている。

促（うなが）されるまま部屋の中に入ると、大きな机がひとつあるだけで存外殺風景であった。中には猫猫たち以外の下女が十人ほど集まってお

り、不安となにかしらの期待とそしてどこか興奮したような表情を浮かべている。

「はい、ここまで。おまえらは帰っていいぞ」

（あれ？）

なぜだか不自然に区切られてしまった。猫猫のみ部屋に入り、残りの下女はいぶかしげに帰っていく。

定員というには部屋はまだ広いようであるが。

猫猫は首を傾げなら、周りを見ると女官たちの視線が一つに集まっていることに気付く。

部屋の隅に目立たぬように座る女性と、それに仕える宦官、少し離れて年嵩のいった女性がいる。中年の女性は宮官長であると記憶しているが、それよりも偉そうな女性は何なのだろう。

（むむ？）

女性にしては肩幅が広く、簡素な服を着ている。髪を巾でまとめ、残りを下ろしている。

（男なのか？）

天女のような柔らかい笑みを浮かべ女官たちを見ている。宮官長が赤くなっている。

なるほど、皆が頬を染めるわけがわかる。

噂に聞いていたものすごく美しい宦官というのはこの男のことだろうと猫猫は思った。
絹糸のような髪、流れるような輪郭、切れ長の目と柳のような眉を持った絵巻物の天女もこれほど美しくはあるまい。

（もったいないなあ）

顔を染めることなく思ったのがそんな言葉である。大切なものがなくなってしまったので、子を成せないわけだ。あの男の子どもであれば、どれほど鑑賞に優れたものが生まれよう。

しかし、あれだけ人間離れした美貌があれば、皇帝も籠絡（ろうらく）することもできるだろうと、不遜（ふそん）なことを考えていると、男は流れるような動きで立ち上がった。
机に向かい、筆をとると優美な動きでなにかをさらさらと書く。
にっこりと甘露（かんろ）のような笑みを浮かべ、男は書き物を見せた。

猫猫は固まった。

『そこのそばかすの女、おまえは居残りだ』

要約すればこんなことを書かれていた。

猫猫の動きを見逃さなかったのだろう。
満面の笑みが浮かんでいた。

男は書き物をしまうと、手のひらを二回叩いた。

「今日はこれで解散だ。部屋に戻っていいぞ」

下女たちはいぶかしみながら、後ろ髪ひかれながらも部屋を出る。
先ほどの書き物が何の意味を示しているのかわからないまま。

部屋を出る下女たちが皆小柄で、そばかすの目立つ容貌をしていることに猫猫は気が付いた。しかし、書き物を見ても何の反応も示さなかったのは読めなかったのだろう。
あの書き物は猫猫を指していたものではなかった。

他の下女とともに部屋を出ようとすると、がっしりと手のひらが肩に食い込んでいた。

恐る恐る振り向くと、まぶしくて目がつぶれるような天女の笑みがあった。

「だめじゃないか。君は居残りだよね」

いうまでもなく有無を言わさなかった。

## 5　部屋付

「不思議だよねえ、話に聞くと君は文字が読めないってことになってるんだけど」

「はい、卑賤（ひせん）の生まれでございまして。なにかの間違えでしょう」

（誰が教えるか）

とは、口が裂けても言わない。

しらばっくれる気満々である。

文字が読める、読めないで下女の扱いはそれぞれ違う。読めるほうが読めるほうで、読めないほうは読めないほうで役に立つのであるが、無知なふりをしていたほうが世の中立ち回り安いのである。

美しい宦官（かんがん）は壬氏（ジンシ）と名乗った。

虫も殺さないような優美な笑みなのに、なにやら蠢（うごめ）くものを感じる。

でなければ、こうして猫猫（マオマオ）を窮地に立てることはできまい。

壬氏は黙ってついてこいといった。

首を横に振れば、軽く首がとぶ使い捨ての端女（はしため）は素直についていくしかなく、なにがこれから起こるのか、それをどううまく対処するのか思いをめぐらせていた。

こうして壬氏に連れて行かれる理由に思い当らないわけではなかったが、どうしてそれがばれたのか不思議だった。

妃に文を送ったことに。

わざとらしく壬氏の手には、布きれがあった。それには、汚いたど

たどしい文字が書かれていることであろう。

字が書けることは誰にも黙っていたし、薬屋をしていて毒物に詳しいことも黙っている。いうまでもなく、筆跡でばれることはない。

周りを確認して置いてきたはずだが、誰かに見られていたということだろうか。

小柄でそばかすのある下女に目安をつけたのだ。

まず、先に文字が書けるものを集め、筆跡を集めたに違いない。字というものは崩して書いてもくせが残るものである。

その中に適合者がいないとなると、次は文字を書けないものを集める。

読める、読めないの判断は先ほどの通りである。

（なんて疑い深いんだ。ってか暇人すぎるだろ）

悪態をついているうちに目的地に到着した。

案の定、玉葉妃（ギョクヨウ）の住まう宮であった。

壬氏が扉を叩くと、凛とした声が短く「どうぞ」といった。

中に入ると赤い髪の美女が柔らかい巻き毛の赤子を愛おしそうに抱いていた。

赤子の頬は薔薇色で、母親譲りの色素の薄い肌をしている。

健康そのもので、半開きの口から可愛らしい寝息が聞こえる。

「かのものを連れてまいりました」

「お手数をかけました」

先ほどの崩れた口調ではない。
分をわきまえた言動である。

玉葉妃は壬氏とはまた違った温かい笑みを浮かべると、猫猫に頭を下げた。

猫猫は驚いて目を見開く。

「そのようなことをされる身分ではございません」

失礼のないように、言葉を選びながら述べる。

「いいえ。私の感謝はこれだけではありません。やや子の恩人ですもの」

「なにか勘違いなされているだけです。きっと人違いではありませんか」

冷や汗をかく。
丁寧に言ったところで否定ということに変わりない。
首ははねられたくないが、関わり合いにもなりたくない。長いものに巻かれたくないのである。

玉葉妃が少し困った顔をしたのに気付いた壬氏は、ぴらぴらと布きれを見せつける。

「これは下女の仕事着に使われる布だって知っていますか？」

「そういえば、似ていますね」

あくまでしらばっくれる。

無意味だとわかっていても。

「ええ、尚服に携わる下女用のものですね」

宮官は六つの尚に分けられる。衣服に携わるのが尚服で、洗濯係を主とする猫猫はそこに分けられる。

生成りの裳（スカート）は、壬氏の持っている布と同じ色をしている。裳の内側、ひだでうまく隠れている部分に、奇妙な縫い目があることも調べればわかることだろう。

つまり、証拠はその場にあるということだ。

壬氏が玉葉妃の前で無礼な真似をするとは思わないが、しないとも限らない。

覚悟を決めるしかなかった。

「私は何をすればよろしいのでしょうか？」

二人は顔を見合わせると、肯定の意味でとらえた。

どちらも、目がつぶれるほどの優しい笑みを浮かべる。

安らかな赤子の寝息が聞こえる中で、猫猫は消え去りそうな小さなため息をついた。

猫猫は翌日から、ほとんど何もない荷物をまとめなくてはならなか

った。

小蘭（シャオラン）や同部屋のものは皆うらやましそうにしている。

どうして、そうなったのか追及してくる。

猫猫は乾いた笑みを浮かべはぐらかすしかなかった。

猫猫は、皇帝の寵妃（ちょうひ）の侍女となった。

まあ、いわゆる出世である。

# 6　毒見役

部屋付の女官、しかも帝の寵妃（ちょうひ）の侍女ともなれば、待遇は高くなる。
今まで金字塔（ピラミッド）の底辺にいた官位は真ん中くらいまで上がっている。
説明によると、給金も跳ね上がっているらしいが、その二割は実家
こと、売り飛ばされた先の商家に入る。

今までのたこ部屋でなく、狭いながら一室を与えられた。
菰（こも）を重ねて敷布（シーツ）をかけただけの布団から、寝台つきに階級が上がった。寝台二つ分の広さしかない部屋であるが、朝同僚の身体を踏まずに起きることができるのは正直うれしかった。
うれしい理由はもう一つあるのだが、これは後程わかる。

玉葉妃（ギョクヨウ）の住まう翡翠宮（ひすいきゅう）には、猫猫（マオマオ）以外に四人の侍女がついている。
公主が離乳食を取り始めたので、乳母を新たに雇うことはなかった。
梨花妃（リファ）が十人以上つけているのに比べると、随分数が少ない。

正直、最下層の小間使いだったのがいきなり同僚になりましたといわれて侍女たちは難色を見せたのだが、猫猫が思うような嫌がらせはなかった。
むしろ、同情的な目で見られていた。

（なぜに？）

その理由はすぐにわかった。

薬膳（やくぜん）をふんだんに使った宮廷料理が目の前にある。
玉葉妃の侍女頭である紅娘（ホンニャン）は、菜を一つずつ小皿に盛ると猫猫の前に置いた。

すまなそうに玉葉妃がこちらを見ているが、止める様子はない。
残り三人の侍女たちは、哀れな目でこちらを見ている。

毒見役というものである。

東宮のことで皆、神経質になっている。
公主が病になったのもどこからか毒が紛れ込んでいたのではないかという噂が回っていたからだ。毒の元を知らされていない侍女たちは、何に紛れ込んでいるかわからない毒を恐れていたに違いない。

そこで、毒見役専門に下女が送られてきたのなら、使い捨ての駒としてみてもおかしくない。

玉葉妃だけでなく、公主の離乳食、皇帝訪問の折の滋養料理（じょうりょうり）も毒見のうちに含まれる。

玉葉妃の懐妊がわかった頃、二回ほど毒が盛られていることがあったらしい。一人は軽いものですんだが、もう一人は神経をやられて手足が動けなくなっている。

今まで恐る恐る毒見役をやってきた侍女たちは、正直、感謝をしていることだろう。

猫猫は盛られた皿を見ると眉を寄せる。陶器製の皿だ。

（毒が怖いなら銀にするのは基本でしょうに）

箸でつまむとなますの具をじっくり見る。

匂いを嗅ぐ。

舌の上にのせて、しびれがないのを確かめるとゆっくり嚥下した。

（正直、毒見に向かないのだが）

即効性の毒ならともかく、遅行性の毒であれば猫猫に毒見を頼んでも意味がないのである。

実験と称し、少しずつ毒に慣らした身体を作ってきた猫猫は、おそらく多くの毒は効かなくなっていることだろう。

これは、薬屋の仕事としてではなく、猫猫の知的欲求を満たすための行為である。時代と場所が違えばきっとこう呼ばれていることだろう、『狂科学者（マッドサイエンティスト）』と。

薬師の技術を教えてくれたおやじどのですら、呆れているほどだった。

身体の変化ではなく、自分の知識の中でそれらしい毒はないと確認すると、ようやく玉葉妃の食事が始まる。

次は、味気ない離乳食の番だった。

「皿は銀製のものに替えたほうがよろしいと思います」

感情をこめることなく上司の紅娘に伝えた。

一日目の活動報告として、紅娘（ホンニャン）の部屋に呼び出されたのだ。部屋は広いが華美な装飾はなく、実用的な彼女の人柄を表しているようである。

三十路を前にした黒髪の美しい侍女頭は溜息をつく。

「ほんと、壬氏さまのいったとおりね」

呆れた顔で、わざと銀食器を使わなかったことを告白した。

壬氏の指示だった。

おそらく毒見役にするように命じたのもあの男だろう。

猫猫は無愛想な顔がさらに機嫌悪くなるのをこらえながら紅娘の話を聞く。

「あなたがどういう理由で、その知識を隠していたかしらないけど、まさに毒にも薬にもなる能力ね。字が書けることも言っていれば、お給金はもっともらえたはずだけど」

「薬屋の真似事を生業にしていたからです。かどわかされて連れてこられたのに、人さらいどもに今も給金の一部が送られていると考えると腸（はらわた）が煮えくり返ります」

感情が高ぶり、少々荒い言葉になったが、侍女頭は咎めることはなかった。

「つまり、自分の給料が減ってでも、そいつらに酒代を与えてなるものかということね」

賢い女官は猫猫の動機を理解してくれたらしい。

「無能なら二年の奉公でいくらでも替えがきくものだしね」

ついでに理解しなくていいところまで、察してくれた。

紅娘は卓子の上にある水差しを取ると、猫猫に持たせた。

「これは……」

猫猫がたずねる間もなく、彼女の手首に痛みが走った。衝撃で持たされた水差しが床に落ちる。陶器製のそれに大きなひびが入る。

「あらら、これって結構高いのよ。下女程度のお給金じゃあ、払えないくらいにね。これじゃあ、実家への仕送りもできないわね。むしろ請求するくらいじゃないと」

猫猫は紅娘がいわんとしていることがわかったらしく、無表情の中に皮肉めいた笑みを浮かべていた。

「もうしわけありません。毎月、仕送る分から差し引いてください。足りなければ、私の手持ちのほうからもお願いします」

「ええ、宮官長のところで手続きしておくから。それと」

紅娘は落ちた水差しを卓子の上に置き、引出から木簡を取り出した。さらさらと筆を滑らせる。

「これは、毒見役の追加給金の明細よ。危険手当というところね。気になる点があれば言ってちょうだい」

金額は、猫猫の現在の給料とほぼ同額だった。手数料でとられる分

がないだけ、猫猫は得したことになる。

（飴の使い方がうまいことで）

猫猫は深く頭を下げると部屋をあとにした。

# 7　媚薬

元々いた四人の侍女たちはたいへん働き者であった。広さはそれほどないものの、翡翠宮はほぼ四人で回っている。尚寝、つまり部屋掃除専門の下女も来るのだが、寝所はもとより内部の掃除はすべて四人の侍女たちで終わらせる。ちなみに、本来の侍女の仕事の区分を外れている。

なので、新参者の猫猫（マオマオ）の仕事はご飯を食べることくらいしかないわけだ。

一番嫌な仕事を押し付けたことに罪悪感を持っているのか、それとも自分の領域（テリトリー）を荒らされたくないのか、紅娘（ホンニャン）以外の侍女は誰も猫猫に仕事を押し付けることはなかった。むしろ、手伝おうとするのを「いいのよ」とやんわりと断って、部屋に押し込めていた。

（落ち着かない）

小部屋に押し込まれて、呼ばれるのは二回の食事と昼の茶会、そして数日に一度訪れる帝の滋養強壮料理を食べることくらいである。たまに、紅娘が気をきかせて用事を頼むのだがすぐに終わる簡単な仕事だけである。

（なにこれ、食っちゃ寝だろ）

毒見に加えて、食事も以前より豪華になった。茶会には甘い菓子があり、余れば猫猫にも配られる。

蟻（あり）のように働くことがなくなったので、栄養はそのまま肉になっていった。

（家畜にでもなった気分だ）

毒見役をやるにあたり、猫猫に不適な点はもう一つある。
猫猫はもとから痩せているので、毒にあたって痩せたとしてもわかりにくいからだ。
それに致死量は体の大きさに比例する。太ればそれだけ生き残る可能性が高くなる。

猫猫としては痩せるほどの毒がわからないわけでなく、致死量をこえても生き残る自信があるのだが周りはそうでないらしい。
小柄でやせぎすな猫猫は幼く見えるらしい、可哀そうな使い捨ての駒に三人の侍女たちは同情していた。
お腹いっぱいでも粥はおかわりをつがれ、菜の具は他のものより一つ多い。

（妓楼の小姐（ねえちゃん）たちを思い出す）

無愛想で無口で可愛げのない生き物であるはずが、なぜか遊女たちに可愛がられていた。ことあるごとに、菓子を持たされ、飯を食わされた。

――ちなみに猫猫は気づいていないようであるが、可愛がられる理由はあったりする。

猫猫の左腕には無数の傷がある。
切り傷、刺し傷、火傷の痕に針のようなものが刺された痕。
小柄でやせぎすで腕には無数の傷。
よく腕から包帯が巻かれ、たまに青白い顔で往来で倒れることもあった。

無愛想で無口なのも彼女が今まで受けていた仕打ちの結果だと皆が涙を飲んだ。

皆、虐待を受けているものだと思っているようだが、真実は違う。

全部、猫猫本人がやったことだ。

傷薬や化膿止めの効能を調べ、毒を少しずつ飲み耐性をつけ、時に自分から毒蛇を噛ませることもあった。たまに量を間違えて、倒れることもあった。

ゆえに傷は利き腕でない左にのみ集中している。

別に痛みが好きという被虐的な趣味はかけらもないが、知的欲求が薬と毒物に傾きすぎている点でごく普通の娘とはかけ離れていた。

そんな娘を持って迷惑きわまりないのがおやじどのである。

花街に暮らす自分の娘が遊女以外の道を進めるようにと、薬の知識と文字を教えたというのに、いつのまにいわれなき誹謗中傷を受けるようになった。

一部のものは理解していたが、多くのものはおやじどのに冷たい眼を向けていた。

年頃の娘が、実験と称し自傷行為を繰り返すなど思いもしない。

などというわけで、親に虐待された挙句、後宮に売りとばされ、使い捨ての毒見にさせられた哀れな娘と皆に思われている。

そんなこととはつゆ知らず――

（このままでは豚になる）

そんなことを考えるようになった頃、猫猫の前に嫌な訪問者が現れ

るのであった。

人間離れした美貌を持つ青年は、天上人の笑みをたやさず浮かべていた。

三人の侍女は頬を染めながら客人を迎える茶を用意する。

壁の向こうから小競り合いが聞こえるところをみると、だれが準備するのか言い争っているらしい。

呆れた紅娘（ホンニャン）は自ら茶器を用意すると、三人に部屋に戻るように指示した。

毒見役の猫猫は銀の茶椀を持つと匂いを嗅いで口に含んだ。

さっきから壬氏（ジンシ）がずっとこっちを見ているので居たたまれない。目線を合わせないように目を細める。

若い娘であれば、たとえ宦官（かんがん）であろうともこれだけの美丈夫に見つめられて悪い気はしないはずだが猫猫はそうではない。興味が他人のそれよりもずれたところにあるため、壬氏が天女のように美しいと理解していても、一線を引いてみている。

「これは貰いものなんだが、味見してくれないか？」

籠のなかに、包子（パオズ）が入っている。猫猫はつまんで中を割ってみる。

餡にひき肉と野菜が詰まっている。

匂いを嗅ぐとどこかで嗅いだことのある薬草の匂いがした。

一昨日食べた強壮剤と同じものだ。

「催淫剤(さいいんざい)入りですね」

「食べなくてもわかるんだ」

「健康には害はありませんので、お持ち帰りください。美味しくいただいてください」

「いや、貰った相手を考えると素直に食べれないもんだろ」

「ええ、今晩あたり訪問があるかもしれませんね」

淡々と述べる猫猫に、想像したものと当てが外れた壬氏はなんともいえない顔をしている。知っていて催淫剤入りの饅頭(まんじゅう)を食べさせようとしたのだ、毛虫を見るような目で見ないだけましなのである。ところでどんな相手からもらったものであろう。

二人のやり取りに、玉葉妃は鈴の鳴るような声で笑う。足元には寝息を立てる小鈴(シャオリン)公主がいる。

猫猫は一礼すると客間をあとにしようとする。

「ちょっと、待った」

「なにか御用でしょうか？」

壬氏は玉葉妃(ギョクヨウ)と目を合わせ、二人は頷いている。どうやら、猫猫が来る前に本題は伝えられているようだ。

「媚薬を作ってくれないか？」

一瞬、猫猫の瞳に驚きと好奇の目が浮かんだ。

その薬をどう使うのかは知らないが、それを作る過程は猫猫にとって至福の時に違いなかった。

唇が笑みを作るのを押さえつつ、猫猫はこう述べた。

「時間と材料と道具。それがあれば」

媚薬に準ずるものなら作れます、と。

# 8　薬棚

どうしたものか。

柳の眉に憂いをひそめ、腕を組んでいる。

性別さえ違えば傾国（けいこく）になるといわれた壬氏（ジンシ）であるが、本人がその気であれば性別など意味がないものといえる。

今日もまた後宮の中級妃ひとり、下級妃ふたり、殿中でも武官と文官ひとりずつに声をかけられた。武官には強壮剤入りの点心までいただいたので、今日は夜勤を行うことなく宮中の自室に戻っている。自衛のためであり、さぼりではない。

机の上にある巻物にさらさらと名前を書く。

今日声をかけてきた妃たちの名前である。帝の御通りがないからといって、違う男を寝所に引き入れようなど甚（はなは）だしい。正式な報告ではないものの、今後、沙汰（さた）が下ることであろう。

自分の美貌が女官たちの試金石だということを籠の小鳥たちは幾人わかっているだろうか。

妃の位は、まず両親の家柄に加え、美しさ、賢さを基準に選ばれる。家柄、美貌に比べ、賢さというのは難しい。国母となるにふさわしい教養を持ち、それに加えた貞操観念も持ち合わせねばならない。

意地の悪い我が皇帝は、選出基準に壬氏（ジンシ）を使うことにした。

玉葉妃（ギョクヨウ）と梨花妃（リファ）を薦めたのも壬氏である。玉葉妃は思慮深く謙虚である、梨花妃は感情的な性格があるものの誰よりも上に立つにふさ

わしい気質を持っている。
どちらも皇帝に対する忠誠を持ち、邪まな感情は見当たらなかった。
梨花妃に至っては心酔の域に達していた。
吾主(わがあるじ)ながらひどいかたである。

自分に国に都合のよい妃を揃えさせ、子を産ませ、その能力がないとあらば切り捨てる。

今後、寵愛は玉葉妃に傾き続けるであろう。
幽鬼のようにやせ細った梨花妃の元に通ったのは、東宮が亡くなったときが最後だった。

梨花妃以外にも必要のなくなった妃は幾人もいる。それらは、折をみて実家に帰され、また下賜(かし)される。

重ねられた書類を一枚引き抜いた。
位は正四品、中級妃にあたる。名を芙蓉(フヨウ)といった。
先日、異民族を撃退した勲功(くんこう)としてとある武官に下賜されることになった妃である。

「さてさて、上手くいくことでしょうか？」

己の頭の設計通りに事を運べば、問題はないはずである。
それには、無愛想な薬師どのの協力がいくらか占めているかもしれない。

自分を欲情の相手としない人間は皆無ではないが、毛虫のごとく見られたのは初めてである。
本人は上手く隠したつもりだろうが、表情にうっすら浮かんだ侮蔑(ぶべつ)

の目は隠しきれていない。

思わず笑いがこみ上げる。天上から落ちる甘露のような笑みに少しだけ底意地の悪さをまじえて。

別に被虐嗜好はないのだが、妙に面白かった。新しい玩具（おもちゃ）を手に入れた気分である。

「今後、どうなることやら」

壬氏は書類を硯（すずり）の下に置くと、眠りにつくことにした。

夜中、訪問者が来ても問題ないように、施錠はしっかりとかけて。

○●○

万能薬という言葉はあるが、実際万能である薬は存在しない。

おやじどのの言葉に反感を持っていた頃が猫猫（マオマオ）にもあった。

どんな病にも、どんな人間にも効く薬を作りたい。そんなわけで、他人が目を背けたくなる傷を作り、新しい薬を開発してきたのであるが万能である薬はいまのところ完成の目途はない。

大変気に食わないことであるが、壬氏の持ってきた話は猫猫の興味を持たせるに十分であった。

後宮に入ってからというものの、甘茶くらいしか作れなかったのだ。材料になる薬草は驚くくらい後宮内に生えていたのだが、道具もなく、大部屋で怪しげな行為もできずに我慢してきたのだ。

小部屋になって一番うれしいのはそこのところだろう。

材料の調達にとでかけるが、表向きの理由として洗濯籠を背負う。
紅娘(ホンニャン)の計らいで、今後洗濯係は猫猫になろう。

洗濯ものを届けに来たふりをして、前もっていわれていた医務室に入る。中には、以前、狼狽(うろた)えるしかなかったあの医者と、壬氏によくついている宦官(かんがん)がいた。

医師は薄いどじょうのようなひげを触れながら、値踏みするような目で猫猫を見る。
なぜこんな小娘が自分の領域を荒らすのだと言わんばかりだった。

（醜女(しこめ)をあまりじろじろみないでくださいまし）

医者に比べて宦官は主に接するように丁寧な動きで猫猫を案内する。

三方を薬棚で囲い込まれた部屋に入れられたとき、猫猫は後宮にきて一番の笑みを浮かべていた。頬は赤く染まり、眼はうるみ、一文字だった唇が柔らかい弧を描いている。
宦官が驚いた表情で猫猫を見るが、そんなの関係なかった。

引出の見出しを眺め、珍しい薬を見つけるなり踊るような奇妙な動きをする。喜びがあふれ出て、頭の中で納まりきれなかった。

「なんかの呪いか、なにかか？」

小一時間そんなことを繰り返したところだった。
いつのまにか現れた壬氏が奇異(きい)の目で猫猫を見ていた。

引出の端から順につかえそうな材料を集める。それぞれを薬包紙に包み、筆で名前を書く。まだ木簡が書物として使われる中で、ふんだんに紙を使うことは贅沢である。

どじょうひげの医師は、何者だとのぞいてくるので、宦官は戸を閉めた。宦官の名前は高順（ガオシュン）というらしい。

引出が高いところにあるのは、高順がとってくれる。その上司はなにもしない、しないならどこかいけよ、と無表情の奥に猫猫は思う。

引出の一番上に、猫猫は見覚えのある名前をみつけて身を乗り出した。

高順に手渡されたそれをみると、なんともいえない表情をする。

何かの種子が手のひらにおさまっている。

「これだけじゃあ、足りない」

「ならば、用意すればいいだけのことだ」

無駄に笑顔を振りまいてみていただけの美丈夫は簡単に言ってくれる。

「西の、さらに西の南方にあるものですよ」

「交易品を探せば見つかるだろう」

壬氏は種子を一つつまむ。杏仁（あんにん）に似た形をしたそれは、独特の匂いを発していた。

「これはなんというんだ？」

青年の質問に猫猫は答える。

「可可（カカオ）？です」

と。

# 9　可可？（前書き）

玉露で酔っぱらう人たちがいた頃の話です。

## 9　可可？

「お前の腕が想像以上のものだということがわかった」

壬氏（ジンシ）は呆れた声で猫猫にいった。

「私もここまでとは思いませんでした」

目の前の惨状になかば放心していた。

「ああ、そうだな」

いつもの無駄に輝いた笑みはない。

ただただ疲れた顔をしている。

「どうしてこうなったんだ」

それは、数時間前にさかのぼる。

届けられた可可（カカオ）？は、種子のままではなく粉末になったものだった。

他に材料として猫猫（マオマオ）が頼んだものはすべて翡翠宮（ひすいきゅう）の台所に運び込まれている。

三人の侍女たちは野次馬根性で眺めていたが、紅娘（ホンニャン）が注意するとそれぞれ元の持ち場に帰って行った。

牛乳、乳酪（バター）、砂糖、はちみつ、蒸留酒に乾燥した果実、匂い付けの香草油。どれも栄養価の高い高級品であり、同時に強壮剤として利用されるものである。

猫猫は一度だけ可可（カカオ）？を食べたことがあった。粉を練って砂糖を混ぜ固めたもの、巧克力（チョコレート）とくれた遊女は言った。

指先ほどのかけらだったが、食べるときつめの蒸留酒を飲み干した気分になった。妙に気持ちが明るくなった。

邪な客が売れっ子妓女の関心をかうために珍しい菓子だといって渡したものである。残念なことに、様子の違う猫猫を見て、妓女は怒り、やり手婆に出入り禁止を食らう羽目になったという。

その後、種子をいくつか手に入れることはあったが、それを薬として扱うことはなかった。

花街の薬屋にそんな高級品を求める客はいなかったのだ。

記憶の中の巧克力（チョコレート）は油脂で固めたものだと残っている。薬や毒物の匂い、味を完璧に覚えている猫猫は、食材に関しても鮮明な記憶を持っている。

まだ暑い季節であり、乳酪（バター）でうまく固められるとは思えないので、果実を包み込むことにした。氷があれば完璧なのだが、さすがにそれは無理だろうと材料の中に入れなかった。

代わりに大きな素焼きの水瓶を用意する。水が半分ほどはってある。水の蒸発により内部は外気より幾分涼しく、ぎりぎり油脂が固まる温度だろう。

猫猫はかき混ぜたそれを匙（さじ）ですくい、口に含む。

苦味と甘味と他に気持ちを高揚させる成分が舌を通じて感じる。
昔に比べて、酒にも毒にも強くなった猫猫は、以前ほど高揚した気分にならなかったが、それでも効き目が強いと感じられた。

（もう少し小さくつくったほうがいいかな）

果実をさらに半分に切り、褐色の液体に浸す。
皿にのせ、中空に浮かすように壺の中にしまう。

蓋をかぶせ、菰（こも）で隠すとあとは固まるのを待つだけである。
壬氏（ジンシ）がそれを取りに来るのは夕刻のことで、それまでに固まっているだろう。

（少し余ったなあ）

褐色の液体はまだ残っている。材料はとても高級品だし、栄養価も高い。媚薬といっても、猫猫にはそれほど効くものでもないので、後で食べることにした。麺麭（パン）を立方体に切り、しみこませる。これならば、冷やす必要もなさそうだ。
蓋をし、棚に置く。

残った材料はまとめて自室に置き、洗い物をするために外の水場に向かった。

このとき、切り分けた麺麭（パン）も自室に運び込むべきだったが、頭の中からはずれていた。味見で少し高揚していたせいかもしれない。

まあ、後の祭りである。

その後、紅娘（ホンニャン）に用事を頼まれたり、ついでに外に生えている薬草を摘みにいったりしている間に事は起こっていた。

洗濯籠に薬草を抱えてほくほくしている中、真っ青な顔をした紅娘と、憂いを含んだ玉葉妃（ギョクヨウ）が待っていた。高順（ガオシュン）もいることから、壬氏も来ているのだろう。

額を押さえる紅娘が台所をさしているのをみて、猫猫は籠を高順に押し付け現場へと向かった。

呆れ顔の壬氏がこちらを見る。

仲良く抱き合うように眠る三人の侍女たちがいた。胸元ははだけ、裳はふくらはぎまでめくれていた。皆が皆、幸福そうな顔で頬は紅潮している。

事前とか事後とか、不遜な言葉が頭をよぎったが、考えないようにした。

むしろ考えたくなかった。

まあ、女同士だし最悪のことにはなっていないはずだ、たぶん。

卓の上には、褐色の麺麭があった。

数は三つ足りなかった。

紅娘と高順と猫猫で侍女たちをそれぞれの部屋に寝かせると、疲れがどっときた。

居間では玉葉妃と壬氏が物珍しそうに巧克力麺麭（チョコパン）を眺めている。

「これが、例の媚薬なの？」

「いいえ、こちらのほうです」

猫猫は果実を包んだものを差し出した。親指の爪ほどの粒が三十ほど並んでいる。

「じゃあ、こっちは何なんだ？」

「私の夜食です」

言葉を間違ったらしく、明らかに周りが引いている。高順や紅娘も異物を見る目をしていた。

「酒や刺激物に慣れていると、効き目はそれほどありません」

実験に使った毒蛇を酒に漬けて飲んでいたので、猫猫は酒豪（ざる）だった。酒は薬の一つだと猫猫には分類される。

しげしげと、麺麭をつまんでみる壬氏。

「では、私が食べても問題ないのかな」

『それはおやめください！！』

紅娘と高順の声が重なった。高順の声を初めて聞いた気がする。

壬氏は冗談だよ、と麺麭を皿に置いた。

たしかに、皇帝の寵妃の前で媚薬を口にするのは不遜であるが、それ以上に間違っても天女の美貌が頬を染めながら迫ってきたら誰しも理性のたがが外れかねないためであろう。

「今度、帝のために作ってもらおうかしら。まんねりを防ぐためにも」

「いつもの強壮剤の三倍は効くと思いますけど」

「三倍……」

持続のほうかしら、と玉葉妃の小声は聞こえなかったことにする。

さすがにきついらしい。

媚薬を蓋付きの容器に移し替え、壬氏に渡す。

「効き目が強いので、一粒ずつを目安にお願いします。食べ過ぎると血が回り過ぎて、鼻血が出ると思いますので。また、意中の相手と二人きりのときに使用してください」

注意事項を終えると壬氏は立ち上がる。

帰り支度をするため、高順と紅娘は部屋を出る。

玉葉妃も一礼すると、籠の中で眠る公主とともに部屋を後にした。

猫猫は麺麭の皿を片付けようとすると、後ろから甘い匂いがした。

「思った以上のものを作ってくれてありがとう」

甘いはちみつのような声が聞こえる。

髪をすくい上げられ、首になにか冷たいものが当たっていた。

振り返ると、片手を振りながら壬氏が部屋を出ていく。

「なるほど」

皿に目を落とすと、麺麭の数が一つ足りない。

犯人の目安はついている。

「被害者がでなければいいけど」

他人事のように猫猫は呟いた。

夜はまだ長い。

# 10　幽霊騒動その壱

寵妃、玉葉（ギョクヨウ）に仕える侍女が一人、桜花（インファ）は、今日も誠心誠意をこめて仕事に従事していた。

先日、仕事中に居眠りをしてしまうという失態を犯したが、主である玉葉妃（ギョクヨウ）は咎（とが）めもしなかった。

ならば身を以って仕えるしかあるまいと、窓の桟（さん）から欄干（らんかん）の一本一本まで丁寧に掃除する。

本来、侍女にあるまじき行為であるが、それでも桜花は下女の振る舞いをする。働き者が好きだと、玉葉妃が言ったからだ。

台所の茶器を整理しようと中に入ると、新人侍女がなにやら作っていた。名前を猫猫（マオマオ）というが、滅多に自分から口を聞かないので、どんな人間なのかよくわからない。

ただ、腕に虐待を受けた痕があり、身売りされたこと、そして現在、毒見専門で雇い入れられたことを聞くといたたまれなくなった。

痩せた身体を太らせようと食事を増やしたり、傷痕をさらすのは可哀そうだと掃除をさせなかったり。残り二人の侍女も同じ考えらしく、結果、猫猫の仕事がほとんどなかった。

それでいいと、桜花は思う。

侍女頭の紅娘はそれではあんまりだと、洗濯を猫猫の仕事に与えた。洗濯は籠を運ぶだけなので、腕の傷は目立たない。他にもこまごまとした用を頼んでいるらしい。

「なにを作っているの？」

鍋で草のようなものをゆでている。

「風邪薬です」

必要最低限の言葉を述べるのみだ。きっと、虐待の後遺症でひととの付き合いがうまくいかないのかもしれないとおもうと涙を誘う。

薬に造詣(ぞうけい)が深いというので、時折、こうやって作っている。片付けはきれいにしてくれるし、この間もらったあかぎれの薬は重宝しているので桜花は何もいうことはない。薬づくりは、たまに、紅娘からも頼まれてやっているようである。

銀の茶器を取り出すと乾いた布で丁寧に磨く。

猫猫が口を開くのはほとんどないが、旨い具合に相槌(あいづち)を打ってくれるので、話しがいがある。最近噂になっている怪奇話をした。

中空を舞う、白い女の噂だった。

○●○

猫猫は、作り終えた風邪薬と洗濯籠を持ち、医局に向かう。

一応、形だけでも医師の判断を委ねるためだ。

（ここ一か月位の出来事か？）

ありきたりな怪奇話に猫猫は首を傾げる。

まだ、こちらに来る前には聞いたことのない噂だった。噂という噂

は小蘭（シャオラン）が持ってきてくれていたので、ここ最近にできた話だとわかる。

後宮はぐるりと城壁に囲まれている。四方の門以外出入りができず、塀の向こうには深い堀が通っており、脱走も侵入も不可能である。深い堀の下には後宮から抜け出そうとした妃が今も沈んでいるなど言われている。

（城門付近かあ）

近くに建物はなく、松林が広がっていたはずだ。

（夏の終わりからだったよな）

この時期はあるものの収穫期である。

よからぬことを頭に浮かべていると、狙いすましたかのように嫌な声が聞こえた。

「お仕事ご苦労様」

牡丹のような絢爛（けんらん）な笑みに、猫猫は無表情をはりつけたままだった。

「いいえ、それほどではございません」

医局は南にある中央門のそばにあり、後宮をつかさどる三部門もそこに居室を構えている。

壬氏（ジンシ）はよくそこに現れる。

宦官（かんがん）ならば内侍省にいるべきだろうが、この男はどこの部屋にも所属せず、むしろすべてを監視するように眺めていた。

（宮官長たちよりも上の立場ねえ）

可能性としては現帝の後見人といったところであるが、二十歳そこそこの青年がそれとは考えづらい。その子息であったとしても、わざわざ宦官になる必要もない。

玉葉妃と親しいことから、そちら側の後見人とも考えられるが、むしろ……。

（皇帝の御手付きか？）

御通りの際、玉葉妃との仲を見る限り正道（ノーマル）のようだが、人は見かけによらない。

いろいろ考えるのは面倒なのでとりあえず皇帝の愛人ということで片付けておこう。

「なんかものすごく失礼なこと考えてる顔に見えるんだけど」

「気のせいではないですか」

一礼して振り返り、医務室に入るとどじょうひげのやぶ医者がごりごりとすり鉢をすっていた。この医者の場合、薬を作るためでなく暇つぶしでやっているだけだと猫猫はわかっている。

でなければ、毎回自分の作る薬を半分渡す必要はないだろう。

最初はわけのわからない小娘と思っていたらしいが、猫猫の作る薬をみて段々態度が軟化してきた。

いまでは、茶菓子をだし、必要な材料を分けてもらえるようになったのだが、医局としてそれはあまりよくないことである。

守秘義務だとか、なんだとかあまりにないのである。

「薬を見てもらえませんか？」
「おお、嬢ちゃんかい。ちょいとまってな」

茶菓子と雑茶を用意する。甘い饅頭の類ではなく煎餅である。
辛党の猫猫にはうれしい。
最近、いろいろ餌付けされている気がしないでもないが。

やぶだが人は良い。性格はいいが、仕事はできない型（タイプ）である。

「私の分もお願いするよ」

甘いたおやかな声がする。
後ろを振り返らなくても、なにやら輝かんばかりの空気が回りに立ち込める気がする。

やぶ医者は驚きと高揚を浮かべた顔で、せっかく用意した煎餅と雑茶を、白茶と月餅（げっぺい）に替えて持ってきた。

（煎餅が……）

輝かしい笑顔が横に座っている。
身分差を理由に同席を拒否したが、無理やり肩を押さえこまれた。
見た目の優しさと全く違う強引な行動に猫猫は辟易（へきえき）した。

「老師（せんせい）、すまないが、奥からこれを取ってきてくれないか？」

紙切れを渡す。
遠目からみても、かなりの数が書かれていた。しばらく時間が稼げよう。

やぶ医者は目を細めると、残念そうなまなざしで奥の間に入った。

（最初からそのつもりだったんだろうな）

「本題はなんでしょうか？」

察しのよい猫猫は、湯飲みを揺らしながら聞いた。

「幽霊騒ぎは知っているかい？」

「噂程度に」

「じゃあ、夢遊病ってのはわかるかい？」

猫猫の目の端に輝きが宿ったのを壬氏は見逃さなかった。

くくくっと、天女の笑みに意地の悪さが混じる。

大きな手のひらが猫猫の頬を撫でる。

「それはどうやったら治るんだい？」

甘い甘い果実酒のような声でたずねた。

## 11　幽霊騒動その弐

「そんなものわかりません」

自分を卑下（ひげ）しないが、過剰にもとらえない猫猫（マオマオ）の答えだった。

どんな病気か知っていたし、患者も見たことある。

その結果いえるのはこのことだった。

「薬で治せるような病気ではありません」

気の病である。

妓楼（ぎろう）の遊女がこの病にかかったとき、おやじどのはなんの処方もしなかった。

薬で治るものではなかったからだ。

「薬ではというと」

何なら治るんだ？と聞いていた。

「私の専門は薬です」

言い切ったつもりだが、横をちらりと見ると憂いを含んだ天上人の顔があった。

（目を合わせてはだめだ）

野生動物でも扱うかのごとく青年から視線をそらす。そらすがそら

せない。回り込んでは猫猫のほうを向いていた。
かなり粘着質である。かなりうざい。
「……努力します」
ものすごく嫌な顔をしながら答えていた。

夜半に迎えに来たのは、宦官（かんがん）の高順（ガオシュン）だった。
寡黙で無表情なところはとっつきにくそうに思えるが、猫猫はむしろそこに親近感が湧く。

（あまり宦官ぽくない人だよな）

宦官は物理的に陽の気を取り払っているため、女性的になることが多い。
体毛が薄く、性格は丸く、性欲のかわりに食欲が増し太りやすくなる。
一番わかりやすいのは、やぶ医者の例だ。
高順はというと、体毛は濃くないが、精悍（せいかん）で後宮という場所にいなければ武官と間違えられることだろう。

（どうしてこの道を選んだのだろう）

気になっても聞いてはいけないことくらいわかる。黙って頭を振っ

た。

灯篭（とうろう）を片手に持ち、高順が先導する。

月は半分の大きさだったが、雲がないだけ明るかった。

昼間しか見たことのない宮内は、まるで別の場所のようだ。

時折、がさがさと物音がしたり、なんだか喘（あえ）ぎ声のようなものが木陰から聞こえたりしたが無視することにした。

まあ、宮中にはまともな男性は皇帝以外いないということで、恋愛の形など歪でもしかたないわけである。

「猫猫さま」

高順が話しかけてきた。

「敬称はいりません。高順さまのほうが位は高いでしょう」

「では小猫（シャオマオ）」

（いきなり小付（ちゃん）けですか）

案外軽いのか、このおっさんとか思いながら、猫猫は頷（うなづ）いた。

「壬氏（ジンシ）さまを毛虫でも見るような目で見るのはやめていただけませんか」

（やっぱ、ばれてるのか）

ここ最近、露骨に表情筋が反応して、鉄面皮では隠しきれないらしい。

首がとぶことは今のところないと思うが、節制せねばなるまい。お偉いさんにとって、虫けらは猫猫のほうである。

「今日も帰るなり、『なめくじでも見るような目をされた』と報告され」

（たしかに、粘着質でべたべた気持ち悪いとは思いました）

いちいち報告していることも粘着質だ。

「身を震わせながら、潤んだ瞳で微笑んでいらしてました。悦（えつ）というのはあれを言うんですね」

誤解しか生まないような語彙（ごい）を、至極真面目に答えてくださった。むしろ、虫けらから汚物に下がる勢いである。

「……、以後気を付けます」

「ええ、免疫のないものは、一目見るなり昏倒（こんとう）しかねないので、処理が大変なのです」

深いため息に苦労がにじんでいる。

大変疲れるお話をしているうちに、東側の城門についた。城壁は猫猫の四倍ほどの高さがある。外側は深い堀で、食糧や資材の運搬、時折、下女の入れ替わりの際に、橋が下ろされる。

後宮で脱走は極刑を意味する。

門には、常に衛兵が張り付いている。内側に宦官が二人、外側に武官が二人。門は二重になっており、詰所が外側と内側両方についている。

跳ね橋を下ろすも上げるも人力では足りないので、牛が二頭飼育されていた。

猫猫は近くに広がる松林にあるものを探しに行きたい衝動にかられたが、高順がいるからかなうわけもなく庭園の東屋に座った。

半月を背景にそれは現れた。

宙を舞う白い女の影。

長い衣とひれを纏い、踊るような足取りで城壁の上に立つ。

衣が揺らぎ、ひれが生き物のようにうねる。長い黒髪が、闇の中で照らされ、淡い輪郭を際立たせる。

現(うつつ)のものとは思えぬ美しさだった。

桃源郷にでも迷い込んだかのような、幻想的な光景である。

「月下の芙蓉」

ふとそんな言葉が頭によぎる。

高順は一瞬驚いた顔をすると、ぽつりとつぶやいた。

「勘がいいですね」

女の名は『芙蓉(フヨウ)』、中級妃。

来月、功労として下賜される姫である。

## 12　幽霊騒動その参

夢遊病というのは、よくわからない病気である。
寝ているのにあたかも起きているような動きをする。
何が原因といえば、心の軋轢（あつれき）であり、薬草をいくら煎じても意味がない。

とある遊女がその病にかかった。
朗らかで詩歌の上手い女で、身請け話が持ち上がっていた。

しかし、その話は破談となる。
幽鬼にでもとりつかれたかのように、毎晩妓楼を散策しているのだ。
歩き回る妓女をやり手婆が止めようとすると、爪で肉をえぐられた。

翌日、妓楼のものがみな不審な行動に詰め寄るが、妓女は朗らかな声でこう語るのだ。

「あら。みなさん、どうしたの？」

記憶のない彼女の素足には、泥と擦り傷がついていた。

○●○

「それでどうなった？」

居間には壬氏（ジンシ）と猫猫（マオマオ）、高順（ガオシュン）の他に玉葉妃（ギョクヨウ）もいた。公主は、紅娘（ホンニャン）にまかせている。

「なにもありません。身請け話がなくなったら、徘徊はなくなりましたので」

にべもなく猫猫は言う。

「つまり、身請け話が嫌だったってことかしら？」

「おそらく。相手は大店ですが妻子どころか、孫までいる身分でしたから。それに、あと一年も働けば、年季はあけたのですよ」

気に入らない相手に身請けされるなら、あと一年奉公を我慢したほうがいいらしい。結局、その遊女は新しく身請け話もなく年季があけたのだった。

「極端な気持ちの高ぶりがあったあとに徘徊が多いので、気持ちを落ち着かせる香や薬を配合したのですが、まあ、気休めにしかなりません」

おやじどのにかわり、猫猫が調合していた。

「ふーん」

面白くなさそうに壬氏が頬杖をついている。

「本当にそれで終わり？」

ねっとりとした視線に対して、侮蔑（ぶべつ）の表情を浮かべるのを我慢する。

隣では、無言で声援を送る高順がいる。

「それでは仕事に戻りますので失礼します」

一礼して部屋を出る。

少し時間をさかのぼる。

幽霊見学の翌日、猫猫が向かったのは東側のおしゃべり娘、小蘭（シャオラン）の元だった。

小蘭は猫猫に会うなり、玉葉妃のことを根ほり葉ほり聞き出そうとしたので、さしあたりのない情報と交換に幽霊騒動について聞き出した。

幽霊騒動が起き始めたのは半月ほど前。最初は北側で見つかったらしい。

それからまもなく東側で見つかるようになり、毎晩見られたとのこと。

衛兵たちは怪談話に恐れをなして、なにもしない。

今のところ害があるわけでもないので、誰も何も処置しようとしないらしい。

まったく役立たずな警備である。

次に向かったのは、やぶ医者の元へ。

個人情報なんて言葉がない時代に、守秘義務などわかっていない男は聞いていないことまで話してくれる。

最近、元気のない芙蓉（フヨウ）姫のこと。

息を吐けば飛び去りそうな小さな属国の三番目で、姫という肩書でありながら上級妃にもなれないご身分。

北側の棟持ちで、舞踏が趣味だが小心者で緊張しやすく、皇帝の御目通りの際失敗している。

踊りを除けば、特に目立った容姿でもなく、入内から二年、いまだ御手付きもないらしい。

今度、下賜される先は、幼馴染の武官の元だというので、幸せになればいいということ。

（なあるほど）

猫猫は、頭の中でなにかが組みあがった。

しかし、推測の域を出ないそれをいうのはどうであろうか。

（おやじが推測でものを話すなっていってたから）

だから話さないことにした。

○●○

大人しい色白の姫は、頬を染めて中央門をくぐる。

目立った風貌ではないものの、幸せを感じた明るい頬に皆が嘆息した。

下賜されるならこうでありたい。
その光景が広がっていた。

○●○

「私にくらい話してもいいんじゃないかしら？」
艶やかな笑みを浮かべる玉葉妃、一児の母であるが実年齢は二十に満たない。少しお転婆な笑みが浮かんでいた。
猫猫は一瞬、考え込んだ。
「あくまで推測ですので。あと、気分を害されなければ」
「自分で聞いておいて、腹は立てませんよ」
（うーむ）
「他言無用であれば」
「口は堅くってよ」
猫猫は、妓楼の夢遊病者の話をした。
先日、壬氏たちの前でしたものと別の、もう一人の夢遊病者の話だ。
前の遊女と同じく、身請け話が持ち上がったところで病になり、そして破談になった。

しかし、その後も夢遊病は止まらず、前回と同じように薬を処方しても気休めにもならなかった。
そんな遊女に新たに身請け話が持ち上がる。楼主は、病気ものを身請けさせるには忍びないといったが、それでも身請けしたいということだった。しかたなく、前の身請け話の半分の銀で契約は成立した。

「後程わかったのですが、これは詐欺だったのです」
「詐欺？」

先に身請け話をした男は、あとから身請け話をした男の知り合いだった。遊女が病のふりをするとわかっていて、破談にする。そして、本命の男が半額で身請けする。

「遊女はまだ年季が残っており、男は身請けする銀が足りなかった」
「つまり、この遊女たちと芙蓉姫は同じだってこと？」

幼馴染の武官は、属国とはいえ一国の姫に求婚できる身分ではない。武勲を立てていつの日か姫を迎えに行くつもりだった。

しかし、姫は政略により後宮に入ることになる。武官を思っていた姫は、得意の舞踏を失敗して皇帝の気を引かないようにしていた。案の定、二年間夜伽はなく身はきれいなままである。

武勲を集め、次の勲功（くんこう）で芙蓉姫が下賜されるとなったころ、姫は怪しげな徘徊をするようになる。
間違っても、皇帝が芙蓉姫を惜しいと思わないように、御手付きにならないように。

御手付きになれば、下賜されるのは後になる。また、処女性を重ん

じる芙蓉姫にとって、夜伽を行った時点で幼馴染に顔向けできないだろう。

東門で踊っていたのは、戻ってくる幼馴染の祈願のため。怪我をせぬように祈るため。

「あくまで推測です」

「なんていうか、帝については、なきにしもあらずなので何も言えないわ」

寵妃は少し困った顔をしている。

好色な皇帝が武官がそこまで望む姫に興味を持たないとは言い切れなかった。

「芙蓉姫がうらやましいなんて言ったら、私はひどい女かしら」

「そんなことないと思います」

つじつまは大体あっていると思うが、壬氏に話す気はない。

そのほうが幸せに違いないから。

あの柔らかい素朴な笑みをそのままにしたかった。

問題はすべて解決したかに見えたが……。

実はひとつだけ謎は残っていたのである。

「どうやって上ったんだろう？」

猫猫は自分の四倍もある壁を見上げると、首を傾げるのだった。

# 13　恫喝（前書き）

暴力表現があります。

# 13　恫喝

がしゃん、と何かが落ちる音がする。
芋と雑穀（ざっこく）を煮た粥と茶、すりおろした果実がばらまかれる。

「こんな、下賤（げせん）の食べ物を梨花（リファ）さまに食べさせる気？作り直してもらいなさい」

派手な化粧をした若い女官は、まなじりを上げていた。梨花妃につく侍女の一人である。

（あーあ、面倒くさい）

ため息をまじえながら皿を拾い、こぼれた食事を片付ける。
猫猫（マオマオ）がいるのは、水晶宮（すいしょうきゅう）。
梨花妃の居住である。

周りにはにらみつけるような視線がいくつも。
あざ笑うかのような目、さげすむような目、敵意をあらわにする目。
玉葉妃（ギョクヨウ）に仕える猫猫にとっては敵地も同然、針のむしろだった。

皇帝が玉葉妃（ギョクヨウ）の元に現れたのは、昨晩のこと。
いつもどおり、毒見を行い、部屋をあとにしようとしたとき。

「噂の薬師どのに頼みたいことがある」

初めて声をかけられた。

（噂ってなんなんだよ）

皇帝は偉丈夫で美髭をたくわえているが、年齢はまだ三十半ばくらいだ。これで国の最高権力を持っているのだから、後宮の女たちが目をぎらつかせるのは無理もないが、いかんせん猫猫である。「長い髭だな、さわってみたい」くらいにしか思っていない。

「なんでございましょうか？」

恭しく（うやうや）頭を下げる。下女の身分としては、下手な対応を取る前に退室したいところである。

「梨花妃の容体が悪い。しばらく見てくれないか」

とのことだった。

帝の言は、天上の言。

首と胴はまだ仲良くしていたい猫猫としては「御意」と答えるしかなかった。

『見てくれ』ということは、『治せ』と同義である。

寵愛がなくなったとはいえ、いくらか愛着が残っているのか、それとも、有力者の娘をないがしろにできないのかどちらでもよい。治さなければ、首がとびかねない。

一蓮托生（いちれんたくしょう）である。

それをたかだか、小娘に頼むのだから、よほど後宮医官は頼りないのか、それとも死んだところで問題ないのか。どちらにしろ、無責任な頼みである。

（それにしても、他の妃の前でいう話でもないのに）

猫猫にそんな依頼をしておき、悠々と夜食を食べ、玉葉妃と仲睦まじきことをおこなった帝は、やはり帝といういきものなのだとつくづく思う。

梨花妃を見るにあたってまずはじめたのが、食生活の改善だった。

現在、毒おしろいは壬氏の言により、後宮内では使用不可となっている。卸した業者があれば、ひどく罰するよう徹底したらしい。

ならば、身体に残った毒を排出することが先決だ。

食事は白がゆが盛ってあるものの、魚の素揚げのあんかけに、豚の角煮、紅白の饅頭に、ふかひれや蟹といった豪華な料理である。栄養はあるが、胃腸の衰えた病人に食べさせるには重すぎる。

よだれがでるのも押さえつつ、料理人に作り直しを命じる。勅命ということで、しがない下女風情の猫猫にもそれなりの権限が持たされていた。

繊維質の豊富な粥に、利尿作用のある茶、消化のよい果実。

残念なことに、先ほど床にぶちまけられた。

勅命云々よりも、玉葉妃に仕えていた容貌悪(ようぼうあ)しき下女が気に入らなかったのだろう。

言いたいことはたくさんあるが、ぐっとこらえて片付ける。

新たに侍女が絢爛豪華な食事を持ち、梨花妃のもとへ運び入れられたが、しばらくするとほとんど手も付けられずもどることとなる。

残りは端女(はしため)たちのご褒美となることだろう。

触診を行いたいところだが、天蓋付の寝台のまわりには侍女がまとわりつき、恭しくもまったくなっていない看病を行っている。寝ているところにおしろいをはたけば、咳のひとつもでるものなのに、

「空気が悪い。下賤(げせん)のものがいるからだ」

と、部屋を追い出されてしまった。

手のだしようがない。

（あのままでは、衰弱死は確実だな）

毒がたまり過ぎて排出が間に合わないのか、それとも気力が足りないのか。

食をとらねば人は死ぬ。生きる気力をなくしているのだろう。

部屋の前の壁に寄りかかり、自分の首がはなれるまで何日かと指を折っていると、周りから嬌声(きょうせい)が聞こえた。

ものすごく嫌な感覚がして、ものすごく重々しく顔を上げると、ものすごく綺麗な顔がすこぶる陽気に笑っていた。

「なにかお困りのようですね」

「そのように見えますか」

棒読みの半眼で答える。

「そのように見えますが」

じっくりと見つめてくるので次第に目線がそれる。それを追うように長いまつげが近づいてくる。

目が合えば、条件反射で汚物を見るように接してしまうだろう。

「なんなの、あの女」

ぼそりと毒気づく声が聞こえる。食事を下げた下女だ。

ものすごく居たたまれない。周りから恐ろしい空気が漂ってくる。

耳元で甘い蜜の声がする。

「とりあえず中に入ろうか」

頷く前に部屋に押し込められた。

入ったところで、部屋には取り巻きたちが先ほどよりも険しい顔でにらんでくれる。

しかし、隣にいる天女の様相を眺めると、取り繕ったかのように淡い笑みを浮かべた。

女とは本当に恐ろしい。

「帝のはからいを無碍（むげ）にするのは、美しき才女たちに似合いませんよ」

壬氏（ジンシ）の言葉に唇を噛みつつ、そっと寝台の前から退いた。

「ほれ、いけ」

背中を押され、猫猫はつんのめる。

一礼をし寝台の前に立つと、血管の浮いた色味のない手をとった。

薬ほどではないが、医のつく類はそれなりに経験がある。

梨花妃は目を瞑ったまま、抵抗もしない。眠っているのか、起きているのかもわからない。魂の半分はすでにあの世に流れたようだ。

瞼（まぶた）の奥を見るべく、顔に指をかける。

さらりとした感覚が指を滑った。

以前と変わらぬ、真っ白な肌だった。

（前と同じ肌色？）

猫猫の表情が強張り、侍女たちのほうを向く。

その中のひとりの前に立つと、低い、押し殺すかのような声できいた。さきほどおしろいをはたいていた娘だ。

「妃の化粧をしているのは、おまえか」
「ええ、そうよ。侍女たる勤めですもの」
食い入る猫猫にどこかおびえながら答える侍女。精いっぱいの虚勢を張る。
「梨花さまには常に美しくあってほしいもの」
自分が正しいのだといわんばかりに。
「そうか」
ばちん、と大きな音が響く。
侍女はなにが起きたのか理解できないまま、力の向かう側に倒れこんだ。
頬と耳が異様に熱いことだろう。
「なにすんのよ！」
呆気にとられた周りの中で、一人が猫猫に食ってかかる。
「ああ？莫迦（ばか）に折檻（せっかん）するだけだよ」
人を食った言い方で倒れた侍女の髪をわしづかみにし、引きずる。
化粧台の前で止まると空いた手で、彫り物の器を手にする。
蓋（ふた）を開けると、中のものを侍女にまぶした。
げほげほと咳をする。目には涙が浮かんでいた。

「よかったなあ、これで妃と同じくきれいになれるぞ」

髪をひっぱりあげ、獲物を狩る獣の笑みを浮かべる。

「毛穴から、口から、鼻から毒の気が全身にまわるからな。お慕いする梨花さまと同じ、枯れ枝のような手と落ちこんだ眼窩と血の気の失せた肌が手に入るぞ」

「そ、そんな……」

「なんで、禁止されたかわかってんのか、毒だっつってんだろ！！」

「だっ、だって。一番きれいだから。梨花さまも喜ぶと思って」

「誰が自分の餓鬼殺した毒を喜ぶんだよ」

子どものような言い訳に、猫猫は舌打ちを鳴らすと髪の毛をはなした。指には長い髪が数本巻き付いている。

「さっさと、口ゆすいでこい。顔も洗ってこい」

そそくさと部屋を出る女官を見送ると、今度は怯える他の侍女たちをみた。

「おい、このままだと、病人にさわるだろ。さっさと掃除しろ」

自分が散らかしたことを棚に上げ、粉だらけの床を指した。

侍女たちはびくんと身体を震わせると、掃除道具を取りに行った。

腕組みをし、ふんと鼻を鳴らす。

「女とは本当に恐ろしい」

両手を袖の中に入れ、ぽつりとつぶやく壬氏。
存在すら忘れていた。

「あっ」

猫猫は急激に頭から血が降りていくのを感じると、その場で蹲(うずくま)った。

## 13　恫喝（後書き）

育ちが悪いので、こちらが素のしゃべりです。

# 14　看病

梨花妃（リファ）の容体は思った以上に悪かった。

雑穀の粥を重湯に作り直したが、匙（さじ）から吸う気配はなく、口をこじ開けて流し込むとゆっくり嚥下させた。

食事をとらない。それが一番の問題だ。

根気よく、しつこいくらいに食事を与えた。

部屋の換気を行うと、むせるような香が薄れ、かわりに病人特有の匂いがする。

体臭をごまかすために香をたきしめていたのだろう、風呂に何日も入っていないようだ。無能な侍女たちに憤りが増す。

折檻（せっかん）を受けた侍女は謹慎を言い渡されたらしい。おしろいは買い置きを隠し持っていたものだった。可哀そうに、おしろいを回収しそこなった宦官は鞭打ちになったというのに。生まれで罰も左右されるのだ。

統括（とうかつ）する宦官には、猫猫（マオマオ）が「無能もの」と侮蔑（ぶべつ）をこめてにらんだが、あまり意味をなしてなかった気がする。

湯桶と布を準備させ、呼びつけた侍女たちとともに身体を拭く。侍女たちは難色を見せたが、猫猫（マオマオ）が睨み付けると大人しくしたがった。

肌は乾燥し、水をはじかず、唇は痛々しげに割れていた。紅（べに）の代わりにはちみつを唇に塗り、髪は簡単に結わえる。

あとはことあるごとに茶を飲ませる。時折、茶の代わりに羹（あつもの）を薄め

て与える。
小用の回数が増える。

怪しげな新参者に敵意を示すかと思ったが、人形のような梨花妃は概ね大人しく世話を受けていた。うつろな目は誰が誰かを認識しているのかわからなかった。

一度に食べる重湯の量が茶碗半分から一杯に増えると、少しずつ中の米粒の量を増やしていく。顎(あご)を押さえずとも自分で嚥下(えんか)するようになると、肉の旨味をとじこめた汁物とすりおろした果実を加えた。

小用も手伝いなしにできるようになる頃、ふと梨花妃の唇が動いた。

「……して、……のか」

漏れ出る言葉を聞き取るため、梨花妃のそばに立つ。

「どうして、あのまま死なせてくれないのか」

小さな消え入りそうな声だった。

猫猫は眉をひそめる。

「ならば、食事をとらねばいいことです。粥を食むということは、死にたくないからでしょう」

と、温めた茶を梨花妃の口に含ませた。

こくんと喉が鳴ると、

「そうか……」

かすれた笑いがこぼれた。

猫猫に対する侍女たちの反応は、二つに分かれた。

猫猫を怖がるものと、怖がりながらも反発するものだ。

（やりすぎたか）

どうにも、感情の沸点をこえると過激な反応になってしまう、悪い癖だと思った。

無愛想だが概ね温厚でとおっている猫猫としては、遠巻きに鬼か妖怪かを見る目つきでみられると地味に傷つくわけである。

今回の場合、梨花妃の看病に必要だということで、仕方ないとした。

帝だか、玉葉妃の命だかなにか知らないが、きらきらしい壬氏どのがちょくちょくあらわれてくれた。使えるものは何でも使う勢いで、水晶宮に突貫工事で風呂場を作らせた。元々あった湯殿に加えて、蒸気風呂ができた。

用がないのでもう来るな、と猫猫なりに婉曲に伝えるのだが、壬氏は化け物のごとく扱われる猫猫をことあるごとに笑いにくるのだった。

暇人すぎる宦官である。

毎度、菓子折りを持ってきてくれる高順（ガオシュン）を見習っていただきたい。

ああいうまめなのがいい旦那になれるだろう、宦官であるが。

繊維質を取り、水分を取り、汗をかき、排せつを促す。

身体から毒を排出することだけを考えて二か月が過ぎると、梨花妃は自分で散歩に出かけるまでになった。

もともと、気の病による衰弱が深刻だった。毒を新たにとらねば、問題はない。

以前の豊満な肉体はまだ取り戻すのに時間がかかるが、頬に赤みがさし、もう死の淵をさまようことはないだろう。

翡翠宮に戻る前夜、挨拶をしに梨花妃のもとに向かう。

意識がはっきりしてきたら、下賤のものなどと罵られることを予想していたが、そうでもなかった。

自尊心はあるが高慢ではない。東宮のあれこれで、嫌なお嬢様を想像していたのだが、実際は妃にふさわしい人格を持っていたようだ。

「それでは、早朝に辞させていただきます」

今後の食事療法、いくつかの注意点を伝えて部屋をでようとすると、

「ねえ、私はもう子は生せないのかしら」

何の抑揚もない声だった。

「わかりません。試してみればよろしいかと」
「帝の寵愛は潰えたのに？」
彼女のいわんとすることはわからなくもなかった。
元々、東宮を身ごもったのは、寵妃である玉葉妃のつなぎで夜伽をしていたからだ。
公主と東宮が三か月違いで生まれているのは、それを如実に語っていた。
「私に、ここに来るように命じたのは主上でございます。私が戻る以上、帝も梨花さまのもとにいらっしゃられるのではないかと」
それが政治的であれ、感情的であれ問題はない。
やることは一緒だ。
「玉葉妃の言葉も聞かず、みすみすわが子を殺した女が、彼女に勝てるのかしら？」
「勝てる勝てないの問題ではないと思います。それに、間違えは学習すればいいのです」
猫猫は壁に飾られた一輪挿しを取る。星形の花を咲かせた桔梗が飾ってあった。
「世には百、千の花がありますが、牡丹と菖蒲のどちらが美しいというのは、決めつけるものではないと思います」
「私には胡姫の翡翠の瞳も淡い髪もなくてよ」
「他のものがあれば問題ないかと」
と、猫猫は視線を梨花妃の顔から下に移動させた。

普通、痩せる部分はそこからだといわれているが、ちゃんと哈密瓜（メロン）が二つくっついていた。

「それだけの大きさはもとより、はり、形は至宝かと」

妓楼で目の肥えた猫猫がいうのだ、間違いない。湯あみをさせるたびに見惚れたのは内緒である。

玉葉妃に仕える身としては、あまり肩入れするわけにはいかなかったが、最後に手土産をひとつ置いておくことにした。

「ちょっと、耳を貸していただけますか」

ごにょごにょと周りに聞こえない声で、梨花妃にあることを教えた。

遊郭（ゆうかく）の小姐たちが、「覚えていて損はない」といった秘術である。

林檎のように真っ赤な顔をした梨花妃が何を聞いたのか、侍女たちのあいだでしばらく話題になったという。

その後、翡翠宮（ひすいきゅう）にて、帝の御通りが一時極端に減ったことがあった。

「ふう、睡眠不足から解放されるわ」

と、皮肉交じりに玉葉妃が言ったことに、猫猫が目を泳がせたのはまた別の話である。

# 15　炎

（やっぱりあった）

洗濯籠片手に喜色を浮かべる。

東門のそばの松林、生えているのは赤松だ。

後宮内は概ね庭園の管理は行き届いている。松林も年に一度、枯葉や枯れ枝を取り除かれており、それはとある茸の生育を促すのである。

手に持ったのは笠の広がりも少ない松茸であった。

匂いが嫌いという人間もいるが、猫猫は好物であり、四つに裂いて網で焼いて塩と柑橘を絞って食べるのは至福のときだ。

小さな林だが、都合よく群生を見つけたので籠の中には五本の松茸が入っている。

（おっちゃんのとこで食べようか、それとも台所で食べようか）

翡翠宮で食べるとなると、食材の出所を聞かれるかもしれない。林でとりましたとか、ちょいと女官としてはあってはいけないことかもしれない。

なので、人は良いが仕事が駄目なお人よし医官のもとに向かう。好きだったらそれでよし、嫌いでも見逃してくれるだろう。

途中、小蘭（シャオラン）のところによるのも忘れない。ともだちの少ない猫猫には貴重な情報源である。

梨花（リファ）妃の看病で肉の削（そ）げ落ちた猫猫は、戻るなり先輩侍女たちに太らされることとなった。相対する妃のもとに二か月もいたというのに、その反応は嬉しい一面、困るものであり、籠には茶会のたびに貰う月餅（げっぺい）や？干（ビスケット）を持て余していた。

甘いものはいくらでも入る小蘭は目を輝かせ、短い休憩の間ずっと猫猫と話してくれた。

あいかわらず、怪しげな怪談めいた話が多かったが、

「宮中の女官が媚薬を使って女嫌いの堅物武官を落としたのよ」

なる話を聞いてなんだか冷や汗をかいた。

（うん、たぶん関係ないはず。たぶん）

そういえば、誰に使うのかまったく聞いていなかった気がする。

宮中とは、ここ以外の宮廷内のことをいう。

まともな男性がいる分、競争率の高い花形職業である。

ちなみにここは、まともな男性がいない分、さみしい職場ということである。

医局には、どじょうひげのおっさんの他に、青白い顔をした見慣れない宦官（かんがん）がいた。
なにかしきりに手をさすっている。

「おお、嬢ちゃん、ちょうどよかった」
「なんですか」
「手がかぶれたらしくてね。すぐ、軟膏（なんこう）を作ってくれないかい？」

どうにも後宮の医を統べるものの言葉ではないのである。
まあ、いつものことなので、隣の薬棚のある部屋へ向かう。

そのまえに、籠を置いて、松茸をとりだす。

「炭とかありますか？」
「おおっ、立派なもんとってきたな。醤（ひしお）と塩もあったほうがいいな」

好物なのか話が早い。浮かれた足取りで食堂のほうへ調味料をもらいに行く。

可哀そうに病人は置いてかれたままだ。

（嫌いじゃなければ、一本くらいあげよう）

可哀そうな宦官を材料をごりごりとかき混ぜながら思った。

やぶ医者が調味料と炭鉢と網を持ってきたころ、ねっとりとした軟

膏が出来上がる。

宦官の右手を取り、赤い発疹（ほっしん）に丁寧に塗りつける。多少においがきついが我慢してもらわなくては。

薬を塗り終えると、少しだけ青白い顔がもどったようである。

「いやあ、優しい下女だねえ」

「そうだろう、よく手伝ってくれるんだ」

のほほんとした会話をする宦官二人。

宦官といえば、時代によっては権力欲にまみれた悪人のごとく扱われるが、実際はほんの一握りである。大抵は、このように穏やかな性格をしている。

（例外もありますが）

ちらりと不愉快な顔が浮かんだので、消去する。

炭に火をつけ、網を置き、手でさいた松茸を置く。また勝手に果樹園から失敬した酢橘を切る。

独特の香りが鼻にかかり、少し焦げ目がついたところで皿に盛り、塩と酢橘をかけていただいた。

二人のおっさんともに、口に入っているので共犯者決定である。

猫猫がもぐもぐと口を動かしている中、やぶ医者はのんきに世間話をしている。

「嬢ちゃんはなんでもできるから助かっているんだよ。軟膏以外に

もいろんな薬を作ってくれるんでね」
「ほお、そりゃあ結構だね」

まるで実の娘に接するようなのでいささか困ってしまう。
ふと、もう半年以上も会っていないおやじさんを思い出した。

ほんの少し感慨にふけっていると、やぶ医者は実にやぶ医者らしい失言をしてくれた。

「ああ、作れない薬はないんじゃないのかね」

（はあ？）

誇大広告はよしてくださいという前に、目の前の宦官は反応していた。

「なんでもかい？」
「なんでもさ」

ふふんと鼻を鳴らすやぶ医者、ああ、やぶ医者たる所以である。

「じゃあ、呪いを解く薬も作れるのかい？」

男はかぶれた右手をなでながら言った。
気色はさきほどの青白い顔に戻っていた。

○●○

一昨日の晩のこと。
仕事はいつもごみの片づけで終わる。

後宮のあちこちから出たごみは、荷車に集められ、西側で焼却される。
本来は夕方以降に火を放つのは禁止されているのだが、風もなく、空気も湿っているので問題ないと許可をだした。

下官たちが穴の中にごみを投げる。
仕事を早く終わらせたかったので、自分も同じように作業に徹する。

ふと、荷車の中に目につくものがあった。

女物の衣だ。
絹ではないが、上質のもの。捨てるにはもったいない。

どうしたものかと持ち上げてみれば、中にはばらばらの木簡が包まれていた。
包んでいた衣は袖口が大きく焼け焦げている。

いったいどういうことだ。

はてと頭を抱えたとて仕事は終わらない。
木簡をひとつひとつ拾い上げ、穴の中の火にくべた。

○●○

「すると、炎が勢いよく吹き上げて不気味な色にかわったと」

「ああ」

小父さんは思い出すのも恐ろしい様子で肩を震わせる。

「その色は、赤や紫や青？」

「そうだよ」

猫猫はなるほどと頷いた。

今日聞いた小蘭の噂の元はここからだというのか。

（西側の話なのに、ここまでまわるのか）

女官の噂は韋駄天（いだてん）よりも早いというのは本当だろう。

「ありゃあ、昔火事で死んだ妃の呪いだ。やっぱ夜に火をつけるのがいけなかったんだ。だから、こんな手になっちまったんだ」

宦官の手のかぶれは、炎を見たあとにできたらしい。

「なあ、娘さん。呪いを解く薬を作ってくれよ」

「そんな薬あるわけないですよ」

冷たく言い放ち席を立つと、隣の薬棚をごそごそといじりだした。

おろおろとするやぶ医者と小父さんを後目に、何かを卓の上に置いた。粉のようなものがいくつか、あとは木簡の端切れだった。

「こんな色じゃありませんでした？その炎って」

木簡に炭をつけ、火が灯ったことを確認すると、薬匙（やくさじ）で白い粉をと

り火に入れた。
橙色の炎が赤く変わる。

「でなければ、こちら」

違う粉をいれると、青緑色に変わった。

「これでも、できますね」

松茸につける塩をひとつまみ入れると、黄色に変わる。

「嬢ちゃん、これは一体？」

驚いた様子でやぶ医者がきいた。

「色つきの花火と同じです。燃えるものによって、色が変わるだけです」

楼閣（ろうかく）の客に花火職人がいたのだ。門外不出の秘伝の技も、閨（ねや）の中では世間話に変わる。隣に子どもが寝起きをしていることも知らないで。

「じゃあ、この手はなんなんだ？呪いじゃないのか？」

猫猫は白い粉を差し出した。

「これを素手で触ると、発疹ができることがあります。でなければ、木簡に漆でも使われていたとか。どちらにしろ、肌が弱いのではないのですか？」

「……そうなのか」

骨がなくなったように、力なく座り込んだ。小父さんの顔には安堵と驚きが張り付いている。

木簡に付着していたのだろう、それを燃やすことで色とりどりの炎が生まれた。
ただそれだけだった。

（なんでまた、そんなのがってことだけど）

猫猫の考えは遮られた。
ぱちぱちと手を叩く音が聞こえた。

「お見事」

いつのまに、嫌なお客が立っていた。
変わらずの天上の笑みを浮かべて。

# 15　炎（後書き）

主人公は完全に理系です。

# 16　暗躍

壬氏（ジンシ）に連れられて来たのは、宮官長の部屋だった。
中年の女官は、壬氏の指示で退出した。

正直、申し上げよう。この生き物と同部屋二人きりなど、まったくもって無理なのだ。

猫猫（マオマオ）とて、きれいなものは嫌いではない。
ただ、あまりにきれいすぎるとほんの少しの汚点が罪悪のように感じられて許せないのである。磨き抜かれた玉にほんの一筋の傷が入るだけで、価値が半分になるのと同じである。

ゆえに、つい地面を這いずり回る虫を見るように接してしまうのだ。
全く仕方のないことである。

（鑑賞物として接したい）

小市民猫猫の本音である。

女官と入れ替わるように高順（ガオシュン）が入ってきたときは、ほっとした。
最近、無口な従者が癒し系に変わりつつある。

「これらは一体何色くらいあるんだ？」

医局から持ち出した粉を並べる。

「赤、黄色、青、紫、緑、細かくわければもっとあります。具体的な数はわかりません」

「では、木簡にその色を付けるにはどうすればいい？」

粉のまま擦り付けるのは無理がある。いくらなんでも怪しかろう。

「塩ならば塩水につければいいだけです。こちらも同じようにいけると思います」

白い粉をよせる。

「他のものは、水以外のもので解けるものがあるみたいです。これも、専門外なのでわかりません」

「十分だ」

青年は腕を組んで、思考にふける。

それだけで一枚の絵になるようである。

壬氏が後宮内のいろんなことを掌握していることはわかっている。

今の猫猫の言葉がなにかの根拠になったのだろう、頭の中でばらばらになった欠片を組み合わせているようである。

（暗号……かな？）

導き出される答えはおそらく同じものであろう。しかし、それを言うべきではないと猫猫は重々承知していた。

雉も鳴かずば撃たれまい、である。

これ以上、用はなさそうなので、退出しようとすると、

「待て」

呼び止められた。

「なんでしょうか？」

「土瓶蒸しが好きだ」

何の？というまでもない。

（やっぱばれてるか）

肩を落として、

「明日にでも探してまいります」

と伝えた。

○●○

ぱたんと、扉が閉じたのを確認すると、壬氏は甘いはちみつの笑顔をしまった。かわりに水晶の切っ先のような視線になる。

「ここ最近で、腕にやけどを負ったものを探せ。とりあえず部屋付以上、それにつく侍女も調べておけ」

「御意（ぎょい）」

高順が退出すると、宮官長が入ってきた。

「申し訳ないね。いつも場所を借りてしまって」

「そ、そんなことは」

年甲斐もなく顔を赤らめている。

壬氏の表情には、また天上の甘露の笑みがはりついていた。

女とはこうあるべきなのに。

ほんのひと時だけ、唇を尖らせると、またもとの笑みを浮かべて、部屋を出た。

○●○

「はい、これ着てみて」

先輩侍女である桜花（インファ）は猫猫に真新しい衣を差し出していた。

色は生成りの上着に、薄赤の裳（スカート）、袖は薄黄色でいつもよりも大きく広がっている。

絹ではないが、上等の綿でできていた。

「なんですか、これ？」

色は下女にふさわしい地味なものだが、意匠（デザイン）は実用には向かない。

それに、胸元の大きく開いた服など、猫猫は着たことがないので、明らかに嫌な表情が浮かんでいる。

「何って、園遊会の衣装だけど」

「園遊会？」

先輩侍女たちの好意に完全に甘えていた猫猫は、毎日毒見と薬作り以外は、外を駆け回り薬草採ったり、小蘭（シャオラン）とおしゃべりしたり、医局で茶をいただいたりしていた。ゆえに、上流階級の話題はほとんど耳に入らなかった。

首を傾げる猫猫に呆れた顔で桜花が教えてくれる。

年に二度、宮廷の庭園で社交界が開かれること。

后のいない皇帝は、正一品の妃を連れてくること。妃の世話をする女官もついていくこと。

後宮内では、玉葉（ギョクヨウ）妃が『貴妃』、梨花（リファ）妃が『賢妃』を冠している。他に二人、『徳妃』と『淑妃』を合わせて四夫人、それらが正一品となる。

本来、冬の園遊会は『徳妃』と『淑妃』のみ出席のはずである。だが前回、赤子を生んだばかりの玉葉妃と梨花妃は欠席したため、今回全員参加のこととなった。

「全員参加、ですか」

「ええ、心してかからないと」

桜花の鼻息が荒くなるわけである。

ただでさえ、後宮の外にでる滅多にない機会であるうえ、鈴麗（リンリー）公主のお披露目、上級妃の揃（そろ）い踏（ぶ）みと行事（イベント）満載なのだ。

侍女の数が少ない玉葉妃のため、慣れないことを理由にして猫猫が辞するわけにはいかない。そういう公の場所こそ、毒見役が重要視されることくらいわかっている。

（血の雨が降りかねない）

猫猫の勘は当たる。

困ったことに当たるのである。

「少し、胸元は詰め物をしたほうがいいわね。おしりの周りもかさましするけど大丈夫？」

「お任せします」

ぎゅうぎゅうと帯を締めつけられ、裳の丈や袖の長さを調整する桜花はさらにとどめをさしてくれた。

「ちゃんと、お化粧もしないとね。たまには、そばかす隠す努力もしなさいよ」

にやりと笑う桜花に、ひきつる笑顔を返したのはいうまでもない。

# 17　園遊会準備

紅娘（ホンニャン）から園遊会の流れを聞いてげっそりとした。

彼女は、昨年春の園遊会に出席しており、

「今年はなくて、安心していたのに」

と、ふうっと、ため息をつく。

なにをするわけでもない。ただ、立っていればよいのだ。

あくまで妃はお客側の立場であり、ただ皇帝に付き従っていればよい。その侍女たちも同じくだ。

演武（えんぶ）に演舞（えんぶ）、詩歌に二胡（にこ）といった出し物を見、出された食事を食べて、適当に挨拶に来る官たちに笑顔を振りむけばよいだけである。

空っ風の吹く屋外で。

庭園はまあ皇帝の権力に比例するごとく無駄に広い。

ちょいと御手水にでかけようものなら、四半時（さんじゅっぷん）は必要となる。

主賓たる皇帝が座を立つことはなく、妃たちもそれに従うしかない。

（鉄の膀胱（ぼうこう）が必要になるな）

春先の園遊会でまいるくらいなら、冬はどんなものになるやら。

そこで、猫猫（マオマオ）は肌着に衣嚢（ポケット）をいくつも付け、中に温石（カイロ）を入れるよう

にした。また、生姜とみかんの皮を細かく削り、砂糖と果汁で煮て飴にした。

肌着と飴を紅娘に見せたところ、目を潤ませて全員分作るように頼まれた。

作っている最中、暇人宦官が来て自分のも作れと言ってきた。
その従者もなにやら言いたげなので仕方なく一緒に作ってやった。

また、夜の御通りの際、玉葉妃（ギョクヨウ）が皇帝に話したらしく、翌日、皇帝直属のお針子と食事係がきたので作り方を教えてあげた。

なるほど、よほどの苦行らしい。

おかげで園遊会まで、内職で終わってしまった。
前夜にようやく手が空いたので、手もとにある薬草で薬を作ることにした。

「おきれいです、玉葉さま」

桜花（インファ）たちの言葉は、世辞で言っているのではない。

（さっすが、寵妃というだけあるな）

異国風情の漂う妃は、紅の裳と薄紅の着物を着ていた。上に羽織る大袖は裳と同じ紅で、金糸の刺繍が入っている。髪は大きく二つの

輪に結わえられ、二つの花かんざしと真ん中に冠が乗せられている。花かんざしから銀の笄（こうがい）が伸び、先に赤い絹の房飾りと翡翠の玉が下がっていた。

意匠（デザイン）が派手なのに服に着られることがないのは、玉葉妃だからであろう。

燃えるような赤い髪を持つ妃は、国で一番紅が似合うものだと言われている。また、赤の中に翡翠色の瞳が輝くのも、神秘的な空気を漂わせていた。

猫猫たちの裳に薄紅を使うのも、それに従っているという意味だ。

互いに揃いの衣をつけ、髪を結う。

玉葉妃はせっかくだからと、自分の化粧台から飾り箱を取り出した。中には翡翠のついた首飾りや耳飾り、簪（かんざし）が入っていた。

「私の侍女たちだもの。変な虫がつかないように、所有権をつけとかないと」

そういって、それぞれの髪や耳、首に飾りをかけていく。

猫猫には玉のついた首飾りをかけてくれた。

「ありがとうございま……」

（ひっ！）

礼を言い終わる前に、後ろから羽交い絞めにされた。

桜花（インファ）ががっしり腕を回していた。

「さあてと、お化粧しないとね」

刷毛（はけ）を持ちにやにやするのは、紅娘である。他の二人の侍女もそれぞれ貝の紅入れと筆を持っている。

ここのところ先輩侍女たちが猫猫に化粧をさせようと息巻いていたのを忘れていた。

「うふふ、可愛くなってらっしゃい」

共犯者はここにもいたようだ。玉葉妃はころころと鈴の鳴る声で笑う。

動揺の隠せない猫猫に四人の侍女たちは容赦ない。

「まず、顔を拭いて、香油を塗らなくてはね」

がしがしと濡れた布で猫猫の顔を拭いた。

『えっ？』

（あーあ）

顔と拭いた布を見比べながら、侍女たちは間抜けに声がそろった。

（ばれちゃったか）

ここでひとつ言っておく。

猫猫が化粧を嫌がった理由は、化粧が嫌いというわけでない。苦手というわけでもない。

むしろ、得手不得手なら得意といえる。

ならば、なんだといえば、すでに化粧を済ませた顔だったからである。

濡れた布には薄茶の汚れがついていた。

皆がすっぴんだと思っていた顔は、実は化粧（メイク）後の顔だったわけである。

# 18　化粧

園遊会が始まるまであと半時（いちじかん）というころ、玉葉妃（ギョクヨウ）と侍女たちは庭園の東屋で時間待ちをしていた。

池には色とりどりの鯉がはね、赤く染まった紅葉が残り少ない葉を散らしていた。

「あなたのおかげで助かったわ」

日の光は十分だが、風が冷たく乾いている。普段ならぶるぶると震えるしかないのだが、温石（カイロ）をつけた肌着のおかげで皆それほど苦はない。

心配だった鈴麗（リンリー）公主も、籠の中で丸まっている。籠の中には同じく温石を入れている。

「公主のものは時折外しては布を巻き替えてください。低温やけどになる場合がありますので。あと、飴は舐めすぎると口内がひりひりするので気を付けてください」

猫猫（マオマオ）は替えの温石を手籠の中に入れている。公主のおむつや着替えもその中にある。温石を温める火鉢はもう宦官に頼んで運び込んでいる。

「わかったわ。それにしても」

ふふふ、と悪戯っぽい笑いが漏れる。他の侍女たちも苦笑する。

「あなたは私の侍女なんだからね」

と、翡翠の首飾りを指さした。

「さようでございます」

猫猫は言葉のままとらえることにした。

○●○

高順（ガオシュン）は、徳妃のご機嫌をうかがう主を眺めていた。

天女の微笑みと天上の甘露を持つ壬氏（ジンシ）は、幼いながら美姫と謳（うた）われた徳妃よりも艶やかであった。

普段の簡素な官服から、いくらか刺繍を加えて、髪に銀の簪をさしただけなのに、絢爛豪華な衣をまとう妃をかすませてしまう。

ここまで来ると嫌味な存在であるが、かすんだ妃本人が目を潤ませてうっとりしているので問題ないだろう。

まったく罪な人間である。

三人の妃たちを回り、次に玉葉妃のもとに向かう。

池の向こうの東屋にいるのを見つけた。

四夫人に対して平等に接すべき壬氏であるが、最近、どうにも玉葉妃の肩入れが強い。まあ、皇帝の寵妃ということでそれほど問題視すべきでないが、理由は他にもあるのは明確だ。

妃に礼をする。赤い衣がよく似合うとほめる。

たしかに、似合って美しい。胡姫の神秘さと生来のあでやかさが空気にまで混じるようである。

おそらく、後宮内で華やかさにおいて壬氏に見劣りしない人物といえば、玉葉妃くらいだろう。

だからといって、周りの女官たちが美しくないわけでなく、各々自分の魅力を引き出していた。

壬氏のすごいところは、それを明確に口にするところである。

誰もが自分が気に入っている部分を褒められたい、そこをうまくつくのだ。

壬氏は嘘をつかない。

ただ、本当のことを言わないだけで。

平静を装っているようだが、左の口角がわずかに上がっている。長年、仕えてきた従者にはわかる。玩具を目の前にした子どもの表情である。こまったものだ。

公主の顔を見るように見せかけて、小柄な侍女に近づく。

が。

そこには無表情でどこか見下したかのようなあまりに不遜な顔をする、見慣れない侍女がいた。

○●○

「ごきげんよう、壬氏さま」

また来たのか、暇人野郎、という顔を表に出さないように気を付ける。

高順が見ているので、できるだけ穏便にいきたい。

「化粧しているのか？」

「いいえ、していませんけど」

口とまなじりに紅を入れているだけであとはすっぴんだ。

鼻の周りに薄ら斑が残っているが気にするほどでもない。

「そばかすが消えているぞ」

「ええ、消しましたから」

残っているのは、昔、自分で針を刺して入れた黥（げい）である。深く刺さず、薄い染料でつけたそれは一年ほどで消えてなくなる。

たとえ、消えるとはいえ罪人の刑と同じことをするのに、おやじどのは難色を示していた。

「化粧して消したんだろ？」

「化粧を落としたから消えたんですよ」

（あー、適当にはいはい言っとけばよかったかな）

猫猫は、返答を間違ったことに気が付いたがもう遅かった。

「おまえの言っていることはおかしいぞ、矛盾している」

「いいえ。そんなことはありません」

化粧とはなにもきれいにするだけのものではない。既婚の女がわざわざ醜くなるように化粧をする場合もある。

乾いた粘土と染料を溶いたものを、猫猫は毎日鼻の周りにつけていた。刺青のそばかすをぼやかすと、うまい具合にしみのようになる。まさか、そんなことをやっているとは思わず、誰も気が付かなかっただけだ。

そばかすとしみを持った特に特徴のない顔の女。

だから醜女（しこめ）と呼ばれていた。

逆を言えば、そばかすもしみもなければ、ただの特徴のない、つまり平均的な整った顔立ちであることが言える。

それはほんの少しの紅でも、雰囲気が変わり、普段の猫猫とはまったく違う顔ができていた。

猫猫の説明に、なんだか理解できないという風に、壬氏が頭を抱えている。

「なんで、そんな化粧をするんだ？意味あるのか？」

「ええ、路地裏に連れ込まれないためです」

花街とはいえ、女に飢えた奴らもいる。そいつらは、大抵金も持たず、暴力的で、中には性病持ちも多かった。

当然、ごめんこうむりたい。

ぽかんとした壬氏がなぜか恐る恐る聞いた。

「連れ込まれたのか？」

「未遂ですよ」

いわんとした言葉がわかったため、半眼でねめつける。

「かわりに人買いにかどわかされましたけどね」

後宮に売りとばす女は見目よいほうがいい。あのとき、たまたま化粧を忘れて薬草を取りに行ったのだ。薄れてきた刺青の染料をとるために。

「悪いな。管理が行き届いてなくて」

「別に、かどわかしの身売りと口減らしの身売りの区別なんてつかないだろうから、どうでもいいですよ」

前者は犯罪で、後者は合法にあたる。たとえ、かどわかしでも買った人間がそれを知らなかったといえば、罰せられることはないのだ。

今現在、後宮でそんな化粧をしているのは、文字を書けることを隠していたのと同じ理由である。今更、どうでもよくなったわけだが、いきなり素顔になるのも時機（タイミング）がわからずこのままでいただけにすぎない。

「ああ、申し訳なかった」

（珍しく素直だな）

見上げようとすると、頭にさくっと何かが刺さった。

「痛いのですが」

「そうか、やる」

ただの甘ったるい笑みではなく、どこか憂いと気恥ずかしさの混じった顔があった。

頭を触ると、何もつけていないはずの髪に冷たい金属の感触がする。

「じゃあ、あとは会場でな」

後姿のまま、壬氏は東屋を去った。

刺さっていたのは男物の銀の簪（かんざし）だった。

「あー、いいなあ」

桜花（インファ）がもの欲しそうに見ていたのであげようと思ったが、他のふたりも同じ顔をしていたので手を引っ込めるしかなかった。

紅娘（ホンニャン）は苦笑している。

「もう、早速約束破ったのね」

玉葉妃がすねた顔をしてみている。

猫猫の持っていた簪を取ると、結わえた頭にきれいに刺してくれた。

「私だけの侍女じゃなくなったじゃない」

幸か不幸か、猫猫は宮中、特に上流階級の話に疎い。

それが示す意味もわかっていなかった。

# 19　園遊会その壱

園遊会は中庭に設けられた宴席にて行われる。大きな東屋に緋毛氈（ひもうせん）が敷かれ、長卓が二列に並べられ、その先に上座が設けられている。

主上を上座とし、両脇に皇太后と皇弟、東側に貴妃、徳妃、西側に賢妃、淑妃が座する形となる。東宮が身まかられた現在、現帝の同腹の弟が、第一継承権をいただいている。

それにしても、喧嘩を売るためだけの配置にしか思えない。四夫人の敵対心をあおっているようでならない。

その弟君であるが、母が皇太后であるにもかかわらず日の目を見ない生活をしている。

表向きこうして上座に席を設けられているが、空席である。病弱でほとんど自室から出ず、執務も行わない。

一部では、歳の離れた弟を皇帝が甘やかしているだとか、もしくは幽閉しているだとか、それとも皇太后がかわいがり過ぎて外に出したくないとしているのか、いろんな憶測も回っている。

まあ、猫猫（マオマオ）には関係ないことである。

料理が出るのは昼過ぎであり、今は曲芸や演舞を楽しんでいる。

玉葉妃（ギョクヨウ）には、侍女頭の紅娘（ホンニャン）のみついており、なにか用がない限り他の侍女たちは幕の裏側で指示を待つのだ。

公主は皇太后があやしていた。漂う気品と衰えを知らぬ美しさは、四夫人に囲まれても見劣りしなかった。

（いっそ天幕（テント）を用意してくれ）

幕といってもまさに目隠し程度なので、風よけにもならない。懐炉を持った猫猫たちが、寒いと思うのに、それが他の妃の侍女たちとくればたまらないだろう。

案の定、控えている他の侍女たちは身体を小刻みに震わせ、中には内股になっているものもいる。今のうちに厠（かわや）に行けば問題ないと思うが、他の妃の侍女の手前行くにいけないところかもしれない。

困ったことに、四夫人の侍女たちは主たちの代理戦争をしたがるのである。

各々いさめる立場にある侍女頭はそれぞれの妃のそばについている。止めるものはいなかった。

今現在、抗争の図は『玉葉妃軍対梨花妃軍』、『淑妃軍対徳妃軍』である。

ちなみに、玉葉妃軍営は総勢四人なので、向こうの侍女の半分もいない。いささか不利かと思われるが、桜花（インファ）ががんばっていた。

「はあ、地味ですって？馬鹿じゃないの？侍女ってものは、主に仕えるものでしょ。無駄に着飾ってどうするのよ」

どうやら衣装のことでもめているらしい。向こうの侍女たちの衣装は、梨花妃に仕えるということで、青基調、ひれがついているのと飾りものが多いのでこちらよりも派手である。

「なにいってんの？見た目が悪いと、主が苦労するのよ。やっぱ、あの不細工を雇ってるだけのことはあるわー」

（おっ、目の前で莫迦にされているようだ）

他人事のように猫猫が思った。言うまでもなく、不細工というのは自分のことであろう。

偉そうに胸を張る女官は、以前、猫猫に反発していた一人だった。強気な性格だが、それに根性は付随しておらず、ことあるごとに「お父様に言いつけてやる」と言っていたのだ。あまりにうるさいので売り言葉に買い言葉で、「じゃあ、言いつけられない身体にしてやる」と言ったら怯えて近づかなくなったのだ。

（妓女流の冗談は通じないのか）

少なくとも世間知らずのお嬢様には向かない言葉である。

「いないとこ見ると、置いてきたんでしょ。あんな醜女連れて来たら恥もいいところだものね。玉飾りの一つももらえないでしょうし」

まったく猫猫のことに気が付いていないらしい。

（ひどい話だ。二か月も一緒にいたというのに）

桜花が爆発して飛び掛かりそうなのを残り二人がおさえているのを見ると、そろそろ静かにさせたほうがよさそうである。

猫猫は桜花たちの後ろにまわり、鼻を手のひらで隠して青い衣を着た侍女たちのほうを見た。

怪訝に目を細めた侍女が、何かに気が付くと隣の侍女に耳打ちする。伝言遊戯（でんごんゲーム）のように、最後の意張りくさった侍女に届くと、侍女は威

圧して突きだす指先をふるふるとさせ、口をあわあわと開いた。

（ようやく気が付いてくれたか）

猫猫は自分なりに満面の、侍女たちから見れば獲物を狩る狼のような笑みを作る。

「あ、ああ、ああっ」

「なっ、なによ」

後ろでにやにや猫猫が笑っていることも知らない桜花は、いきなり小動物みたいに震える敵対者をいぶかしむ。

「あっ、ああ。も、もうこれくらいにしてあげるわ。か、感謝しなさい」

と、わけのわからない捨て台詞を吐いて、幕の端に向かった。他に場所は空いているだろうに、猫猫たちと一番離れた場所に向かうのである。

ぽかんと呆気にとられる桜花たちと、

（やっぱり、傷つくなあ）

などと思う猫猫。

気を取り直し、桜花は猫猫に目線を合わせて、

「もう、前からやな奴らだと思ってたけど。悪かったわね、不愉快

な思いをさせて。本当はこんなに可愛いのに」

すまなそうに桜花が言った。

「気にしていないので。それより、温石かえなくてよろしいですか」

「ええ、まだ温かいし、大丈夫。それにしてもなんでいきなり震えだしたのかしら？」

「さあ、お花摘みにでも行きたかったのでは」

いけしゃあしゃあと猫猫は言った。

ちなみに、現在の猫猫は、親に折檻され身売りに売られて捨て駒の毒見役になった、に加えて、水晶宮で二か月間壮絶ないじめを受け、自分の顔を汚したくなるくらいひどい男性不信に陥っている少女という設定になっている。

困ったことに桜花たちの妄想力は年相応に半端ないのである。

壬氏が猫猫に突っかかるのも、天女のような御仁が可哀そうな娘を気にかけているという図に描きかえられているので困ったものだ。

どこをどうみればそうなるのか不思議なものである。

一方、もう一つの代理戦争はいまだ続いていた。

人数は、七対七。

白い衣装を着た侍女たちと暗色の衣装を着た侍女たちである。
前者は徳妃、後者は淑妃側の侍女である。

「あそこも仲悪いわよね」

しみじみと桜花が言う。

「齢十四と齢三十五。同じ妃でも親子ほど年齢がはなれてたらそりも合わないわよね」

「若輩の徳妃に、古参の淑妃。そりゃあ、ねえ。いろいろあるものね」

おっとりした侍女、貴園（グイエン）が言った。

「そうよね、元嫁姑だし」

長身の侍女、愛藍（アイラン）も頷く。

「嫁姑？」

なんだか後宮らしからぬ話に聞こえる。猫猫は首を傾げた。

「ええ、ちょっと複雑なんだけどさ」

二人は先帝の妃と東宮妃の関係だったという。

先帝が身まかられたとき、妃は喪に服すため道士となった。
しかし、それは建前で、俗世を一度捨てることで先帝に仕えたことをなかったことにして、今度は息子に嫁いだという。

（先帝の時代は五年前）

そのとき、徳妃は齢九つ、たとえ政略でもなんだかもやっとくる話である。この年で妃になるとは。

（いくら好色でもそれはないよな）

美髭の皇帝を思い出し、云々言っているところで衝撃の真実を知ることになる。

「ありえないわよね。九歳のお姑さんなんて」

愛藍は耳を疑うようなことを言ってくれた。

# ２０　園遊会その弐（前書き）

モテ期です。

## 20　園遊会その弐

徳妃、里樹（リーシュ）の第一印象は、空気が読めない子であった。

宴の第一部が終わり、休憩時間がもうけられると猫猫（マオマオ）と貴園（グィエン）は公主のもとへと向かう。貴園が冷たくなった温石を取り換えるあいだ、猫猫は赤子の容体をみる。

（特に体調は悪くないか）

きゃっきゃと林檎のような頬をした鈴麗（リンリー）公主は、最初に出会ったころよりもずっと表情が豊かで、父たる帝からも、祖母たる皇太后からも可愛がられていた。

（しかし、こんな屋外にずっといるのはどうよ？）

これで風邪でもひかせれば、首がとぶかもしれないのでまったくもって理不尽である。

おかげで、籠に職人を使ってわざわざ蓋をつくり、まるで鳥の巣のようなねんねができた。

（まあ、可愛いからいいか）

子どもが好きではない猫猫でも可愛いと思うのだから、赤子とは恐ろしい生き物である。

はいはいをするようになって、外に出たがる公主をやんわりと籠の中に入れ、紅娘（ホンニャン）に渡そうとすると、後ろから荒い鼻息が聞こえてきた。

絢爛豪華な濃い桃色の大袖を着た、若い娘がこちらを見ていた。後ろに幾人もの侍女を連れている。
愛らしい顔をしているが、口をとがらせて自分の不機嫌を見せつけているようである。

（これが幼姑？）

紅娘（ホンニャン）と貴妃（グイエン）が深く頭を下げているのでそれにならう。
里樹妃はやはり不機嫌な顔のまま、侍女を連れてどこかへ行った。

「あれが徳妃さまですか」
「ええ、そうなの。まあ、大体見てわかったと思うけど」
「いろいろ読めないんでしょうか」

なにがといえば、その場の空気がである。
四夫人ともなれば、それぞれ己が象徴を与えられる。
玉葉妃（ギョクヨウ）であれば、真紅と翡翠を象徴とし、梨花妃（リファ）であれば、群青と水晶、淑妃はたぶんお付の衣の色から黒だろう。柘榴宮（ざくろきゅう）に住んでいるので、宝石は柘榴石といったところか。

（五行（ごぎょう）からとっているとすれば、白が妥当なんだけど）

里樹妃の着ていた衣は濃い桃色で、いうなれば玉葉妃の赤い衣とかぶっている。宴席の席順を見ると、玉葉妃と里樹妃は隣り合っており、一目見て色のつり合いが悪いのである。

（そういえば）

遠巻きに聞こえてきた女官同士の喧嘩も、そんな話題だった気がする。

「なんていうか、まだ幼いのよね」

深くため息をつく紅娘の一言がすべてを物語っていた。

温石のぬるくなったものは、あらかじめ用意していた火鉢に入れた。遠巻きによその侍女たちが見ていたので、玉葉妃に了解をとっていくつか渡してあげることにした。

絹や宝玉に見慣れた侍女たちが、たかだか温めた石くらいで喜ぶのだからなんだかおかしいものである。

残念なことに水晶宮の侍女たちは、猫猫が近づくとまるで磁鉄が反発するように一定の距離を置くので渡せずじまいである。

「なんだかんだでお人よし過ぎない？」

桜花（インファ）が呆れたようにいうので、

「そういえばそうかもしれません」

思ったことを素直に伝えた。

（そういえば）

休憩になってから、どうにも裏幕に人通りが多い。
侍女だけでなく、武官や文官が入り込んでいるようだ。
皆、片手に装飾品を持っている。

女官と一対一で向かい合っているものもいれば、数対一で囲まれているものもいる。
貴園と愛藍（アイラン）も知らない武官と話しているようだ。

「ああやって、花の園に隠れた優秀な人材を勧誘するのよ」
「はい」
「印に持っている装飾品を渡すの」
「そうですか」
「まあ、違う意味もあるんだけどね」
「なるほど」

いつもと違って、興味なさそうに返事するので桜花は腕組みをして唇を尖らせた。

「違う意味もあるんですってばー」
「そうなんですか」

その意味を聞き出そうともしない。

「じゃあ、その簪（かんざし）ちょうだい」
「はい。でも、他の二人と猜拳（じゃんけん）してください」

火鉢の温石をひっくり返しながらいった。

二年の奉公が終えたらさっさと花街に戻るつもりの猫猫には関係ない話である。

それよりも、

（あんなのにこき使われるのなら、水晶宮で丁稚（でっち）してたほうがましだな）

と、息絶えた蝉でもみるような目をしていると、

「お嬢さん、これをどうぞ」

目の前に簪が差し出された。

顔を上げると精悍な顔をした大男が甘い笑みを浮かべている。まだ、若く髭はない。男前といわれる部類の顔をしているが、無駄に甘い笑顔に耐性の強い猫猫としては、何の感慨もなく見返すだけだった。

思った反応と違うことを武官は感づいたようだが、差し出した手はおさめられずにいる。中腰につま先立ちなので足元が震えている。

猫猫はどうやら男を窮地に立たせているのが自分だと気付いたらしい。

「どうも」

猫猫が受け取ると、子犬が飼い主にほめられたような顔をした。

なんとなく駄犬っぽいと猫猫は思う。

「んじゃあなー、よろしくー。俺、李白（リハク）っていうから」

（たぶん、二度と会わないと思うけど）

手を振る大型犬の帯にはまだ十数本の簪がさしてある。

侍女たちに恥をかかせないため、皆に配っているのだろうか。

（それならば悪いことをした）

桃色珊瑚のついた簪をながめると、

「もらったの？」

と、貴園たちが来た。各々戦利品を帯にさしている。

「参加賞ですが」

猫猫は感慨もなく答えた。

すると、後ろから、

「それだけでは、さみしいでしょう？」

聞き覚えのある高貴な声がする。

振り返ると、豊満な胸部、もとい梨花妃（リファ）が立っていた。

（少し太ったかな）

それでも、以前の肉体には及ばない。しかし、残った陰りもまた妃

の美貌を引き立てていた。濃紺の裳に空色の上着、青い肩掛けを羽織っている。

（少し寒くはないだろうか）

玉葉妃付である限り、梨花妃には肩入れができない。

水晶宮を去った後も壬氏（ジンシ）伝手にしか、容体をきいたことがなかった。

たとえ、宮を訪れても侍女たちに門前払いを食らうのはわかっているが。

「お久しゅうございます」

「お久しぶりね」

顔を上げると、梨花妃は猫猫の髪をさわる。

また、壬氏のときと同じように何かがささった。

今度は痛くない。

「じゃあ、ごきげんよう」

驚愕を隠しきれない妃付の侍女たちをたしなめながら、優雅に去って行った。

呆気にとられるのは翡翠宮の侍女たちである。

「あーあ。これは玉葉さま、すねるどころじゃないかもね」

桜花が呆れた顔で簪の飾り部分をはじいた。

紅水晶の玉飾りが三つ連なり揺れていた。

## 21　園遊会その参

昼になると、猫猫（マオマオ）は、紅娘（ホンニャン）と交代し玉葉妃（ギョクヨウ）の後ろについた。

桜花（インファ）の助言を聞いて、とりあえず貰った三本の簪（かんざし）はすべて帯につけることにした。玉葉妃のくれたのは首飾りなので、簪は一本くらいつけていてもいいのだが、それではつけなかった簪と優劣がつくとのこと。

あらためて宴席を上座から眺めると、なかなか壮観である。

西側に武官が並び、東側に文官が並んでいる。長卓に座れるのはその中の二割ほどで、高順（ガオシュン）も武官側の席に座っていた。思ったよりお偉いさんなのはわかったが、宦官が違和感なく並んでいることに驚いた。

さっきいた大男も座っている。高順よりも末席に近いが、年齢を考えると出世頭なのかもしれない。

壬氏（ジンシ）は反対にどこにも見えない。あれだけきらきらしていたら、すぐ見つかりそうなものなのに。

探す必要もないので、本業に徹することにした。

最初に食前酒がきた。玻璃（はり）の器から銀杯に少しずつそそがれる。

ゆっくり杯を揺らし、接触部分に曇りがないか目視する。

砒石の毒があれば、色が黒ずんでくる。

ゆっくり回しながら匂いを嗅ぎ、口に含む。毒のないことはわかるが、毒見役として嚥下しなければ、毒見として認められない。ごく

んと喉を潤すと、真水で口をゆすぐ。

（おや）

どうやら注目されているらしい。

他の毒見役はまだ、杯に口もつけていない。

猫猫が何もないのを確認すると、恐る恐る杯に口をつけるのだ。

（まあ、普通はね）

誰もが死ぬのは怖い。

誰か先にやるのであれば、見届けてからやったほうが安全である。

（宴席で毒を使うとすれば、即効薬しかないだろうし）

この中で好んで毒を食らうのは猫猫くらいである。世の中にそうはいない希少な人種である。

（どうせなら、河豚がいいなあ。内臓をうまく羹に紛れ込ませて）

あの舌の先がしびれる感じがたまらない。あれを感じるために何度、嘔吐と胃洗浄を繰り返したことか。そんなことを考えているうちに、前菜を持ってきた侍女と目があった。口角が上がっている。気持ち悪くにやにやしていたようだ。完全に引かれているようである。

いつもの無表情に顔を戻す。

受け取った前菜は、皇帝の好物で夜食にたまにでていたものだ。

食事は後宮側で作っているらしい。いつもと同じものである。

他の毒見たちが猫猫をじっと見るので、さっさと箸をつけてやる。

魚と野菜のなますだ。

好色親父であるが、案外食生活は健康志向だと、毒見役はいっておく。

（配膳間違えたな）

いつもと具が違う。

皇帝の好物の調理法（レシピ）を間違えることはない。

あるとすれば、別の妃用に作られたものがこちらにきているのだろう。

後宮の尚食は有能で、同じ献立でも皇帝用と妃用と作り分けている。

玉葉妃が授乳中はずっとお乳によいメニューを作っていた。

毒見が終わり、皆が前菜を食べているところをみると、やはり配膳を間違ったらしい。

空気の読めない里樹（リーシュ）妃が青白い顔をしている。

（嫌いなものだったか）

皇帝の好物という手前、残すわけにいかないものである。

我慢して食べている。

後ろを見ると、毒見役の侍女が目を瞑り、唇を震わせていた。微かに弧を描いているのは、見てわかった。

（嫌なものを見た）

視線を戻し、次の料理を受け取った。

○●○

ただの宴席ならばよいのに。

李白（リハク）は殿上から見下ろす高貴なかたとはそりが合わないと思った。

なにが楽しゅうて、この寒い中、風が吹きすさぶ中、外で宴会など考えるのだろう。

いや、ただの宴会ならいい。古事にならって、桃の園のなかで気の合う同士で酒を食らい、肉を食むのはさぞや楽しかろう。

しかし、高貴なおかたとともになると、常に毒ともご一緒になる。いかに高級素材を使い、秘伝の技を駆使した会席も毒見を終えて冷えればうまさは半減する。

毒見を責めるわけではないが、毎回、怯えた青い顔でゆっくりと匙を食むさまは、それだけで胃の大きさを縮めるのだ。

今日もまた、同じように無駄に長い時間が過ぎるのだと思っていた。

だが、なんだかそうでもないらしい。

いつもは、毒見役が皆、顔を見合わせながら匙を運ぶ順を決める。

でも今日は、やたら威勢のいい毒見役がいるようだ。

貴妃の毒見役、小柄な侍女は周りを一瞥もせず、銀杯を揺らして食前酒を口に含む。
ゆっくり嚥下すると、何事もなかったかのように口をゆすいだ。

どこかで見たことがあると思ったら、先ほど簪を渡したひとりだった。さして、目だった容貌でない、整っているが特徴がない。美形の多い後宮の女官の中ではあまたに埋もれるほうだろう。
しかし、無表情のどこかに、他人を威圧する眼力を持つ娘だった。

愛想のない娘だと思ったが、表情は案外豊からしい。
無表情と思えば、なぜかいきなりにやにやして、かと思えば元に戻り、今度は不機嫌な顔をする。
それなのに、当たり前のように毒見をするので、これはどうにもおかしかった。

次はどんな顔をするやら。暇つぶしにはちょうどいい。

羹(あつもの)を差し出され、娘が匙(さじ)をいれる。目視し、舌の上にゆっくりのせる。

娘の目が一瞬、見開いたかと思えば、急にとろんと蕩(とろ)けるような笑みを浮かべた。

頬に赤みがさし、目が潤み始める。唇が弧を描き、半開きになった口から白い歯と艶めかしい舌が見えた。

これだから女は恐ろしい。

唇についたしずくを舐めとるさまは、熟れた果実のような最高級の

妓女の笑みであった。

どれだけ美味い料理なんだ。

平凡な娘をあれだけ妖艶にするなにかがあるのだろうか、宮廷料理人の匠の技によるものか。

ごくりと生唾を飲んだ時、娘は信じられない行動にでた。

懐から手ぬぐいを取り出し、口につけると食べたものを吐き出した。

「これ、毒です」

無表情に戻った侍女は、業務事項を伝えると幕の裏側に消えていった。

宴席はどよめきをみせながら終わりを告げた。

## 22　祭りの後（前書き）

クールダウン。

## 22　祭りの後

「随分とまあ、元気な毒見役だことだ」

口をゆすぎ終わりぼんやりとしていた中、神出鬼没の暇人宦官が現れた。

宴席からずいぶん離れた場所にいるのによく見つけたものだ。

「ごきげんよう、壬氏（ジンシ）さま」

いつもどおり無表情で返そうとするが、毒の余韻（よいん）か幾分頬がゆるい。

笑顔で返したようで少し腹立たしい。

「むしろご機嫌はそっちだろ」

いきなり腕を掴まれた。

「なにするのですか」

「医務室に向かうにきまってるだろ。毒食らってぴんぴんしているなんて洒落にならないぞ」

実際、元気そのものである。

吐き出さずに飲み込んでいたらどうなっただろうか。

好奇心が身体をめぐる。

今頃、しびれが体をめぐっていることだろう。

（吐き出さなきゃよかった）

せめて残りの羹(あつもの)をいただけないだろうか。
壬氏にたずねてみる。

「おまえ、ばかだろ」
「向上心が高いと言ってください」

まあ、ふつう、そんな向上心は願い下げである。

普段、無駄にきらきらしい壬氏だが、今はなんだか違う気がする。
頭には新しい簪が差してあるが、先ほどと変わらぬ上等の衣をつけているのに。
いや、少し襟元が乱れている。乱れることがあったということか。
なるほど、そういうことか、この不埒ものめ。

甘露の声は幾分かすれ、柔和な笑みもそこにはなかった。

（きらきらしいのは調整できるものなのか）

それとも情事のあとで、疲弊しているのだろうか。
宴席にいなかったのは、女官か文官か武官か宦官を連れ込んだり、連れ込まれたりしていたのだろう。
そういうことにしておこう。
まったくお盛んなことである。

（こちらのほうがまだいいな）

確かに美形であるが、これなら年相応の青年に見えなくもない。いや、むしろ幾分幼く見える。
今度から来る前は、いかがわしい運動のあとにしてもらえるよう高(ガオ)俊(シュン)

順に頼んでおくか。
聞いてもらえるかは別として。

「おまえがあんまり元気そうに出ていくもんだから、ほんとに毒かって食べた奴がいたんだよ」
「誰ですか、その莫迦は」

使われたのは河豚毒だった。
食べてしばらくしないと毒の効き目は表れない。

「大臣がしびれてる。あっちはそれで大騒ぎだ」

なるほど、これでは国の未来も危ないことだ。

「せっかくなので、これ使ってもらったらよかったのに」

胸元からごそごそと布袋を取り出す。胸の上げ底に入れていた嘔吐薬だった。

「胃がひっくり返るほど、よく吐けるように作ったのに」
「いや、それは毒だろ?」

呆れた口調で壬氏はいった。

「こっちにも医官はいる。任せておけば問題ない」

猫猫(マオマオ)はふと思い出し、足を止める。

「どうした?」
「お願いがあります。一緒に連れてきてもらいたいかたがいらっし

ゃるのですが」
「だれなんだ？一体」
眉をひそめ、首を傾げる。
「徳妃、里樹（リーシュ）さまを呼んではくれませんか」
猫猫は凛とした口調で言った。
呼び出された里樹妃は、壬氏には春のような嬉しげな笑みを、猫猫にはなんだこいつという白けた顔を見せてくれた。落ち着かないのか、右手で左手をさすっている。
幼くとも女という生き物である。
医務室に向かおうとしたが、お莫迦なお偉いさんのせいで人だかりができており、仕方なく使われていない執務室を使うことにした。こうして比べてみると、建物にも後宮とそれ以外とで造りに違いがある。簡素で無骨な大部屋に里樹妃は少し不貞腐れた顔をした。
ぞろぞろ連れたお付は、高順に頼んで一人だけにしてもらっている。
猫猫は湯冷ましで解毒剤を飲む。飲まなくても平気だが、念のためと言われ、他人の調合した薬に興味があったので飲んだ。
やぶ医者と違い、ここの医官は優秀そうである。

河豚毒と知っていれば、解毒の意味がないことはわかっただろうが。

湯冷ましを置き、里樹妃に一礼する。

「失礼します」

「!?」

妃の左手をとり、長い袖をめくった。白いたおやかな腕が現れる。

「やっぱり」

本来、すべらかな感触のはずの肌に、赤い発疹ができていた。

「食べられないものがあるんですね、魚介の中に」

里樹妃はうつむいたままだった。

「どういうことなんだ?」

壬氏が腕組みをしたまま、聞いてくる。

いつのまにか、また天女のたおやかさを漂わせていた。

しかし、いつもの笑みはない。

「人によっては、食べられない食物がそれぞれある場合があるんです。魚介の他に、卵、小麦、乳製品などもありますね。かくゆう、私も蕎麦が食べられません」

明らかに驚愕の顔を見せるのは、壬氏と高順である。毒は平気で食らうのにといわんばかりだ。

（ほっといてくれ）

一応、食べられるように努力したが、気管支が狭まり呼吸困難になった。そもそも、食べて腹から吸収されて発疹ができるので、量の調整が難しく治りも遅い。だから、慣らすのをあきらめた。そのうち、もう一度挑戦してみたいと思うのだが、やぶ医者しかいない後宮では試すことはできないだろう。

「なんでそれがわかったの？」

恐る恐る妃が口を開く。

「その前に、お腹の調子は大丈夫ですか。吐き気や痙攣（けいれん）はないように見えますけど」

よかったら、下剤調合しますよ、という言葉にぶんぶん頭を振った。憧れの天上人の前でそれをいうのはなかなかひどい話である。ちょっと仕返しした。

「では、腰掛けて聞いてください」

見た目によらずまめな男の高順は、椅子をひいている。それに、里樹妃は座る。

「玉葉さまのお食事と入れ替わっていたからです。玉葉さまは好き嫌いがないので、ほとんど主上と同じものを召し上がりますから」

それなのに、一品目も二品目も具材が違った。

「鯖とあわびですか。食べられないのは」

妃がこくりと頷く。
後ろで侍女が動揺を見せたのを猫猫は見逃さなかった。

「これは食べられない人間にしかわからないものですが、好き嫌い以前の問題なのです。今回は、蕁麻疹（じんましん）程度ですぎましたが、時に呼吸困難、心不全を引き起こします。いわば、知っていて与えたなら、毒を盛ったことと同じことです」

毒という言葉に過敏に反応する。

「里樹さまは、場の雰囲気もあって言い出せないことだったでしょうが、非常に危険な行為でございます」

猫猫は、視線をぼんやりと妃と侍女のあいだに定めた。

「ゆめゆめ、忘れないようにしてください」

どちらにというわけでもなく忠告した。

しばらく間をおいて、

「常食の配膳係にもお伝えください」

と言ったが、妃と侍女は頭にはいっていないようだ。

猫猫はお付の侍女に、詳しく危険性を説明し、もしもの場合の対処方法を書にしたためて渡した。
侍女は青白い顔のまま、小刻みに首を振っていた。

（脅しはこんなもんか）

侍女は毒見の女だった。
あの笑っていた女である。

里樹妃が退出したあと、後方からねっとりとした空気と、肩に触れてくる手に気が付いた。
干からびた蚯蚓（みみず）を見るほうがましだという冷めた目をする。

「下賤のものゆえ、お手を触れないでくださりますか」

べたべたするな、この野郎を婉曲に伝える。

「そんなこと言うのはおまえくらいだぞ」
「では、皆、気を使ってるのですね」

すたすたと離れる。
胸やけがしそうな声にため息をつき、清涼剤の高順を探すが主に忠実な従者は「頼む、耐えてくれ」と目で訴えていた。

「では、玉葉さまのもとに報告にいきますので」
「なんで、わざわざ毒見の侍女を同室させたんだ？」

いきなり核心をついてくる、だからやりにくい。

「なんのことでしょう。わかりかねますが」

無表情のまま答える。

「では、配膳のものが間違えたというのか？」

「それもわかりません」

あくまでしらを切る。

「これくらいは答えてくれ。狙われたのは徳妃だということだな」

「他の皿に毒が入ってなければ」

そういうことになる。

壬氏が考え込むのを見て、猫猫は部屋を退出すると、壁にもたれて深く息をするのだった。

## 22　祭りの後（後書き）

毒が決まりましたので、変更しました。

# 23　指

翡翠宮に戻るなり猫猫（マオマオ）は、手厚い看護を受ける羽目になった。

いつも使っている狭い部屋ではなく、空き部屋の寝台に上等の被褥（ふとん）が敷かれ、あれよあれよと着替えさせられたらその中に放り込まれた。

上等の綿を使っており、いつもの菰（こも）を重ねただけの寝台とは雲泥の差だ。

「解毒剤も飲みましたし、身体に異常はないんですが」

実を言えば、解毒剤は意味がない。そういう毒である。

「何言ってるの？あの後、食べた大臣がすっごかったんだから。吐き出したからって無事なわけないじゃない」

桜花（インファ）は心配そうな面持ちで額に濡れた布をのせる。

（本当に莫迦な大臣だ）

初期治療でうまく吐き出せただろうか。

気になったところで、今更、ここからでられないだろうし、仕方なく目を閉じることにした。

無駄に長い一日だった。

疲れはけっこうたまっていたらしく、起きたのは昼前だった。
侍女としてこれはまずい。
起きて着替えると、紅娘(ホンニャン)を探すことにした。

（そのまえに）

自室に戻り、いつも使っているおしろいを探す。おしろいといっても、皆が使っている真っ白なものではなく、いつものそばかすをつくるものだ。

磨いた銅板を鏡に、指先で刺青の周りをとんとん叩く。小鼻の上を特に濃く塗る。

（今更、すっぴんはねえ）

いちいち説明するのが面倒だ。
いっそ、逆にそばかすを隠したことにしてしまえばいいのかと思ったが、これはこれで恥ずかしい。たぶん、言われるたびに女の道が初めて通ったときのような反応をしてしまうだろう。

お腹がすいていたので点心(おやつ)の残りの月餅を一つ食べた。

紅娘は玉葉妃(ギョクヨウ)のもとで公主の面倒を見ていた。
はいはいで動き回る公主に目を離せないようで、床の敷布の上からはみ出さないように移動させたり、つかまり立ちの練習で椅子が倒れないように押さえていた。

「寝坊し、申し訳ありませんでした」

深く一礼する。

「今日は休んでもよかったのに」

玉葉妃は困り顔で頬に手を当て、首を傾げている。

「そうもいきません。なにかあればお申し付けください」

などというが、実際、普段から好き勝手にやっているのでいてもいなくても問題はないだろう。

「そばかす……」

玉葉妃はあまり触れてほしくないことを突っ込んでくる。

「落ち着かないので、このままでよろしいでしょうか」

「それもそうね」

意外にも、簡単に引き下がった。

猫猫は、怪訝な顔を妃に向ける。

「あの侍女は一体何者だって。みんなから詰め寄られたのよ。大変だったわ」

「申し訳ございません」

「その顔だと、一目じゃわからないから都合がいいわね」

穏便に動いたつもりだが、そうでもなかったらしい。

一体なにがいけなかったのだろう。

「それと、朝から高順（ガオシュン）が来ているけど、どうする？暇そうなので、外で草むしりしてもらっているんだけど」

（草むしり……）

たしか、けっこうな高官だったと思うが、さすがまめ男である。きっと、他の侍女たちの心をむんずとつかんでいるに違いない。

「居間を貸していただいてよろしいでしょうか？」

「わかったわ。すぐ呼ぶわね」

玉葉妃は紅娘から公主を受け取る。

紅娘は部屋をでて高順を呼びに行った。

自分からいけば早かったのだが、玉葉妃に手で制させ、そのまま居間に移ることになった。

「壬氏（ジンシ）さまからこれを」

来るなり挨拶もそこそこに、高順は布包みを卓においた。

ひらくと銀の器に盛られた羹（あつもの）があった。

猫猫が食べたものでなく、本来、玉葉妃が食べるはずだったものだ。

昨日は断ったが、結局、ご丁寧に持ってきてくれた。律儀なことであると同時に、何か調べろということだろう。

「食べないでください」
「食べません」

（銀は腐食が激しいからな）

食べない理由が他にあることを高順はわからないだろう。
疑わしげにこちらを見ている。

猫猫は器に直接触れないように持ち、目を細めてじっと見た。
器の中身ではなく、器自体を。

「これは、素手で持ったりしましたか？」
「いいえ。毒か中身を匙でとっただけです」

毒物を触るのも嫌だというらしく、布で触れずに包み込んだという。

それを聞いて、猫猫は唇をゆがめる。

「なるほど。少しお待ちください」

猫猫は居間を出ると、台所へと向かう。
ごそごそとあるものをとりだす。

次は先ほど眠っていた寝室へ。
上等の褥（しとね）に頭を下げ、布と布の縫い目をほどき、中身を取り出し居間に戻る。

持ってきたのは白い粉と柔らかそうな綿だった。

猫猫は綿を丸めると、粉をつける。
それをぽんぽんと銀の器にはたいた。
高順は首を傾げ、のぞきこんでくる。
「これは？」
器に粉のあとが残る。
「人間の手が触れた跡です」
指先は油が出やすく、金属など触れるとそこのあとが残るのだ。
腐食の激しい銀食器ならなおのことだろう。
昔、おやじどのが猫猫の悪戯防止にと、触ってはいけない器に染料をつけていたことがあった。
それを参考にして、思いつきでやってみたら案外うまくいくものである。粉の粒子がもっと細かければ、もう少しはっきり見えただろう。
「銀食器は使う前に必ず布で拭きます。くもりがあっては意味がありませんので」
食器には指のあとがいくつかついている。
指の大きさと位置でどのように持っているのかくらいは推測できそうだ。
（さすがに模様までは読み取れないな）
「器を持ったのは……」

言いかけてしまったと思った。
それを逃す高順でもない。

「いかがしましたか？」
「いいえ」

下手に隠し立てしようとも意味はない。
昨日のごまかしは無駄になるがしょうがない。

「全部でおそらく四人。この器を触れていますね」

指先が触れないように白い模様をさしていく。

「食器磨きは指をつけることがないので、羹（あつもの）をよそったもの、配膳したもの、それと徳妃の毒見役ともうひとりの誰か」

高順が精悍（せいかん）な顔をあげて猫猫を見た。

「なぜ毒見役が？」

できれば穏便にすませたい。
それは、この寡黙な男の器量次第である。

「簡単なことです」

猫猫は器を置いた。
顔に苦味が走る。

「いじめですよ」

# 24　麒麟

「いじめ……」

高順（ガオシュン）は信じられない顔をする。

それはそうだ。上級妃に対して侍女が、そのようなことするなどあってはならない。ありえないのだ。

「信じられないようですね」

むこうが知りたがらないようなら、猫猫（マオマオ）も話そうとは思わない。

憶測でものをいうのは好きではない。

しかし、侍女がなぜ器に触れたのか説明するには、それを話す必要がある。

下手なごまかしを入れるより正直に意見を述べることにした。

「聞かせてもらえますか？」

「わかりました。これはあくまで私の憶測であることを前もって言っておきます」

「問題ありません」

まず、里樹妃（リーシュ）の特殊な立場から述べる。

幼いながら先帝の妃となり、そしてすぐに出家する羽目になる。

多くの女は、夫に妻は身を以（も）って尽くすよう教育される。育ちがいいものほどそれが顕著（けんちょ）だ。

たとえ政略とはいえ里樹妃が、亡くなった夫の息子のもとに嫁ぐな

ど不徳も甚だしいということである。

「里樹妃の園遊会の衣をみましたか？」

「……」

「空気、読めてませんでしたよね」

しかし、お付のものは皆、白に準ずる衣を着ていた。

「普通なら、侍女は妃にまともな衣装をすすめるなり、もしくは合わせて準ずる衣を着るなりするはずです。でもあれは、まるで里樹妃が道化にしか見えなかった」

侍女は主を立てるものである。それは、紅娘が他の侍女に言い聞かせている言葉である。それは、園遊会の際、桜花のいった言葉でも如実にわかる。

そのように考えれば、里樹妃の衣装のことで侍女同士がもめていた件も違う見方が出てくる。

（ふがいない里樹妃の侍女たちを淑妃の侍女たちがいさめていた）

年若い里樹妃は、侍女におだてられて似合うからとあの衣装をつけたに違いない。

何の疑いもなく。

後宮内では、周りは皆が敵、信じられるのはまわりの侍女たちだけだというのに。

「それだけでなく、食事を入れ替えて里樹妃を困らせようとしたと」

高順が確かめるようにたずねる。

「ええ。結果として命拾いをしましたけど」

河豚（ふぐ）の毒は、しばらくたたねば効果はない。つまり、入れ替えていなければ、毒見が無事だと思い口にしていただろう。時間は十分にある。

「いやなやり方です」

（憶測はそこまでにして）

器を再び手に取り、指をさす。

「これは多分、毒をまぜたものの指のあとでしょう。ふちを押さえて毒を混ぜいれたのかと」

食器のふちに触れてはいけない。それも、紅娘の教えである。やんごとなきかたの唇が触れる場所を指で汚してはならないからだ。

「私の見解は以上です」

高順は顎をさすって銀食器を見ていた。

「ひとつ聞いてよいですか」

「何でしょう？」

食器を包み、高順に渡す。

「なんで、あの侍女をかばおうとしたのですか？」

怪訝に見る猫猫に対し、高順は興味本位です、と付け加えた。

「妃に比べたら侍女の命など軽くたやすいものです」

ましてや、毒見役ならば。

高順は、いわんとしたことがわかったらしく軽く頷く。

「壬氏さまにはうまく説明します」

「ありがとうございます」

高順が退出したのを見送ると、猫猫はどすんと椅子に腰かけた。

「そうだよね。お礼はしないとね」

（せっかく取り換えてくれたんだから）

やっぱり、飲み込んでおけばよかったなあ、と思いながら。

○●○

「以上で終了です」

高順の報告を聞き、壬氏は髪をかきあげた。

机には書類が重ねられ、判を待っている。

「いつ聞いてもおまえの物言いはうまいなあ」

「そうでしょうか」

精悍な従者はにべもなく言う。

「どう考えても内部犯だよな」

「状況からはそうなります」

頭が痛くなる。

思考を放棄したい。

なにせ、昨日から眠る暇もない。

着替えもできていない。

地団太（じだんだ）を踏みたくなる。

「素（す）が出てきていますよ」

普段の笑顔はなく、年相応に不貞腐れていた。

それが高順にははっきりわかるらしい。

「誰もいないからよくないか？」

「私がいます」

「そこはおまけで」

「だめです」

軽口を聞いてみるが、生真面目なこの男には通用しない。

生まれたときから面倒をみられるのも厄介なものである。

「簪（かんざし）、さしたままです」

「ああ、いけね」
「隠れていたので、気づくものはいないかと」
深くささった簪を引き抜くと、匠の透かし細工が現れる。
鹿とも馬とも言い難い伝説の動物は麒麟（きりん）といった。
「頼むわ、保管」
無造作にそれを投げつける。
「大切にしてください。大事なものなのですから」
「わかってるよ」
「わかってません」
お小言を言い終えると、十六年来の世話役は執務室をあとにした。
壬氏は、子どもの顔のまま、机に突っ伏した。
仕事はたくさん残っている。
はやく暇を作らねば。
「やるか」
大きく背伸びをして筆をとる。
暇人になるために、仕事を終わらせなければならなかった。

## 24　麒麟（後書き）

まあ、ご想像のとおりですね。

# 25　李白

どうやら、くだんの毒殺騒ぎはけっこう大事（おおごと）らしい。

小蘭（シャオラン）は猫猫（マオマオ）に食ってかかるように聞いてくる。

洗濯小屋の裏は、下女たちの駄弁（だべ）り場所（スポット）となっている。そこで、木箱の上に座り、団子のように連なった山査子（さんざし）を食べる。

（まさか当事者だとは思うまい）

小蘭の山査子を頬張りながら足をぶらぶらさせる姿は、年齢よりも幼く見える。

「猫猫のところの侍女なんでしょ。毒食べたのって」

「そうだけど」

嘘は言ってない。

「何か知らないけど、何者だって話なんだけど。大丈夫なわけ？」

「そうだね」

なんだかとても居心地が悪いので何度もはぐらかすと、小蘭は仕方ないと口を尖らせた。

小蘭は一粒残った山査子の串をぶらぶらさせる。まるで血赤珊瑚の玉簪（たまかんざし）のようである。

「じゃあさあ。簪とかもらったりした？」

「一応」

義理を含む、計四つ。玉葉妃（ギョクヨウ）の首飾りもいれておく。

「いいなあ。じゃあ、こっから出られるんだね」

（ん？）

「今、なんて言った？」

「えっ？こっから出るんじゃないの」

桜花（インファ）がしつこく言っていた。

それを聞き流していたのは自分だった。

失敗したと頭を抱える。

かぶりをふり自己嫌悪に陥る。

「どしたん？」

怪訝に眺める小蘭を見た。

「それ、詳しく教えて」

いつになくやる気のある猫猫を見て、小蘭は胸を張る。

「あい、わかった」

おしゃべり娘は箸の使い方について教えてくれた。

○●○

李白（リハク）が呼び出されたのは、修練のあとのことだった。
汗を拭きつつ、刃びきした剣を部下に渡す。

なよなよしい宦官（かんがん）は、木簡と女物の簪を渡した。
桃色珊瑚（ももいろさんご）の飾りのついたそれは、以前、幾多（いくた）も配ったうちの一つに過ぎない。

義理とわかって本気にしないと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。
恥をかかせるのも悪いが、本気にされるのも困りものである。
しかし、美人であればもったいない。

やんわり断る言葉を考えながら、木簡を見る。

『翡翠宮　猫猫』

そのように書かれていた。

翡翠宮の女官にはひとりしか渡していない。
あの無愛想な侍女にしか。

はてはてと、顎をさすりながら李白は着替えの準備をした。

後宮内は基本男子禁制である。

べつに切り落としたわけでもない李白は、当然禁断の園である。今後はいることもなかろうし、あったら困ることである。

そんな恐ろしい場所であるが、特別な許可を取れば、中の女官を呼ぶことができる。

その手段がこの簪だった。いくつかの手段のひとつである。

中央門の詰所を借り、呼び出し人を待つ。

さして広くない部屋には机と椅子が二人分、両側の扉の前には宦官がひとりずつ立っている。

後宮側の扉から、痩せた小柄な侍女が現れた。

鼻の周りにそばかすとしみがおおっていた。

「誰だ、おまえ?」

「よく言われます」

無愛想に淡々と話す侍女は、手のひらで鼻の周りを隠した。見たことある顔が現れる。

「化粧で化けるって言われないか?」

「よく言われます」

不機嫌な様子もなく事実として受け止めている。

なんとなく理解できる。

あの毒見役の侍女であると。

しかし、しみだらけの顔を見るとどうにもあの妖艶(ようえん)な妓女の笑みとつながらない。

まったくもって不思議なものだ。

「しかし、また俺を呼び出すなんて、どういう意味かわかっているのか？」

腕を組み、足も組む。

身体の大きな武官が偉そうに座る中、小柄な娘は物怖じもせず言ってくれる。

「実家に戻りたいと思いまして」

何の感慨もなく言うのである。

李白は頭をかきむしる。

「それで、俺に手伝えと？」

「ええ。身元を保証していただければ、一時帰宅は可能と聞きましたので」

とんでもないことを言い出すものである。

本来の意味をわかっているのか、と聞き出したい。

どうにもこの猫猫という娘は、自分を里帰りのために利用しようとしているらしい。武官をつかまえてやることではない。

豪胆というやら、命知らずというやら。

李白は頬杖をつき、鼻を鳴らす。

態度が悪いといわれようと、正す気もならない。

「なんだ？俺は嬢ちゃんにうまく利用されろってことか？」

李白は、好漢だといわれているが、睨み付けるとそれなりに恐ろしい顔である。
怠ける部下を叱りつけると、関係ないものまで謝ってくる程度に。
それなのに、眉一つ動かそうともしない。
感慨なく、眺めているだけである。

「いいえ、こちらもそれなりにお礼ができないかと」

猫猫は机の上に、束ねた木簡を置く。
紹介状のように見える。

「梅梅（メイメイ）、白鈴（パイリン）、女華（ジョカ）」

女の名だ、李白には聞き覚えがあった。いや、李白以外にも多くの男どもが知っているはずだ。

「緑青館（ろくしょうかん）で花見はいかがかと」

一晩で一年分の銀が尽く、高級妓楼の名前だった。先ほどの名前は、三姫と呼ばれる売れっ子たちだ。

「心配ならば、これを見せればわかります」

娘は唇を歪ませるだけの笑みを向けていた。

「冗談だろ？」
「お確かめを」

まったく信じられないことである。

たかだか、侍女程度に高級官僚もなかなか手を出せない妓楼（ぎろう）に伝手（つて）があるとは考えにくい。
どういうことだ。

わけがわからないと頭をまたかきむしると、娘はふとため息をつき立ち上がった。

「どうしたんだ？」
「信じていないようですので。お手間をかけました」

すっと胸元から何かを取り出す。
二本の簪、紅水晶と銀製のものだ。

「申し訳ありませんでした。他を当たりますので」
「ちょ、ちょっ」

持っていこうとした木簡を押さえる。
表情のない猫猫の目が李白を見ていた。

「どうなさいますか？」

負けたと思った。

○●○

「よかったんでしょうか？玉葉さま」

紅娘（ホンニャン）は扉の隙間から、猫猫を見る。普段に比べ血色がよく、うきう

きと荷造りをしている。
本人はあれでいつもどおりのつもりだから不思議なものだ。

「まあ、三日だけだしね」
「そうですけど」

侍女頭は自分につかまり立ちしようとする公主を抱き上げる。

「絶対、わかってないでしょうけど」
「そうね、絶対」

他の侍女たちは、猫猫に「おめでとう」と伝えているのだが本人はわかってないらしい。お土産買ってくると呑気な返事をしている。

玉葉妃は窓辺に立ち、外を眺める。

「まったく、可哀そうなのはあの子だわ」

ふうっと、ため息をつくが、そこに悪戯な笑みが浮かんでいた。

仕事を片付けてようやく暇人になった壬氏（ジンシ）が翡翠宮をおとずれるのは、猫猫の出発した翌日のことである。

# 25　李白（後書き）

フラグクラッシャー

# 26　里帰り

帰りたい、帰りたいといっていた花街は、それほど遠い場所ではない。
後宮ひとつで町ひとつと変わらない大きさだが、それをすっぽり囲むのが王都である。
花街は宮廷の反対側にあり、高い塀と深い堀をこえれば、歩いて行ける距離にある。

（馬車で行くなど贅沢なのに）

隣に座る大男、李白（リハク）は馬の手綱を持って鼻歌を歌っている。
木簡（もっかん）を渡し、話が本当だとわかったからだ。
憧れの妓女に会えるなら、そんなものなのだろうか。

妓女と言っても、一括りにしてはいけない。
身を売るものもいれば、芸を売るものもいる。
売れっ子と言われるものほど、客は多くとらない。それによって希少価値を上げるためだ。

茶を一つ飲むのに銀をいくらでも払わねばならない、夜伽（よとぎ）などもってのほかだ。
そんな奉（たてまつ）られた存在は、一種の偶像となり、市民の憧れとなるのである。
町娘の中には、憧れて遊郭の門をたたく者もいる。それになれるのはほんの一握りだというのに。
緑青館（ろくしょうかん）は王都の花街の中でも老舗（しにせ）で、中級から最上級の妓女（ぎじょ）を取り揃えている。

その最上級の中に、猫猫（マオマオ）が小姐と呼ぶものたちがいる。

がたんがたんと揺れる馬車から懐かしい風景が見える。
食べたかった串焼き屋は、香ばしい匂いを通りにまき散らしていた。
水路に沿い柳が揺れ、薪（まき）売りが声を上げている。

豪奢な門をくぐると、極彩色にまみれた世界が広がっている。
まだ昼間というだけに、人通りも少ないが暇な遊女が二階の欄干から手を振っている。

一際大きな門構えを持つ楼閣の前で馬車は止まった。

猫猫は軽い足取りで馬車を降りると、入口に立つ老婆に駆け寄った。

「ひさしぶり、婆さん」

煙管（きせる）を噛む痩せた女にいった。その昔、真珠の涙を持つと言われた遊女は、今では、涙も枯れ果て枯木のようになっている。身請けも断り、年季が明けても居残り続け、今では誰もが恐れるやり手婆になっている。時は残酷だ。

「なにが、ひさしぶりだい。こん莫迦娘（ばかむすめ）」

みぞおちに衝撃が走る。
胃液が逆流し、口の中が酸っぱくなるのも懐かしいと思うのだから不思議なものだ。
過去、何度これで摂取量をこえた毒物を吐き戻したことだろう。

基本、お人よしの李白はわけがわからないまま、猫猫の背中をさすっている。

なんだ、この婆と顔が語っていた。
汚した地面をつま先で土をかける。
隣の李白は心配そうに猫猫を見る。

「ふーん、これが上客かい？」

値踏みをするように李白を眺める。
馬車は店の男衆（おとこしゅう）にあずけた。

「いい体格だね。顔立ちも男前だ。話によると、出世株みたいじゃないか」
「婆ちゃん、それ、本人の目の前でいうのどうよ」

やり手婆は素知らぬ顔で、門前を掃除する禿（かむろ）を呼ぶ。

「白鈴（パイリン）呼んできな。今日は、茶挽きのはずだ」
「白鈴……」

李白が、ごくりと喉を鳴らす。
舞踊が得意と聞く名の知れた妓女である。

李白の名誉のためにいっておくが、それは単なる遊び女に対する情欲でなく、憧憬の思いである。
雲の上の偶像（アイドル）に、目の前で会えること、茶を同席することでさえ、名誉なのだから。

（白鈴小姐かあ、ひょっとしたらひょっとするかもなあ）

「李白さま」

猫猫は隣で呆けている大男をつつく。

「上腕二頭筋に自信はありますか？」

「よくわからんが、身体は鍛えているつもりだぞ？」

「そうですか。うまくやってくださいね」

首を傾げる大男は、女童に連れられて行った。

猫猫としては、ここまで連れてきてくれたことに感謝している。やはり、それ相応にお返しもしたいわけである。

一夜の夢が見られれば、一生の思い出になるだろう。

「猫猫」

しわがれた声の主は、恐ろしい笑みを浮かべている。

「十月（とつき）も連絡よこさず消えやがって」

「しかたないだろ、後宮で働いてたんだから」

木簡にしたためて、大体の説明はしてある。

「一見お断りのところを、こんだけ面倒見てやったんだ」

「わかってるって」

懐（ふところ）から袋を取り出す。

今まで後宮で働いた給金の半分だ。

「こんだけじゃあ、足りないねえ」

「まさか、白鈴小姐だすとは思わないけど」

上級妓女なら一晩いい夢を見ておつりがくるはずだった。
李白とて、ひとめでも三姫に会えたらそれで満足しただろう。

「お茶位ならぎりぎり負けてくんない？」
「莫迦。あの腕っぷしで白鈴が何もしないわけないだろ」

（やっぱり）

最上級の妓女は身を売らないというが、恋をしないわけじゃない。
まあ、そういうことである。

「それって不可抗力……」
「なわけあるかい。ちゃんと勘定に入れとくからね」
「払えないって」

（残りをいれても足りないなあ。どう考えても）

考え込む猫猫。
どうみても言いがかりである。

「なあに、最悪、身体で払えばいいことさ。お上から女郎屋にうつるだけだ、かわりないさ。おまえみたいな傷物でも、すき好む好事家はいるからね」

ここ数年、婆は猫猫にやたら妓女になることをすすめてくる。一生を花街にささげたこの婆は、妓女が不幸な職とは思っちゃいない。

「年季まだ一年残ってんだけど」
「なら、上客どんどんよこしな。爺じゃなくて、さっきみたいな長

く適度に搾り取れそうなのをさ」

（うーむ。やっぱり搾り取られるか）

強欲婆は算段しか頭にない。

身売りはもうけっこうなので、今後、生贄を適度に送らなければならなくなった。

（宦官でも客になるのか）

壬氏（ジンシ）の顔が浮かんだが、あれはだめである。

妓女たちが本気になり、店がつぶれかねないので却下である。

だからといって高順（ガオシュン）ややぶ医者には悪い気がする。やり手婆に搾り取らせるまねはしがたい。

出会いの場がないというのは、本当に不便なものだ。

「猫猫、爺（じじい）はいま家にいるはずだから、さっさといってやんな」

「ああ、わかった」

深く考えても今のところ解決策はない。

猫猫は緑青館の脇道を抜ける。

通りを一つ抜けると、花街はとたんにさびしいものとなる。

掘立小屋が立ち並び、割れた茶碗に銭がたまるのを待つ物乞いや、

梅毒のあとが見える夜鷹（よだか）もいる。

寂れた小屋のひとつが猫猫の家である。

二間の土間しかない狭い家に、背を丸め、すり鉢をするものがいる。
深くしわの刻まれた、柔らかい輪郭をした、まるで老婆のような男である。

「ただいま。おやじ」
「おう、遅かったね」

普段通りの挨拶をし、何事もなかったかのようによろけた足取りで茶を用意する。
使い古された湯飲みに茶を入れるのでそれをいただく。
ぽつぽつと今まであったことを話すと、おやじどのはそれに相槌をうつだけだった。

薬草と芋でかさ増しした粥を夕餉（ゆうげ）にとると、そのまま眠ることにした。風呂は明日、緑青館でもらい湯でもしよう。

土間に菰（こも）を敷いただけの簡素な寝床に丸くなった。
おやじどのは上から着物を重ねて着せ、竈（かまど）の火を絶やさぬようにすり鉢をすっていた。

「後宮か。因果だねえ」

おやじどのがつぶやいた言葉は、眠気の奥に消えていった。

# 27　誤解（前書き）

だらだら会話ばかりの回です。

# 27　誤解

三日間の里帰りはあっというまに過ぎていった。

懐かしい顔ぶれにあい、ずっとこのままいたい気持ちも強かったが、後宮の仕事を放棄するわけもいかず、また、身元引受人の李白（リハク）に迷惑がかかるので帰らないわけにいかない。

なにより、どんな嗜虐趣味（サディスト）を猫猫（マオマオ）の初売りに出そうか考えているやり手婆に背中を押されたこととなる。

（いい夢みれたみたいだな）

やたらつやつやしている白鈴（パイリン）小姐と、眼尻が下がりはちみつに漬けた杏（あんず）のようにかわった李白を見ると、過剰に報酬を払い過ぎたと後悔した。

おかげで次の身売り先が決定である。

まあ、一度、天上の甘露を知った李白には、地上のそれが口に合わなくなることに多少は同情した。

きっとやり手婆は、生かさず殺さず搾り取ることだろう。

そこまでは、猫猫に責任はない。

そんなわけで、土産を持って翡翠宮（ひすいきゅう）に帰ってきたわけであるが、い

たのはやたら剣呑な空気を纏う天女のような青年だった。

柔和な笑みの向こうに蠱毒のような禍々しい気を感じる。

なぜだろう、やたらこっちをにらんでいる。

性格はなんであれ、美人は美人だ。それににらまれれば、迫力である。

面倒くさそうなのでできるだけ関わらないように頭だけ下げて、自室に向かおうとすると、しっかり肩をつかまれた。爪が食い込むいきおいである。

「応接室で待ってるぞ」

耳元にはちみつのような声が流れる。蜜は蜜でも、鳥兜の蜜である。

後ろで、諦めろと目で語る高順。
困ったようで目を輝かせている玉葉妃。
なぜだか猫猫を責めるような目で見る紅娘。

侍女三人娘も、心配より好奇心が上回っている。
あとで根掘り葉掘り聞かれることだろう。

（一体、なにがどうしたと？）

荷を置き、侍女服に着替え終わると応接間に向かった。

「なにかご用でしょうか？」

部屋には壬氏（ジンシ）一人しかいない。簡素な官服を優雅に着こなし、椅子に足を組み、卓（テーブル）に肘をついている。なんだか、いつもより態度が悪い気がする。気のせいだろうか、気のせいにしたい、気のせいにしよう。

清涼剤たる高順もいない。

玉葉妃も見当たらない。

まあ、つまりいたたまれない。

「里帰り、いってきたようだな」

「はい」

「どうだった？」

「皆、元気そうでなによりでした」

「そうか」

「はい」

「……」

「……」

「李白っていうのは、どういう男なんだ？」

「はい。身元引受人です」

（なぜに名前を？）

今後の常連でもある。大切な金づるだ。

「意味がわかっているのか？その意味が」
「ええ。身元のしっかりした高官でなければ、引受人にはなれないと」
壬氏は、なんだかものすごく疲れた顔をしている。
当たり前のことはいうなということだろうか。
「簪（かんざし）をもらったのか？」
「何本も配っていましたので。義理でいただきました」
今考えると、太っ腹である。簡素な意匠（シンプルデザイン）だが、作りのしっかりした簪だった。
「つまり、義理で貰ったものに、俺は負けたんだな？」
（俺？）
聞きなれぬ一人称に首を傾げる。
「俺もあげたはずなんだが、まったく話は来なかったな」
不貞腐れたような顔をする。
天女の笑みはそこになく、猫猫とさほど歳の変わらない、もしくはそれよりも幼く見えた。
表情一つでここまで変わる人間っているものだと感心する。
どうやら、李白に頼り、壬氏に話が来なかったということが気に食わないらしい。不思議なものだ。面倒事は関わらないほうが楽に決まっているのに。そこのところは暇人だからか。

「申し訳ありません。壬氏さまに満足いただける対価など、私には思いつかなかったもので」

（宦官を妓楼に誘うなど、失礼でなかろうか）

茶飲みや詩歌を吟ずるだけの場所ならいざ知らず、色事にふけることもあるところだ。男でなくなった人間をそこに誘うのは気が引ける。

なにより、壬氏ほどの人間だ。そんじょそこらの妓女ならば木乃伊とりが木乃伊になる。

「対価ってなんだ？おまえ、それを李白ってやつに払ったのか？」

なにやら怪訝な顔をしている。

不機嫌に加えて、不安な表情が混じる。

「ええ、一夜の夢に喜んでおりました」

（あれじゃあ、しばらく現に戻れまい）

勇ましい武人も白鈴小姐にしてみれば、猫の子のようなものだろう。

今後、小判を運んでくるのか。

壬氏をみると、どうにも血の気の失せた顔をしている。

茶碗を持つ手が震えている。

（部屋が寒いのだろうか）

猫猫は火鉢に炭をくわえると、扇子で火をあおった。

「大変満足いただけたようで、こちらとしても頑張ったかいがありました」

（新規顧客探しも頑張らないと）

決意を新たに拳を結ぶと、後ろで茶碗の割れた音がした。

「なにしてるんですか？」

陶器の欠片が散らばっている。

青白い顔で突っ立っている壬氏の服は、茶のしみで濡れていた。

「ああ、すぐ拭くもの持ってきますから」

扉を開けるとそこには、お腹を抱えて笑っている玉葉妃。

ものすごく疲れた顔をした高順。

呆れてものが言えない紅娘がいた。

猫猫はわけがわからないまま、とりあえず布巾（ふきん）を探しに台所へと向かった。

○●○

「いつまでいじけているのですか」

執務室に戻っても壬氏は机に突っ伏したままである。

高順は深くためいきをつく。

「仕事中だということを忘れないでください」
「わかってるよ」

わかっていない。
壬氏という人物はそのような子どもみたいな返事はしない。
玩具（おもちゃ）に深く執着しない。

あの後、笑い転げる玉葉妃から事の詳細を聞くのに苦労した。
身元引受の見返りとは、憧れの人気妓女（スター）との面会だったという。あの娘にそんな伝手があったとは、まったく想像がつかなかった。

しかし、主（あるじ）はどんな想像をしたことやら。ああ、若いって恐ろしい。

幾分、落ち着きを取り戻しているが、それでも不満が残るらしい。

まあ、仕事を急いで終わらせて会いに行けば、知らぬ男と里帰りなど青天の霹靂（へきれき）には違いあるまい。

いつまでも子どもをなだめている暇はない。
高順は漆の箱を机に置くと、中から書簡を取り出した。

「先日の報告がようやく届きました」

火傷の女官を探せという。あれからひと月はたっていた。

「時間のかけ過ぎだ」

うつむいた顔をあげ、壬氏の顔にもどる。

「申し訳ありません」

言い訳を付け加えることはしない。
それが高順の信条だった。

「一体、誰だ？」
「はい。意外と大物でした」

書簡を机の上に広げる。

「柘榴宮（ざくろきゅう）、風明（フォンミン）。淑妃の侍女頭です」

## 28　自他

「うわー、お嬢ちゃんもついてきてくれないかね」

やぶ医者が肩を震わせながら頼むものだから、何だと思えば。
連れてこられたのは、北門の屯所（とんしょ）前である。
幾人もの宦官（かんがん）がなにかを取り囲み、そのまわりを同心円（ドーナツ）状に女官たちが集まっている。

「冬場でよかったですね」

筵（むしろ）に隠れるは、青白い顔をした女。髪がはりつき、唇が青黒くなっている。
水死体のわりにきれいな姿をしているが、やはり見ていて気持ちのいいものでなかろう。寒い季節で本当によかった。

検死をすべきやぶ医者だが、乙女のように猫猫（マオマオ）の背中に隠れている。
まったくもって、やぶ医者である。

今朝、外の堀に浮かんでいたらしい。
恰好からどう見ても後宮内の女官である。
外で処理することはままならず、こうしてやぶ医者が呼ばれたのであるが。

「嬢ちゃんかわりに、見てくれないかい？」

どじょうひげを震わせて、上目使いで見てくるがそんなの知ったことではない。
ひとをなんだと思っているのだろう。

「だめです。死体にはさわるなといわれているので」
「それは意外なことだな」

これまた、失礼なことをいうのは、聞きなれた天上の声だった。いうまでもなく、周りの女官が嬌声（きょうせい）を上げる。作られすぎて、舞台劇でも見ているようだ。

「ごきげんよう、壬氏（ジンシ）さま」

（死体の前でご機嫌もなにもありませんが）

普段通り、何の感慨も持たず麗しき青年を見る。後ろには、いうまでもなく高順（ガオシュン）が控えている。常に、目線で猫猫に訴える苦労人だ。

「で、老師（せんせい）。ちゃんと見てもらえないだろうか」
「わかりました」

少し顔を赤らめながら、やはり気の進まぬ様子で水死体を見る。恐る恐るかぶせた筵をめくり上げる。
後ろで女官たちの驚く声が響く。

背の高い女で、固い木靴を履いており、脱げた片足には包帯が巻かれていた。指先は真っ赤で、爪がむごたらしく傷んでいる。
衣から尚食のものだとわかる。

「見るのは平気そうだが」
「慣れた風景です」

きれいな花街も一歩裏に入れば、無法地帯である。

若い娘が犯され、まわされ、無残な姿で見つかることも少なくない。
一見、遊女は籠に囲われ自由がないように思えるが、一方で周りの危険に巻き込まれないよう保護しているともいえる。

「後で見解を聞こう」
「わかりました」

（冷たかっただろうな）

猫猫は、やぶ医者が検死を終えると、筵を丁寧にかぶせてやった。
今更やっても意味のないことであるが。

連れてこられたのは、宮官長の部屋だった。
いつもどおり、宮官長は外で待機してもらっている。
翡翠宮で、死体の話をするなど避けたかったからだ。
赤子のいる場にふさわしくない。

（いっそ、自室作ればいいのに）

年嵩のいった長に頭を下げる。
毎度毎度申し訳ない。

「衛兵の見解としては、投身自殺といっているが」

塀を上り、堀に身を投げたのだろうと。

娘はやはり尚食の下女で、昨日まで働いていたらしい。そうなると、昨夜に身を投げたこととなる。

「自殺かどうかはわかりませんが、少なくとも一人では無理だと思います」

「どういうことだ」

優雅に椅子に座る壬氏は優美な声できいてくる。

先日の妙に慌てた青年とは別人のようである。

「城壁にはしごがありませんでした」

「そりゃそうだな」

「鉤縄使って上れますか？」

「そりゃ無理だろうな」

試すように聞いてくる、本当にやりにくい。

いちいち聞くなと言いたいが、高順が見ているので黙っておく。

「別に、道具も使わずに上る方法はあるのですけど、あの女官には無理でしょう」

「なんだ？どんな方法があるんだ？」

以前、芙蓉姫の幽霊騒ぎの際、猫猫はずっとどうやって外壁を上っていたのか疑問だった。よじのぼれるものではない。

気になったらわかるまで追求するのが性質なので、城壁を丹念にまわってみたのだ。

見つけたのは、外壁四隅にそれぞれある突起である。わざと壁から煉瓦が飛び出しており、それに足をかけると上れないこともない。

舞踏が得意な芙蓉姫ならなんなく上っていたことだろうが。

「大抵の女性なら難しいでしょうし、ましてや纏足（てんそく）のものは」

女の足には包帯で巻きつけられ、小さな木靴を履かされていた。足を潰し、布で閉じ込め、木靴に押し込める。足が小さければより美しいという基準のもと、その行為はおこなわれる。

「他殺だというのか？」

「わかりません。ただ、生きたまま堀の中に落ちたことは確かだと思います」

赤く血に染まった指は、何度も堀の壁をかいたに違いない。冷たい水の中、考えたくもないことだ。

「もっと詳しく調べられないのか？」

断りきれないような甘い笑みを浮かべられても困る。できないものはできないのだ。

「私は死体には触れるなと、薬の師に教えられました」

「なぜだ？忌（いみ）を嫌うからか？」

薬師となれば、病人やけが人に触れる。死人とも接触は少なくなかろうと言いたいらしい。

「人間も薬の材料になるんです」

猫猫は、ぼそりと理由を言った。

どうせやるなら最後にしておけと、おやじどのから言われたことだ。

一度、手をだしたら墓荒らしくらいするだろうと、なんとも失礼なことを言われた。
それくらいの良識はあると言いたいところだが、なんだかんだで言いつけを守っている。
まあ、そういうことである。

壬氏と高順は、呆気にとられ、顔を見合すと、「なるほど」と首を縦に振りあう。高順など可哀そうなものを見る目でこちらを見ている。

まったくもって失礼であると、猫猫は震える拳を抑えるのだった。

その後、風の噂に聞いたのは、死んだ娘が先日の毒殺騒ぎの場にいたことだった。
それらしい遺書も見つかり、自殺ということで事件は幕を閉じる。

世の中、誰かの思惑で嘘も真になるものである。

# 29　蜂蜜その壱

お茶会というのも、立派な妃の仕事である。
玉葉妃(ギョクヨウ)もまた、毎日のようにおこなう。翡翠宮(ひすいきゅう)でおこなうものもあれば、よその妃に呼ばれることもある。

（大切な大切な探り合い）

猫猫(マオマオ)としては、お茶会というものがあまり好きではない。
話すのは流行(はやり)の服や化粧といったもの。
たわいもない会話の中に探り合いを入れる、まさに後宮の縮図がそこに広がっている。

（穏やかそうに見えて、やはり妃である）

玉葉妃と話すのは、西の中級妃である。
くわしいことはわからないが玉葉妃の実家とは、今後どんな関係になるか重要なところらしい。
朗らかな玉葉妃のしゃべりに多くの他の妃たちは、ふとしたことでこぼすことが多い。
それを文にしたためるのが、玉葉妃の仕事の一つである。

（昨夜はずいぶん遅かったのに、眠くはないのだろうか）

寵妃たる玉葉のもとに、皇帝は三日とあけず通い詰める。つかまり立ちをはじめた娘に会うためであるが、まあ、訪問の理由はそれだけではないのも言うまでもない。
昼の仕事もおろそかにしないところから、いろいろ元気なことはうかがえる。

茶会が終わると、桜花（インファ）から大量の茶菓子をもらう。食べないわけではないが、量が多すぎるのでいつもどおり小蘭（シャオラン）のもとに向かった。

ときに舌足らずなおしゃべりをする小蘭は、いつもどおり仕入れた噂を話してくれる。

自殺した下女のこと、毒殺事件との関連、そしてなぜだか淑妃について。

「まあ、四夫人といっても年齢が年齢だけにね」

玉葉妃は十九、梨花（リファ）妃は二十三、里樹（リーシュ）妃は十四。

淑妃こと阿多（アードゥオ）妃は三十五、皇帝のひとつ上である。

子を産むのはまだ可能であるが、後宮という制度上、阿多妃はお褥（しとね）すべりをせざるをえない。

つまり、今後、国母になることは不可能である。

位を下げ、新しい上級妃を輿入れするという話が持ち上がっているらしい。

随分前から上がっている話らしいが、皇帝の東宮時代からの妃であり、一度は男児の母になったことがあることから、なかなか踏み切れないそうだ。

（死んだ前の男児の母親か）

このまま梨花妃も、皇帝の子を孕まねば同じようになるのだろうか。

それだけでない、玉葉妃もいつまでも寵愛を受け続けると断言できない。

美しい花もいつかは萎れるものだから。

後宮の花は、実を結ばねば意味がない。

慣れてきたとはいえ、やはり後宮は濁った澱の底にあるのだと思う。

猫猫は、食べこぼした月餅の欠片を払うと、空を覆う重い雲を見た。

今日の茶会の相手は少々、毛色が変わっていた。

相手は里樹妃、同じ四夫人である。

同じ階級の妃同士茶会をするのは珍しく、とくに上級妃であればなおのことだ。

幼い顔立ちの里樹妃は、緊張した面持ちで、侍女を四人連れてやってきた。

あの毒見役もいる。

猫猫が心配するほど罰は受けていないらしい。

外は寒いので、中で茶会を行う。

宦官を使い、応接間に侍女用にと長椅子を用意させる。円卓は螺鈿のはいったものである。帳は刺繍入りの新しいものに取り換える。

正直、皇帝が訪れるときにもこんなに気を使うことはないのだが、やはり同性であれば身構えてしまうのは女だからだろうか。化粧も気合が入り、猫猫もいつものそばかす化粧をはがされてしまった。威嚇するように、眼尻に赤い線を入れられる。

年の功か常に玉葉妃が話しており、里樹妃はおずおずとうなずくばかりだ。

後ろに控える侍女たちは、自分の主のことよりも、翡翠宮の調度のことが気になるらしく、ちらりちらりと部屋中に視線を回している。毒見係だけは、猫猫に対するように妃の後ろに立っており、以前、脅してきた猫猫をうかがうように見ている。

（なんだかなあ）

水晶宮の侍女たちといい、ひとを化け物扱いするのはやめていただきたい。

（一見すればごく普通の侍女たちだ）

猫猫は、以前、妃がいじめられていると高順に報告した。間違っていれば少々困るが、幸いなことである。

猫猫をのぞく少数精鋭の翡翠宮の侍女たちに比べれば、動きは鈍いように思えるが、仕事はやってくれている。まあ、今日の茶会の主人は玉葉妃なので、仕事自体すくないこともある。

愛藍（アイラン）が陶器の壺と湯を持ってくる。

「甘いものは嫌いじゃないかしら？今日も寒いから、こういうのはどうかと思って」

「甘いものは好きです」

玉葉妃の言葉に、里樹妃は答える。

壺の中身は、柑橘の皮をはちみつで煮たものだ。身体があたたまり、喉も潤う。

（おや？）

甘いものが好きだといったばかりなのに、里樹妃の顔色が変わる。毒見もなんだか言いたげに茶碗に注がれるはちみつを見る。

（はちみつも駄目なのか？）

後ろに控える侍女たちは、なにも言おうとしない。ただ、呆れた顔をして里樹妃を見ている。好き嫌いはやめろと言わんばかりだ。

猫猫は小さく息を吐き、玉葉妃に耳打ちをする。

玉葉妃は、あららと目を見開き、愛藍を呼んだ。

「ごめんなさい。これ、もう少し漬け込んだほうがいいみたい。違うものだすわ。生姜（しょうが）湯は飲めるかしら」

「はい。大丈夫です」

なんだか声色に元気が戻ってきたようで、茶を変更して正解だったらしい。

そして、猫猫の予測も残念ながら正解だったらしい。

ほんの一瞬であるが、つまらなさそうにこちらを見る侍女と目があった。

夕刻、現れたのはいつもどおり麗しき宦官である。天女の笑みの背後には、高順が付いている。最近、眉間にしわが増えているように思えるが、なにか気苦労でも増えたのだろうか。

「里樹妃と茶会をなさったようですね」

「ええ。楽しいひとときでした」

後宮を統べる立場にいるのか、この宦官は他の四夫人のもとを定期的に回っているらしい。

今日の茶会の組み合わせは、なんだか変だと思ったら、こやつが絡んでいたらしい。

面倒なことにならぬ前に、猫猫は退室しようとするが、いうまでもなく止められる。

「はなしていただけませんか？」

「話は終わってないんだが」

天女の眼差しをこちらに向けたところで、猫猫としては床に視線を落とすことしかできない。死んだ魚のような目をしているに違いない。

「うふふ、ずいぶん仲良しさんね」

「玉葉さま、眼精疲労には目の周りを指圧するといいですよ」

あまりに楽しそうに玉葉妃が笑うものだから、つい皮肉を返してしまった。

いけない、いけない。

失礼なことをいうなら、壬氏までにとどめておかないと。

「先日の毒殺騒ぎ、犯人は自殺した下女だというのは聞いたか」

こくりとうなづく。口調から、玉葉妃ではなく猫猫に話しかけている。

玉葉妃はなにかを察したらしく、自分から部屋を出る。

部屋に残るのは、猫猫と壬氏、そして高順だけだった。

「犯人は本当に自殺したのだろうか？」

「それを決めるのは、私ではありません」

虚を実にできるのは、権力者の力である。

判断を下したのは誰かわからないが、少なからず壬氏は関わっているはずだ。

「たかだか下女ごときが、徳妃の皿に毒を盛る理由はあるだろうか？」

「私にはわかりません」

壬氏は笑う。蠱惑(こわく)的な笑みを使い、ひとをうまく利用する。

残念ながら猫猫にはきかない。そんなことをしなくても、命令すれば断らないことはわかっているはずなのに。

「明日から、柘榴宮(ざくろきゅう)に手伝いに行ってもらえないか？」

疑問符をつけたところでなににになる。

猫猫には「御意」というほか、答えはない。

# ３０　蜂蜜その弐（前書き）

セクハラ回

# 30　蜂蜜その弐

屋敷というものは主の色に染まるといえる。
玉葉妃（ギョクヨウ）の翡翠宮（ひすいきゅう）は家庭的であり、梨花妃（リファ）の水晶宮（すいしょうきゅう）は高潔に洗練されていた。

そして、阿多妃（アードゥオ）の住まう柘榴宮（ざくろきゅう）は、実用的であった。
無駄のない造りは、過度の装飾を好まず、それがまた一種の品の良さを醸し出していた。

主たる阿多妃は、まさにそのような人といえよう。

無駄なものが削り取られたその姿は、華やかさも豊満さも愛らしさもない。しかし、その結果残ったのは、中性的な凛々しさと美しさだった。

（これで三十五ですか）

官服を着れば、若い文官と間違えるかもしれない。女官と宦官しかいない、この後宮ではどれだけ女官の羨望を集めていることだろう。
壬氏（ジンシ）とは、似て非なる魅力だった。
宴の席でどのような恰好をしていたのかは見ていないが、今着ている大袖と裳（スカート）よりも乗馬用の胡服を着たほうが似合うだろうに。

猫猫（マオマオ）は他二人の女官とともに宮を案内される。

侍女頭の風明（フォンミン）は人当りのよいふくよかな美人で、てきぱきと屋敷の中を説明する。
年末の大掃除で人手が足りない、呼び出されたのはそんな理由だ。

（けがをしている？）

風明の左腕からちらりと包帯が巻かれてあるのが見えた。

猫猫も同じように、左腕に包帯を巻いている。古い傷跡をみられるたび、遠慮した視線をおくられるのも疲れたからだ。

宦官に力仕事を任せ、調度や書物の虫干しをするだけで一日が終わった。

後宮で一番長くいるだけあって、翡翠宮よりも荷物が多い。

翡翠宮（ひすいきゅう）には戻らず、柘榴宮（ざくろきゅう）の大部屋で残り二人の下女とともに雑魚寝した。寒いからと与えられた獣の毛皮はとても暖かかった。

（なにをしろともいわれていない）

猫猫は侍女頭のいうとおり、片付けに没頭するだけであった。

ふくよかな侍女頭がうれしそうに褒めてくれるので、まったくさぼることはできなかった。

楽しそうに仕事をする、良妻というならばこのような女をいうのだろう。それが風明という侍女であった。

久しぶりにちゃんと働いた気がする。

猫のように丸くなるなり、しばらくもたたず寝息がもれた。

（本当に毒殺騒ぎの黒幕はいるのだろうか？）

翡翠宮の侍女たちも働き者であるが、柘榴宮の侍女たちも有能だと言わざるを得ない。

皆が皆、阿多妃（アードゥオ）を慕っており、ゆえに行き届いた仕事を行うのである。

特に侍女頭の風明には感嘆する。

侍女としての枠にとらわれず、埃（ほこり）を見つけたら自ら雑巾を持って掃除するのである。

到底、上級妃に仕える侍女頭とは思えない。働きものの紅娘（ホンニャン）でさえ、ほかの侍女に任せるというのに。

（口先だけの水晶宮（すいしょうきゅう）の侍女に見せてやりたい）

どうにも、梨花妃（リファ）は侍女に恵まれないらしく、彼女の周りに無駄に侍女が多いのは、ひとりひとりの仕事量が少ないことが言える。それなのに、口だけは達者だから困り者だ。

まあ、それを一手に引き受けているのも、上に立つものの才ともいえるのだが。

しかし、忠誠心が強いということは、毒殺をおこなう理由にもつながる。

四夫人の座を下ろされようとしている理由は、高官が自分の娘を入内させようとしているからだ。

下ろされるとすれば、阿多妃になるが、他の上級妃の座が空けばどうなるだろう。

玉葉妃（ギョクヨウ）や梨花妃（リファ）はともかく、おそらく里樹妃（リーシュ）のもとに皇帝は通っていないだろう。

（むちむちが好きだから）

妃としての役割を里樹妃もはたしていない。

まだ、幼い里樹妃にとってもそれが望ましいことだろう。結婚適齢年齢に達しているとはいえ、もし、数え十四で妊娠し、出産となるといくらか身体に負担が大きい。交渉自体もきついものであろう。まあ、この点については、先帝時代はどうであったかと考えるのはえぐいのでやめておく。

落とすなら里樹妃を狙うのはおかしい話ではない。

台所の棚を整理しながら、猫猫（マオマオ）は思考をめぐらしていた。

棚を見ると、小さな壺がたくさん並んでいた。甘い匂いが鼻につく。

「これはどうしましょう？」

「ああ、それね。棚を拭いて元の位置に戻しておいて頂戴」

台所を一緒に掃除していた侍女に聞く。昨日、一緒に手伝いで来た下女はそれぞれ風呂と居間を掃除しているはずだ。

「全部、はちみつですか」

「ええ。風明さまのご実家は養蜂をやっているらしいの」

「どうりで」

はちみつは贅沢品である。一種類あればいいところを、いくつもそ

ろえてあるのはそういうことか。中身を確かめてみると、琥珀色、赤茶色、褐色と色が違う。とれる花の種類が違うと、味も違う。

（はて？）

はちみつといえば、なにか引っ掛かるところがある。
ここ最近、聞いたような気がしたが。

「終わったら、二階の欄干（らんかん）拭いて行ってくれない？よく、掃除の子忘れちゃうの」
「わかりました」

猫猫ははちみつを片付けると、雑巾を持って二階に上がった。

（はちみつ、はちみつ）

欄干の柱を一本一本丁寧に拭きながら、頭の中を整理する。
最近、あったことをおさらいする。

（！？）

二階から、外はよく見える。隠れたつもりで、柘榴宮（ざくろきゅう）をうかがう人物が見える。

（里樹妃？）

毒見の娘を一人だけ連れて、なぜこんなところに来ているのか。

まったく、猫猫には理解できなかった。

（はちみつ……）

記憶の中に数日前の茶会がよみがえる。

なぜ、里樹妃ははちみつが苦手なのだろう。

ただ、そんなことが妙に気になった。

翡翠宮（ひすいきゅう）の応接間を借り、猫猫（マオマオ）は壬氏（ジンシ）に柘榴宮（ざくろきゅう）での報告を行っていた。

「と、いうことでまったくわかりませんでした」

わからないものは、わからない。

猫猫は自分を過小評価しないが、過大評価もしない。

正直に麗しき宦官に伝えた。

三日間、柘榴宮に入った結果である。

壬氏は長椅子（カウチ）に優雅に寝そべり、異国の甘い香りのする茶を楽しんでいた。檸檬（れもん）を絞り入れ、はちみつをかき混ぜている。

「そうか、そうだよな」

「ええ。そのとおりです」

ここ最近、美しい宦官は、以前ほどきらきらしなくなったのはいいが、妙に口調が軽い気がする。声色に甘さが消え、少年のように感じられるせいかもしれない。

猫猫（マオマオ）になにを求めているのか知らないが、本人はいたって普通の薬屋である。間諜（スパイ）の真似事などできるわけない。

「では、質問をかえよう。もし、とある特別な方法で外部と連絡をとる人物がいるとすれば誰だと思う？」

（また、いやな質問の仕方を）

猫猫は根拠のない考えを口に出すのは好きではない。

憶測でものをいうなという教えからだ。

猫猫は、眼を瞑り、大きく息をはく。心を落ち着けないと、また、天女のような青年を潰れた蛙でも見るような目で見てしまうかもしれない。

あいかわらず高順（ガオシュン）は必死に目でなにかを訴えている。

「可能性の話ですが、あるとすれば侍女頭の風明（フォンミン）さまではないかと」

「根拠は？」

「左腕に包帯が巻かれていました。一度、巻きなおすところを見ると、火傷のあとが見えました」

以前、薬液を浸した木簡の事件である。なにか意味があるとすれば、暗号だろうと気付いていたが、口にはださなかった。

袖の燃えた衣に木簡が包まれていたことから、腕に火傷を負っている可能性は考えられた。いうまでもなく、壬氏はそれを調べていたのだろう。そして、猫猫に間諜（スパイ）まがいのことをさせたのだろう。

正直、あのおだやかな侍女頭が何かをやっているようには見えなかったのだが、そんなもの猫猫の主観でしかない。客観的にものをみなければ、正しいことにはたどり着かない。

「まあ、及第点だな」

壬氏はふと長卓（テーブル）に置いてある小瓶に目をやった。つぎに、猫猫のほうを向き、甘露のような笑みを浮かべる。

笑みの一枚皮の下に蠢（うごめ）くなにかを感じる。

猫猫は瞬時に全身が総毛だった。

ものすごく嫌な予感がした。

小瓶を持ち、猫猫のほうに向かってくる。

「いい子にはご褒美をあげないとね」

「遠慮します」

「遠慮しなくてもいいんだけど」

「けっこうですので、他のかたに当たってください」

いい加減にしろと、射殺さんばかりの視線を向けるのだが、ひるむ様子はない。

じりじりと距離を詰められる。半歩ずつ下がった結果、背中に壁が当たる。

高順に助けを求めたが、寡黙な従者は窓辺に座り、空飛ぶ小鳥を眺めていた。妙に決まっているので小憎らしい。

（あとで下剤盛ってやる）

壬氏は誰もが蕩(とろ)けるような笑みを浮かべたまま、小瓶の中に指を入れる。たっぷりと指先にはちみつがついている。
嫌がらせにもはなはだしい。

「甘いものは嫌いなのか？」
「辛党ですので」
「でも、食べられるだろ？」

やめる気はないらしく、指先を猫猫の口に近づけてくる。
にらみつける猫猫の目をうっとりした顔で見ている。

（そういえば、そういう人間(へんたい)だった）

ここで命令と割り切って口に含むか、それとも尊厳(プライド)を保つためにどうにかして逃げ出すか。

（せめて鳥兜(とりかぶと)の蜜なら、割り切れたのに）

毒花の蜜はやはり毒である。蜂蜜に混ざり、食中毒をおこすのだ。

あれっと、猫猫の頭でなにかがつながった。
思考を整理したいところだったが、変態が執拗に指をさしだしてくるので何も考えられない。

指先が口の中に入れられそうになったとき。

「うちの侍(こ)女に何してるの」

不機嫌な顔をした玉葉妃が立っていた。

後ろでは、頭を抱えた紅娘（ホンニャン）がいる。

## 31　蜂蜜その参

「壬氏さまも、つい悪戯が過ぎただけなので、許してあげてはいかがでしょう？」

里樹妃の住まう金剛宮を案内するのは、高順である。彼の主は、さきほどの件について、翡翠宮にて玉葉妃たちにこってり絞られているはずだ。

「わかりました。今後は、高順さまが舐れば問題ないかと」

「ね、舐る……」

「わかればいいんです」

猫猫は口を尖らせたまま、つかつかと歩いていく。

まったくもって変態である。顔がよいだけにたちが悪い。

ああやって何人も誑し込んでいるに違いない。

破廉恥極まりない。

お偉方でなければ、股間でも蹴ってやるのに、と思ったが、ないものは蹴ってもしかたないなという結論に落ち着く。

そうこうしているうちに、南天の植えられた真新しい宮に到着した。

里樹妃は、桜色の衣を着、柔らかい髪を花簪でまとめている。

園遊会のときの豪奢な衣装よりも、このような可憐な衣装のほうがよく似合うと猫猫は思った。

玉葉妃がのりこんできた後、猫猫は気になることを明らかにするために、里樹妃との面会を頼んだのだ。

里樹妃は、壬氏がいないことに気付くと明らかに落胆の色を見せる。見かけだけはよいのだから、仕方ない。

「私(わたくし)に聞きたいことって、なにかしら」

扇子で口元を覆い、長椅子(カウチ)にゆったりと座っているが、そこに他の妃にあるような威厳はない。どこかおどおどした、まだ幼い妃である。

美姫と謳われるだけの美しさはあるが、女の色香はまだ纏っていない。

背後にはお付の侍女がふたり、やる気なさげに立っていた。

見知らぬそばかすの女官を不機嫌な目で見ていた里樹妃だったが、それはよく見ると園遊会のときの侍女だということに気付いたらしい。目を見開くと、少しだけ落ち着いた表情になった。

「はちみつは、嫌いですか?」

なにかしら前口上をつけて話してもよかったが、面倒なので端折(はしょ)った。

「なんでわかるの?」

「顔にでていますから」

（みりゃわかりますよ）

不思議そうな顔が、だんだん膨れていく。本当にわかりやすい。

「昔、はちみつでお腹を壊したことはありませんか」

さらに里樹妃は顔を膨らます、肯定の意だろう。

「食中毒になって、食べ物を受け付けなくなることは珍しくないですからね」

里樹妃はなにもかも見透かされたことに、不思議さと腹立たしさをいり混ぜた顔をしている。

「失礼じゃなくて。いきなり来て、里樹さまにずけずけと」

（おまえがいうか？）

先日の茶会で、はちみつ嫌いの主（あるじ）をかばおうともしなかったひとりである。

（こうやって、味方のふりをしてるんだな）

時折、外部のものを悪役にしたてあげ、里樹妃の味方のふりをする。世間知らずな幼い妃は、周りの人間を敵だと思い込む。味方は自分たちだけだと言い聞かせ、妃を孤立させる。

妃は侍女たちに頼らざるをえない、悪循環である。

本人がいじめだと気付いていなければ、なかなか表ざたにはなるま

い。園遊会のときは、調子に乗り過ぎたようだが。

「私は壬氏（ジンシ）さまの命を受けてここにきております。なにか問題がありますか」

虎の威を借るついでに面倒もつけておこう。

それくらいやってもいいはずだ。

顔を火照らせた侍女たちが、何を理由に変態宦官に近づこうとするのか楽しみである。

「もうひとつ」

猫猫は無表情のまま、里樹妃に視線を戻す。

「柘榴宮（ざくろきゅう）の侍女頭とは、以前から面識はありますか？」

驚いた顔がその答えを示していた。

○●○

「探してきてもらいたいものがあります」

猫猫に頼まれ、高順は宮廷の書庫にいた。

後宮女官である猫猫は、基本、後宮内を出ることはできない。

はて、なにがわかったのやら。

齢十七には思えぬ知識の深さと冷静さは、目を見張るものがある。
理性的に物事を考え、処理する能力は女子にしておくのが惜しいとさえ思う。もちろんそれは、一部の性癖をのぞけばの話であるが。

大変使いやすい駒。

そのように扱えばよいのに。
本人も、いやいやながら了承することだろうに。

「悪いことをした」

ぽつりとこぼす。

主の過ぎた悪戯はやはり止めるべきだったろうか。
止めたところでどうなったか。

恨みがましい猫猫の目を思い出すと、今後、なにか盛られるかもしれないという不安がよぎってきた。

○●○

（十六年前。皇弟も同時期に生まれてるのか）

猫猫の手にはひもで綴じられた書が一冊。
後宮内の出来事をまとめたものである。
高順に頼んで持ってきてもらったものだ。

現帝の東宮時代に生まれた子はひとり、母親は東宮の乳姉弟であり、

のちの淑妃である。

子は乳幼児期に死亡し、その後、先帝が崩御（ほうぎょ）し新しく後宮ができるまで子は産まれていない。

（東宮時代の妃は、ずっとひとりだったのか）

意外なことだ、好色親父のことだから東宮時代から妾をたくさん作っていたものと思っていたが。十年以上ひとりの妃と連れ添っていたとは。

やはり、噂や人伝手でなくきちんと書に記したものも必要である。

十六年前。
乳幼児死亡。
そして。

「医官、羅門（ルオメン）、追放」

見覚えのある名前を見つけた。
浮かび上がってきた感情は、驚きではなく納得だった。なんとなく、そんな気がしていたからだ。

後宮に数多く生える薬草は、皆、猫猫がよく使うものだった。
自然と生えたのではなく、以前、誰かが移植したものだと想像できた。

「おやじ、なにやってんだよ」

老婆のような足を引きずる男。

猫猫の薬の師は、片足の膝の骨を抜かれた元宦官であった。

## 32　蜂蜜その四

「玉葉妃（ギョクヨウ）からの文？」
「ええ、直接お届けするようにと」
「阿多（アードゥオ）さまは茶会にでているのだけど」

ふくよかな侍女頭、風明（フォンミン）は困ったように、猫猫（マオマオ）を見た。

猫猫はさしだした文箱を開く。中には、書のかわりに小瓶と喇叭（らっぱ）型の赤い花がひとつ入っていた。瓶から嗅ぎなれた甘い匂いがする。

それが何か、風明もわかったらしく、ぴくりと肩が動いた。

「風明さまにお話ししたいことがあります」
「わかったわ」

風明は固い面持ちのまま、柘榴宮（ざくろきゅう）に猫猫を招き入れた。

風明の自室は、紅娘（ホンニャン）の部屋とほぼ同じ造りをしていたが、なぜか荷物が部屋の隅で固められている。荷造りを終えた後のようだ。

（やっぱり）

招かれた部屋で、円卓を挟んで向かいあう。身体の暖まる雑茶に、茶請けには固めの麺麭（パン）が添えられた。上に果実のはちみつ煮がかか

っている。

「一体、どうしたの？大掃除はもう十分よ」

優しい声音だが、探るような声である。

「ええ、いつ引っ越されるのですか？」

猫猫は部屋の隅に置かれた荷を見た。

「察しがいいのね」

大掃除など、表向きの理由だった。

新年のあいさつとともに、新しい四夫人を迎えるために、阿多妃はこの宮を去らねばならない。

後宮で子を産めぬ妃はいらない。

それは長年連れ添ってきた妃でも同様で、阿多妃には強い後ろ盾はなかった。

皇帝と乳姉弟（ちきょうだい）、実の肉親よりも深い関係が今まで彼女の地位を保ってきたのだろう。

せめて、生まれた男児が生きていれば、阿多妃は大きく胸を張れただろうに。

（たぶん、阿多妃には）

青年のような凛々しい姿、それに女らしい匂いはなかった。

まるで、女が宦官にでもなったかのように。

憶測でものをいうのは嫌いである。
しかし、それが確信であれば、口にするしかなかった。

「阿多妃はもう子は産めないのですね」
「……」

沈黙は肯定を意味する。
風明の表情がどんどんこわばっていく。

「出産時になにかあったのですね」
「関係ない話じゃなくて」

中年の侍女頭は、目を細める。
そこに優しげな面倒見の良い女はおらず、敵愾心（てきがいしん）が目の奥に燃えている。

「関係ない話ではないです。出産の場にいたのは、私の養父（ちち）なので」

風明は立ち上がり、感慨もなく真実を告げる猫猫を見る。

後宮の医官は常に人手不足である。やぶ医者が今の地位に居座り続けることができる程度に。
医官という特殊な職を持ちながら、わざわざ宦官になる必要はないからだ。不器用なおやじどののことだ、体よくおしつけられたのだろう。

「不幸なのは、皇弟の出産と重なったことでしょうか。どちらかに天秤をかけた結果、阿多妃の出産は、後回しにされた」

難産の末、子は無事生まれたが、阿多妃は子宮を失った。

そして、子もまた、幼くしてなくなる。

先の毒おしろい事件と同様に、阿多妃の子もそれによって亡くなられたのではないかといわれていたが。

「風明さまは責任を感じているのではないのですか？当時、出産後芳しくない阿多妃にかわってお世話していたのは貴方のはずです」

「なにもかも知っているのね。阿多さまを助けることもできなかった、やぶの娘なのに」

「そうですね」

仕方ないという言葉で、医療は片付けるものではない。おやじどのの言葉だ。

やぶとののしられても甘んじて受ける、そんなひとなのだ。

「そのやぶは、鉛白いりのおしろいを使うのを禁じていたはずですよね。聡明な貴方がそれによって、赤子を死なせることはない」

猫猫は文箱の小瓶をあける。とろりとしたはちみつがきらりと輝く。一緒にある赤い花を猫猫は口にくわえた。

甘い蜜の味がする。花をつまみ、指でくるくると回す。

「花の中には、毒があるものも多い。附子（とりかぶと）や蓮華躑躅（れんげつつじ）のように。その蜜にも毒性がある」

「知っているわ」

「でしょうね」

実家が養蜂（ようほう）を営むのなら、その知識があってもおかしくない。

大人が中毒症状をおこす毒を赤子に与えるわけがない。

「でも、赤子にのみ効く毒が、ただのはちみつに混ざっていることは知らなかった」

憶測ではなく、確信。

まれではあるが、そのような毒がある。抵抗力の低い赤子にのみきく毒が。

「自分が毒見をしても大丈夫だと、滋養にいいと与えていた薬がまったく逆効果だったとは思わなかった」

そして、阿多妃の子は息絶える。

死因は謎として。

当時、医官だったおやじどのこと羅門（ルオメン）は、出産時の処置も合わせ、度重なる失態により後宮を追放される。肉刑として、片膝の骨を抜かれて。

「知られたくなかったんですね。阿多妃には」

自分が主（あるじ）の唯一の子を殺した原因だと。

「だから、里樹妃（リーシュ）を消そうと考えた」

里樹妃は先帝時代、年上の嫁である阿多妃になついてた。

阿多妃も、里樹妃のことをかわいがっていたという。

親元から離れた幼い娘と、子を持つことのできない女性。一種の共依存が生まれていた。

しかし、ある日突然、里樹妃は阿多妃に拒絶される。何度会いに来ても、風明に追い出されるからだ。

そのまま、先帝は崩御し、里樹妃は出家する。

「里樹妃は貴方に、はちみつには毒があることを教えたのでしょうね」

もし里樹妃が通い続ければ、そのことを話すかもしれない。
聡い阿多妃はその言葉で、なにかに気付くかもしれない。
それだけは避けたかった。

出家し、二度とあうことのないと思われた娘は、再び後宮にあらわれる。

同じ上級妃として。
阿多妃を追いやる立場として。

なのに図々しくもあの小娘は、母親を求めるように阿多妃に会いに来ようとする。
空気の読めない、世間知らずの小娘は。

だから、消そうと思った。

おだやかで面倒見のよい侍女頭は、そこにはなく、冷たい視線を送る女がそこにいた。

「ほしいものはなに？」
「そんなものはいりません」

首の後ろにぴりぴりとしたものを感じた。
後ろの棚には、先ほど麺麭（パン）を切った包丁（ナイフ）がある。
風明が手を伸ばせばすぐ届く距離にある。

「なんでもいいのよ」
「そんなの意味がないことを風明さまはご自分でわかっているでしょう？」

ここ数日、書を調べていることは壬氏（ジンシ）に報告されているだろう。
後宮を司るあの宦官に、猫猫は隠し事ができないだろう。芙蓉（ふよう）姫のときのごとくごまかせるとは思えない。
ごまかすべきではない。

猫猫の話を聞けば、壬氏は風明をつかまえる。
そして、極刑は逃れられない。
十六年前の真実も明らかになる。

だからとて、猫猫がここで消えても同じことだ。
遅かれ早かれ、ばれることである。

賢い侍女頭にそれがわからないわけがなかった。

猫猫にできるのは、ひとつだけ。

減刑を望むことでも、阿多妃の処遇に言することでもない。

二つあった動機をひとつにすることだけ。
阿多妃にその動機を隠し続けることだけだった。

「結果は変わりません。それでよろしければ」

提案を受けてください、と。

（疲れた）

猫猫は翡翠宮（ひすいきゅう）の自室に戻ると、固い寝台に倒れこんだ。

衣が汗でべとべとしている。緊張したときの発汗は、べたべたし匂いが強いのでかなりくさい。湯あみをしたくなった。

せめて着替えようと、上着を脱ぐと胸から腹にかけて、布が巻きつけられている。油紙を幾重にも重ね、それを固定していた。

「必要なくてよかった」

（刺されたら痛いからな）

猫猫は油紙を剥いで、新しい衣に袖を通した。

○●○

「というわけで、風明が自首してきたのだが」

「それはよかったですね」

とくに感慨もなく、無愛想な侍女は言ってくれる。

壬氏は卓（テーブル）に肘をつく。高順（ガオシュン）がなにか言いたげにこちらを向くが無視

する。行儀が悪いといいたいのだろう。

「なにか知らないか？」

「なんのことでしょう」

「やたら、高順に書物をかき集めさせていたみたいだが」

「ええ。無駄になってしまいました」

小馬鹿にしているのかと思うくらい淡々と言ってのける。

あいかわらず、汚泥でも見るような目を向けている。失礼を通り越して、いっそすがすがしい。

「動機はお前の言った通り、四夫人の座を保つためだったそうだ」

「そうですか」

まったく興味なさそうにこちらを見る。

「残念だが、阿多妃は上級妃をおりることは決定している。後宮を出、南の離宮に今後住まうことになった」

「それは、今回の件が原因でしょうか？」

猫猫が聞き返してきた。

猫がようやく小判に興味をしめしたらしい。

「いや、元々決まっていた。皇帝の判断だ」

実家に帰さず、離宮で囲うのは長年の愛着からだろうか。

珍しく、猫猫が興味あるらしく聞いてきたので、つい調子にのってしまいたくなる。

立ち上がり一歩近づくと、なんだか身構えた様子で半歩下がる。

言わんこっちゃないと、高順に呆れた顔をされた。

先日のささいな悪戯（いたずら）をまだ根に持っているのか。

あまり身構えられると壬氏としても困る。また、椅子に腰をおとす。

小柄な女官は頭を下げ、退室しようとしたがふと足を止める。

赤い喇叭（らっぱ）型の花の枝が飾られていた。

「さっき、紅娘（ホンニャン）が飾っていた」

「ええ。狂い咲きですね」

猫猫は、花を取ると、軸を取り口に含んだ。

壬氏は首を傾げる。ゆっくりと近づき、猫猫の真似をする。

「甘いな」

「毒ですけどね」

噴出して口をおさえると、高順が水差しを持ってきた。

「死ぬことないので大丈夫ですよ」

唇を舐めるおかしな娘は、ほんのり甘い笑みを浮かべていた。

## 33　阿多妃

猫猫（マオマオ）が夜中眠れず、翡翠宮（ひすいきゅう）を抜け出したのは本当に偶然のことだった。

明日、淑妃は後宮を去る。

なんとなく、外にでてぶらぶらと歩いていた。凍えるほどではないものの、寒さはとうに冬のもので綿入れを二枚重ねてでかけた。

あいもかわらず後宮内は、なかなか不健康な愛があふれているようで、間違って茂みや物陰をのぞかぬよう気をつけねばならなかった。

ふと、空の半月を見ると、芙蓉（ふよう）姫のことを思いだし、ついでだからと外壁に上ることにした。どうせなら、月見酒と決め込みたかったが、翡翠宮にはなかったのであきらめた。蝮酒（まむしざけ）が久しぶりに飲みたくなった。

外壁の隅の煉瓦の飛び出た部分に足をかけ、うまくよじ登っていく。裳（スカート）に気を付けないと、引っかけてしまうかもしれない。

なんとかと煙はというが、やはり高いところは気持ちの良いもので月と小さな星明りが都を照らしていた。向こうに見える輝く明かりは花街のものだろう。夜の街というにふさわしく、花と蜜蜂たちの語らいが始まっているに違いない。

なにをするわけでなく、塀のふちに座り、足をぶらぶらさせて空を見ることにした。

「おや、先客かい？」

高くもなく、低くもない声が聞こえる。
振り返ると袴服(ずぼん)をはいた凛々しい青年が立っていた。
いや、青年のように思えるが、それは阿多妃(アードゥオ)だった。髪をひと結びに背中に流し、肩から大きな瓢箪(ひょうたん)を下げていた。

「いえ、空きますので」
「いいや、一杯付き合わないか」

さかづきを見せつけられ、猫猫は断る理由がみつからなかった。
普段なら玉葉妃(ギョクヨウ)に遠慮するところだが、後宮最後の晩酌に付き合わないほど野暮ではない。

さかづきを両手に掲げ、濁り酒をいただく。
甘味が強く酒精の少ない味がした。

なにを喋るわけでもなく、ちびちびと酒を舐めた。阿多妃も豪快に瓢箪にそのまま口をつけている。

「男のようであろう？」
「そのように振舞っているように見えます」
「はは、正直者だな」

阿多妃は片膝をたて、顎を乗せる。その整った鼻梁(びりょう)と長いまつげを縁取った眼にどこかしら見覚えがあった。誰かに似ていると思ったが、頭が曇っていた。

「息子がこの手からいなくなってから、ずっと私は皇帝の友人だったんだよ。いや、友人に戻ったのかな」

妃として振舞わず、友人としてそばにいた。
乳飲み子のときから一緒にいた幼友達として。

妃として選ばれるとは思われなかった。
ただ、最初の相手として指南役に選ばれただけのはずだった。

お情けで十数年も飾りの妃をやっていたと。
早く受け渡したかったのに。
なぜすがりついていたのだろうと。

阿多妃の独白は続く。
そこにいるのが、猫猫であろうとなかろうと誰もいなかろうと続いていただろう。

明日にはいなくなる妃。
どんな噂が後宮内でたとうとも最早関係ない話だ。

猫猫はただ黙ってそれを聞いていた。

阿多妃の言葉が止まると、妃は立ち上がり瓢箪を逆さにすると中身を塀の外、堀へとこぼしていった。

餞別のように流す酒を見て、先日の自殺した下女のことを思い出した。

「水の中は寒かっただろうな」
「そうですね」
「苦しかっただろうな」
「そうですね」
「莫迦だよな」

「……そうかもしれません」
「みんな、莫迦だ」
「そうかもしれません」

なんとなくわかった。
やはりあの下女は自殺だったのだと。

そして、阿多妃はそれを知っていたのだろう。

みんなというのは、それに風明（フォンミン）も含まれているのだろう。

阿多妃の意思にかかわらず、彼女のために命をかけるものたちがいる。

（本当にもったいない）

ひとの上に立つ素質と資格を持ち合わせているのに。
妃としてではなく、違う形で皇帝のそばにいれば、政（まつりごと）はよりうまくいったのではないだろうか。

そんなくだらないことを考えながら、猫猫は白い月を眺めた。

正門には多くの見物人が集まっていた。

後宮にもっとも長くいた元妃（もときさき）は、昨夜とは違い、やはりあまり似合わない大袖と裳（スカート）をはいていた。

周りの女官たちのなかには手布（ハンカチ）を噛むものもいる。
凛々しき青年のような妃は、若い女官にとって一種の崇拝対象だったに違いない。

壬氏（ジンシ）が阿多妃の前に立ち、なにかを受け取っている。淑妃たる証（あかし）を示す冠だった。これは、しばらくもたたず、違う女のもとへ向かうことが決まっていた。

（服装を入れ替えたらよいのに）

天女のような相貌と凛々しき青年のような相貌。まったく違うはずのそのふたつが妙に似通っている気がした。
昨晩、阿多妃が誰かに似ていると思ったらそれは壬氏のことだったようだ。

もし阿多妃が壬氏の立場であれば、どうなっただろう。
まったくくだらない考えである。

阿多妃の立ち振る舞いは、けして後宮を追い出される哀れな女というものではなかった。
胸を張り、仕事を成し遂げたと、そのような達成感さえ見える威風堂々たる姿だった。

ふと、どうしようもない憶測が頭に浮かんでしまった。

なぜ、あんなに堂々としていられるのかと。
妃としてのつとめを果たさずして。

『息子がこの手からいなくなってから』

昨日の阿多妃の言葉がよみがえる。

（いなくなってから？死んでから、ではなく？）

とらえかたによっては、まだ生きているととることができる。

阿多妃が子を産めなくなった理由は、皇太后の出産と重なったことだった。皇弟と妃の子は叔父甥の関係になる、しかもほぼ同時に生まれたとしたら双子のように似ていたのではなかろうか。

（もし取り換えられたとしたら？）

出産の際に、阿多妃は身に染みてわかったことだろう。ふたりの赤子、どちらが今後大切に育てられていくのかを。

庇護がより大きいとしたら、それは乳母の娘の阿多妃のもとでなく、皇太后のもとであろうと。

産後の肥立ちが悪い阿多妃に、なにが正しいのか判断などできなかったのかもしれない。

しかし、入れ替わったことにより、己の息子が助かったのであれば、それは阿多妃の望みであろう。

後日、それがばれたのであれば。

本物の皇弟が死んだあとであれば。

おやじどのが追放だけでなく、肉刑まで受けたことにも納得がいく。

入れ替わりに気付かなかったのだから。

皇弟が狭い立場にあることも。

潔い阿多妃が後宮にとどまり続けた理由も。

（実にくだらない）

猫猫は頭（かぶり）を振った。

ばかばかしいくらいの妄想である。翡翠宮（ひすいきゅう）の三人娘さえここまで飛躍して考えないだろう。

（これ以上見ても仕方ないな）

猫猫は翡翠宮に戻ろうとすると、前方から慌ただしく近づいてくるものがいた。

幼い愛らしい顔立ちをした娘、里樹（リーシュ）妃である。

猫猫に気付いた様子もなく、正門へと走っていく。

後ろには、あの毒見の女が息を切らしながらついていた。

その後ろには走る様子もなく、面倒くさそうにしている残りの侍女たちがいた。

（あいかわらずですな。一名をのぞき）

猫猫が何かしてやれるわけでもない。身内のことなど、自分で始末できなければこの女の園で生きていけるわけないのだ。

ただ、少なくとも今はひとりでない。

それだけでもましなはずだ。

里樹妃は、阿多妃の前に出ると、からくりのような動きで右手と右足を同時に出した。裾を踏んだらしく、顔面から地面に転んだ。

周りから笑いをこらえる声に泣きだしそうになる里樹妃に、阿多妃は手ぬぐいで顔を拭いてあげていた。

青年のような凛々しい妃の顔が、母親の顔に見えた。

# 34　解雇

「どういたしましょうか？」

寡黙な従者は主に書類を渡す。

どうにもこうにも頭を抱えたくなる案件だ。

「先日の風明（フォンミン）の事件より、彼女の実家及びその関係者の名簿なのですが」

風明はそのまま処刑、一族郎党皆殺しは行われなかったものの、親族は皆、財産をすべて奪われ、重さの違いはあるもののすべて肉刑に処せられている。

主である阿多妃にはなにも沙汰（さた）がなかったのは幸いである。

関係者の中には、実家の商いの取引先も含まれていた。ただの養蜂農家だとおもっていたが、なかなか手広くやっていたようである。

「後宮内に八十人ほどその子女がいます」

「なんで、二千人中八十か。なかなかの的中率だな」

「そうですね」

高順（ガオシュン）は眉間にしわを寄せる主にたずねる。

「隠ぺいしますか？」

「できるか？」

「お望みであれば」

お望みであれば。

高順は壬氏（ジンシ）の言葉通りに従うだろう。
それが正しいのかは関係なく、壬氏のいうままに。

深くため息をつく。

関係者の中に見慣れた名前が記述されてあった。
かどわかされて、身売りされた先は、くだんの関係者だったらしい。

「さてどうすべきか」

簡単に決めてしまえばよいのに。
自分の選んだ行為によって、娘がどんな顔をするのか、とても恐ろしかった。

○●○

「大量解雇？」
「そだよ」

おやつに干し柿を食べながら小蘭（シャオラン）はいった。干し柿は、猫猫（マオマオ）が果樹園から失敬し、こっそり軒下につるして作っていたものだ。

「なーんか、一族郎党皆殺しとかそんな感じで、取引のあった商家とかの娘はやめなくちゃなんないんだって」

（それは、なんだか嫌な予感がする）

猫猫の予感はよく当たる。
書類上の猫猫の実家は、交易をおこなっている商家だった。

（いま、解雇とかかなり困るんだが）

それなりに今の生活は気に入っている。
そりゃ、花街に戻れるのならうれしいことに違いないが、戻ったところで銭の算段しているやり手婆につかまるのがおちだ。

李白ののち、いまだ上客を送り込んでいない。
それが問題である。

（確実に売りとばされる）

猫猫は小蘭と別れると、普段会おうとか思わないその人物を探すことにした。

「珍しいな。息が荒いぞ」

後宮の正門で、麗しき宦官は軽く言ってくれる。
猫猫は、翡翠宮（ひすいきゅう）のほか四夫人の屋敷をすべて周り終えた後だった。

「……っ」
「落ち着け。顔が真っ赤だぞ」

壬氏は天女の顔に、いささか焦りを見せている。

「おっ、お話が、あ、あります」

猫猫は切れ切れに言葉をつむぐ。

壬氏は目を細めた。なぜだか、憂いを含んだ顔だった。

「わかった。中で話そう」

通されたのは宮官長室で、いつもどおり外で待ちぼうけを食らう長には悪いと思う。一礼して中に入る。

「どうせ、今度の大量解雇について聞きたいのだろう」

「はい。私はどうなるのでしょうか」

返事の代わりに壬氏は書類を見せる。上質の紙に書かれた中に、猫猫の名もあった。

「つまり解雇というわけですね」

（どうしようか）

解雇といわれてやめてくださいと言える立場ではない。自分はたかが女官だということは重々承知している。

無表情のまま、媚びる目をしないようにこらえた。結果、いつものくせで毛虫でも眺めているような顔になった。

「どうしたい？」

うかがい聞くその声に、いつもの甘さはない。むしろ、逆に甘えるような少し幼い声だった。声色と違い、顔だけは真剣に固まった顔をしていた。

「私は、ただの女官です。言われるままに、下働きでも、まかないでも、毒見役も命じられればやります」

（だから、解雇（クビ）にしないでくれ）

精いっぱい雇ってくれといったつもりだった。

青年の表情は、固まったままで、ふと視線をそらすと小さくため息をついた。

「わかった。退職金ははずもう」

青年の声は冷たく、うつむいて表情は読み取れなかった。

交渉は失敗した。

○●○

いじけた主（あるじ）を見るのは、今日で何日連続だろうか。

仕事には今のところ支障はないが、執務室に戻ると部屋の隅に座り込み、陰気な空気を醸し出すのは勘弁願いたい。

胞子でも飛ばさん勢いである。

麗しき天女の笑みとはちみつの声を持つ青年はそこにはいない。

猫猫は解雇通告の翌週に出て行った。愛想はないが、礼儀正しく、世話になったところに一軒一軒回って行ったらしい。

玉葉妃（ギョクヨウ）は渋っていたが、壬氏が決めたことだと聞くととりあえず引き下がった。「後悔しても知らないわよ」とご丁寧に捨て台詞を残して。

「やっぱり引き止めればよかったのでは」

「なにもいうな」

高順（ガオシュン）は腕組みをし、眉間のしわを深くする。

お気に入りの玩具（おもちゃ）をなくしたときは、どんなものだったか。より新しい珍しい玩具をあたえるのに、どのくらい苦労しただろうか。

玩具といっしょにしてはいけないのかもしれない。

壬氏は娘を道具として扱いたくなくて、引き止めるのをやめたのだった。そこで、新しい毛色の違った娘をあてがえたところで何になろう。

まったくもって厄介である。

「代替がだめなら、本物を用意するしかないか」

壬氏に聞こえない声でつぶやくと、ふとある人物を思い出した。

娘の実家をよく知る武官である。

「手間のかかる」

苦労人、高順は首の後ろをかいた。

# 終　宦官と妓女

「仕事だよ、いってきな」

やり手婆にせっつかれ、乗せられたのは随分立派な馬車である。今宵（こよい）の仕事はとある貴人の宴（うたげ）らしい。

都の北の大きな屋敷に連れられて、ため息をつく猫猫（マオマオ）である。小姐たちと、他数名。皆、麗しい衣を着、艶やかな化粧を施している。自分もそれと揃いの姿をしていると考えると、なんだか妙に居心地悪い。

長い回廊を通り、らせんの階段をのぼり、広い部屋に通される。

天井から灯篭が下がり、赤い房飾りが揺れている。赤い毛氈（もうせん）の敷き詰められた床に、獣の毛皮が幾重（いくえ）に重ねられ、そこに今宵の客が座していた。五人ほど横一列に並んでいる、思ったよりも年若い。

ゆらめく炎に照らされる若人たちをみて、白鈴（パイリン）小姐が舌舐めずりをする。横の女華（ジョカ）小姐が脇腹を小突く。

（もっと早く紹介してくれよ）

宮廷につかえる高官だという。

紹介は李白（リハク）らしい。

李白の縁とあれば、猫猫（マオマオ）の借金も少しは減るはずである。

まあ、退職金は思ったよりはずんでもらえたので、身売りするほどでもなく、こうやって短期就労（アルバイト）ですんでいるのでよかったが。

（婆、舌うちしやがって）

どうにもやり手婆は、猫猫を妓女にしたいらしい。

ここ数年、その動きが顕著である。

薬屋の真似事などやめろと何度もいわれたことだが、それは無理である。自分の興味を薬学から、歌や踊りに向けることなど皆無である。

（それにしても、大した金持ちだわ）

妓女を屋敷に呼ぶことは妓楼で宴をするよりも費用がかかる。そのうえ、呼んだのは一晩の酌で一年の銀が消える売れっ子妓女たちだ。緑青館（ろくしょうかん）の三姫こと梅梅（メイメイ）、白鈴（パイリン）、女華（ジョカ）をまとめて呼びつけるとは。

猫猫は三姫を引き立てるため、連れてこられた数人の一人だ。

しつけはあらかた受けているが、詩歌も吟ぜず、二胡も弾けない、舞踏などもってのほか。

せめて客の杯が空かぬよう、目を配らせるしかできそうにない。

表情筋に笑みを固定させると、空いた器にゆっくり酒をそそいでいく。

皆、小姐たちの詩歌や踊りに夢中であり、こっちをみないので楽だった。

（おや？つまらないのか？）

皆、笑いを浮かべ、酒に酔いしれ、演舞を楽しんでいるというのに、
ひとりだけ下にうつむく者がいる。

上等の絹の衣を着た若者は、片膝をたてて手酌で酒をあおっていた。
そこだけ、空気が灰色に濁っている。

（仕事がなくなるじゃないか）

妙に生真面目なところのある猫猫は、たっぷり入った酒瓶を持ち、
陰気な男の横に座る。

つやのある前髪が、顔の上半分を覆っていた。

「ひとりにしてくれ」

（？）

はて、聞いたことがあるような。
考えると同時に手が動いていた。
無礼とか、失礼だとか頭から抜けていた。

うつむく男の額に触れぬよう、そっと前髪を上げた。

麗しいおもてがあらわになる。
いじけた顔が、一瞬で驚きに変わる。

「壬氏（ジンシ）さま？」

きらきらしい笑顔もなく、はちみつのような甘さのない声だったが、
見慣れた宦官に違いなかった。

壬氏は瞬きを数回する。なんだかじっと見られて、とても落ち着かない。

「おまえ、誰だ？」

「よく言われます」

「化粧で変わるって言われないか？」

「よく言われます」

なんだか以前も似たような会話があった気がする。

つまんだ前髪をもとに戻す。

すると、壬氏の手が伸びてきて、猫猫の手をつかもうとする。

「なんで逃げる」

不貞腐れた顔でこちらを見る。

「妓女には触れないでください」

規則なので仕方ない。追加料金をいただくことになる。

「そもそも、なんでそんな恰好をしてるんだ？」

「短期就労中です」

「妓楼でか？……もしかして、おまえ」

壬氏が何を言いたいのかわかり、猫猫は半眼でにらむ。

どうにもひとの貞操観念を疑う性格らしい。

「別に、個人で客をとったりしてませんよ。まだ」
「まだ……」
「……」

言い返せない。残りの借金返済前に、婆が無理やり客を連れてくる可能性は無きにしもあらず。
おやじどのと小姐たちの抑制で、いまのところは事なきをえている。

「俺が買ってやろうか？」
「はあ？」

ご冗談を、と言いかけてふと頭になにかがよぎる。

「いいかもしれませんね」
「！？」

壬氏は驚愕を顔にのせる。

なんだか、今日はきらきらしていないので表情が豊かである。天女の笑みは麗しいが、人間とは思えない表情なのだ。
たまに、魂が二つあり、ひとつの魄におさまっているのではないかとさえおもう。

「もう一度、後宮勤めも悪くないです」

壬氏が肩をうなだれる。
どうしたのだろう。

「おまえ、あそこが嫌でやめたんじゃなかったのか？」
「そんなこと、いついいました？」

借金返済のため、続けさせてもらえないかと頼みにいったのに、解雇したのはそちらのほうである。

面倒事は多いものの、玉葉妃（ギョクヨウ）の侍女はかなりの好条件だ。毒見役など希少（レア）な職、なろうと思ってなれるわけじゃない。

「気に入らないとすれば、毒実験ができないことくらいで」

「それは、さすがにやめろ」

壬氏は、立てた膝に顎をのせる。苦笑が浮かんでいる。

「そうだよな、おまえ、そういうやつだよな」

「なんですか。それは」

「言葉が足りないっていわれないか？」

「……よく言われます」

苦笑はだんだんあどけない笑みにかわる。

今度は猫猫が不機嫌にうつむく。そこに、壬氏の手がのびる。

「だからなんで逃げる？」

「規則ですから」

言ったところで、壬氏は伸ばした手を戻そうとしない。

じっとりと猫猫をにらんでいる。

「少しくらいならいいだろ？」

「だめです」

「減るもんじゃないだろ」

「気力が減ります」

「片手だけ。指先だけならいいだろ」
「……」
しつこい、そういえばこの男、粘着質である。
しかたないと目を瞑り、深く息を吐いた。
「指先だけですよ」
唇になにかがおさえつけられる。
まぶたをあけると、壬氏の長い指先に赤い紅がついていた。
猫猫が呆気にとられているうちに、壬氏は指先を自分のもとに戻す。
そして、あろうことか、己の唇にそっとのせたのだ。
（こいつ）
二本の指をはなすと、ほんのり紅が形良い唇にうつっている。
壬氏は目を細め、さらにあどけない笑みを浮かべる。頬にも紅がうつったように、かすかに桜色をしていた。
猫猫はふるふると肩を揺らしたが、あまりに幼い笑顔を壬氏が向けるのでなにもいえず、うつむいて目をそらした。
（うつるじゃないか）
口をぎざぎざに結んだ猫猫の頬は、桜色になっている。頬紅はつけていないはずなのに。
くすくすと笑い声が聞こえると思ったら、周りでみんながこちらを

見ていた。
小姐たちがにやにやとこちらを見ている。
あとが怖い。
すこぶる居心地が悪い。

いつのまにやら現れていた高順（ガオシュン）はやれやれと腕組みをしていた。
一仕事終わりましたといわんばかりだ。

もうなにがなんやら困ったもので、その後のことはよく覚えていない。
ただ、小姐たちの追及が、とてもしつこかったのは覚えている。

○●○

数日後、都の花街に麗しい貴人が現れる。

やり手婆も目のくらむ金子（きんす）、それとなぜか虫から生えた奇妙な草を持ったその男は、一人の娘を所望した。

# 終　宦官と妓女（後書き）

とりあえず、一区切りです。
肝心なことがはっきりしてないという話もあると思いますが、そういう仕様なのであしからずです。

続きはただフラグをたててはぶった切っていくだけの話を書いていく予定なので、そういうのがお好みのかたは今後もおつきあいおねがいします。

タグに推理があるとなると、ものすごくきついことがわかりましたので、今後はファンタジーにかえて書いていきます。
気が向いたらよろしくお願いします。

# 登場人物紹介

・猫猫（マオマオ）

花街の薬師で十七歳の娘。
かどわかされて売りとばされて後宮の下女となる。
痩せぎすで小柄、整っているが特徴のない顔をしており、普段はそばかすを化粧でつくっている。
好奇心旺盛で薬と毒に異常な執着を見せるが、人間にはあまり関心がない。
左腕に実験で作った自傷行為のあとと、顔には刺青のあとがある。

・壬氏（ジンシ）

後宮を統括する青年。
天女の微笑みとはちみつのような甘い声を持つ人間離れした美貌の青年。
二十そこそこに見えるが、実際は十七、八歳。
自分の容貌も含めて、使えるものは道具とみなす。
粘着質。

・玉葉妃（ギョクヨウ）

皇帝の寵妃。位は貴妃。十九歳。
赤い髪と翡翠の目をもつ胡姫。
娘に鈴麗（リンリー）公主を持つ。
後宮の翡翠宮に住む。
笑い上戸。

・高順（ガオシュン）

壬氏の従者。
武官と思わせる精悍な顔をした壮年。

苦労人でまめ。

・紅娘（ホンニャン）
玉葉妃の侍女頭。三十路。
侍女の鏡であり、同時に苦労人。

・桜花（インファ）
翡翠宮、侍女三人娘のひとり。
活発。

・貴園（グイエン）
翡翠宮、侍女三人娘のひとり。
おっとり。

・愛藍（アイラン）
翡翠宮、侍女三人娘のひとり。
長身。

・鈴麗公主（リンリー）
皇帝と玉葉妃の娘。赤子。

・皇帝
美髭の偉丈夫。
猫猫曰く好色親父。

・小蘭（シャオラン）
下級女官。
甘党のうわさ好き。

・梨花妃（リファ）

皇帝の妃、位は賢妃。
東宮である息子をなくし、病に倒れていた。
見事な胸部の持ち主。
住まいは水晶宮。

・里樹妃（リーシュ）
皇帝の妃、位は徳妃。十四歳。
元は先帝の妃であり、出家して再び後宮に入った。
その特異な経歴からいじめを受けているようである。
魚介アレルギー持ち。

・やぶ医者
どじょうひげの宦官。
性格はいいが仕事はできないおっさん。
猫猫の茶飲み仲間。

・李白（リハク）
若い武官。出世株。
白鈴（パイリン）に骨抜きにされる。
基本的におひとよし。

・白鈴（パイリン）
緑青館（ろくしょうかん）三姫のひとり、猫猫の姉貴分。
舞踏を得意とする最高級妓女。
筋肉フェチ。

・やり手婆
金にがめつい緑青館の仕切り。
昔は売れっ子妓女だったらしい。

・おやじどの
老婆のような男。
猫猫の薬の先生。
苦労人。
本名は羅門（ルオメン）、元後宮医官の宦官で、追放され肉刑を受けているため、
片膝の骨がない。

# 1　盛

（よーし、次は）

猫猫は雑巾と桶を持ち、窓辺に座る。
飾り窓は近くで見ると埃(ほこり)が溜まっている。かたく絞った雑巾で丁寧に拭いていく。手がかじかむがたいしたことはない。
なんだかんだで猫猫(マオマオ)は、宮廷に戻ってきた。しかし、後宮ではない。

（なーんで、あいつの部屋付なんだ）

婆が金子(きんす)に、猫猫は冬虫夏草に目がくらんだ。
その結果がこれである。
正直いえば、自業自得なのだが。

宮廷の西側に壬氏(ジンシ)の自室がある。部屋というより、棟(むね)というべきか。
基本、寝泊りはここでしているらしい。

まあ、正直言おう。

（無駄に広い）

ある程度、要職だと思っていたが、広さだけなら翡翠宮(ひすいきゅう)とかわらない。無駄に部屋が多く、湯殿までついている。食事も作れるよう台所もある。寝台(ベッド)はご丁寧に天蓋(てんがい)付だった。窓の外を眺めると、贅(ぜい)をこらした枯山水が雪化粧に隠れている。

（金持ちはよいねえ）

そういえば、緑青館の妓女を呼び出した宴も、平民一生分の銀がなくなる算段である。随分と偉そうなわけだ。

（もっと給料交渉しとけばよかった）

とりあえず二年間、猫猫は女官として働くことになった。

表向きは壬氏の部屋付という形になるが、無論、性に合わない。仕事がないからだ。

掃除や洗濯は専用の下女がやる。

妃たちの侍女と同じく、食事を運んだり、着替えを手伝ったりするわけだが、食事はいつのまに準備してあるし、着替えも壬氏一人でできる。たまに、こちらをちらちら見るが、言われるまでやろうとは思わない。

（一体、何のために雇ったんだ？）

だから悪態をつきながらも、無駄に広い部屋を掃除する。下女の仕事をとるようだが、窓の桟を見る限りあまり行き届いていないようだから問題ないだろう。

貰った報酬が報酬だけに、借りを作るような真似はしたくなかった。妙なところで生真面目である。

（あー、それにしても何に使おう）

猫猫の頭の中にあるのは、虫から生えた奇妙な草のことである。

眼がぼんやりしてきたところで、いかんいかんと頭を振る。今は仕事中である。しかし、だんだん顔がゆるんでくる。

あの気持ちの悪い干からびた虫からのびた枯葉色の茸。薬酒にしようか、それとも丸薬（サプリ）にしようか、考えただけで楽しくなってくる。

給料とは別に、現物報酬で年に二回、珍しい薬草をくれるというのだ。たとえ、相手があんな変態宦官でも、少しは尽くしてやろうと考えないでもない。

あまりにうれしいものだから、にやけた顔のまま部屋の主をむかえてしまった。

呆けた壬氏の顔をみて、猫猫はそっとうつむいた。

基本、壬氏のそばにはお目付け役の高順（ガオシュン）がいる。寡黙な宦官はよく猫猫に目で訴えかける苦労人である。

今日もまた、主の食事に付き従っている。食事は二人分、しかし高順の分はない。

「いつも思いますが、量が多すぎやしませんか？」

（毒見の量じゃない）

普通は、小皿一枚ずつのはずだ。量が多すぎる。

「そうか普通だと思うが」

猫猫の前に、壬氏とかわらぬ量の夕餉が準備されている。
こうして朝夕二回、毒見役を行うのも数少ない仕事の一つである。

同じ卓（テーブル）に相席するのは失礼だと思うが、量が多いだけに立ち食いをするもの問題である。高順も何も言わないので椅子に座る。

そのあいだ、高順が立ちっぱなしであるのを見かねて、椅子を用意したのだが、寡黙な従者は立ったままであった。

猫猫がひと匙ずつ口に運ぶのを見て麗しい宦官は微笑ましい目で見ている。まるで愛玩（ペット）動物に餌をやっているような顔だ。

（失敬な）

大変、居心地悪く目をそらしながら毒見を行う。
残念ながら、毒物は入っていない、ええ、毒物は。

皿を全部あけてから壬氏に食事をすすめるべきだが、菜（さい）が冷えるので途中で食事を始めてもらう。
さすがに、一緒に食べるのは憚（はばか）れるので、盆に皿を乗せ、部屋の外に出ようとするが毎度止められる。

「途中退室とはいい度胸じゃないか」
「いえ、同席はやはり恐れ多いと思いまして」

高順に目で「あきらめろ、しつこいから」と訴えられて、もう一度椅子に座る。

（食事自体はおいしいのに）

なんとも食欲のそそらない夕餉である。

夕餉のあとは、高順に部屋まで送ってもらう。

後宮のさらに何倍も広い宮中だ。女官の住む部屋まで時間がかかる。

「別にひとりで帰れます」

「命令ですので」

その言葉には逆らえない。

部屋付の女官なので、壬氏の棟に泊まり込むこともできるらしいが、断固拒否させてもらった。

（夜中、喘ぎ声でも聞こえたらたまらない）

あの変態はきっと毎夜、女官なり文官なり武官なり宦官なり連れ込んでいよう。間違っても、皇帝とかきたら恐ろしくてたまらない。

女官ならまだいいが、他のは少し抵抗がある。見慣れた妓楼（ぎろう）のむつみごとは、所詮は男女のそれである。違う世界は知らないほうが賢明だろう。

（今日もだれか連れ込むのか）

きっとそうに違いない。
ああ、いやだ、これだから変態は。
女官の寮の前で別れるとき、高順が首を傾げてたずねてきた。
「ここ最近、夜に体調変化はありませんか？」
「とくにありませんがなにか？」
「いえ、それならば問題ないです」
なぜかとぼとぼと帰っていく高順。
（どうしたんだろう）
そう思いつつも、部屋に入る。
寝台と机の置かれた簡素な部屋だ。机の上に細長い箱が置いてある。
中に不気味な薬草が入っていると思うだけで、猫猫は満面の笑みをおさえることができなかった。
しばらくして、隣から壁を蹴る音が聞こえたことから、なんだか無意識のうちにやらかしてしまったかもしれない。
「最近、寝不足のようですが大丈夫ですか？」
「ああ、気にすることはない」
天女の麗しい顔（かんばせ）に、うっすらくまができていた。

残念なその仕様も、見るものには憂いと勘違いされるかもしれない。

（寝不足ねえ）

実は、それには思い当る。

（あんだけ、毎晩強壮剤食べてたらね）

眠ろうにも眠れまい。

薬だからと黙っていたが、取り過ぎると毒になる。皇帝の夜食で慣れていた猫猫は、すっかりそのことを忘れていた。

それに、てっきり本人の指示で入っているものと思っていたが。

（誰かに盛られていたのか）

悪いことをしたと、朝餉の皿を片付けながらおもった。

# 1　盛（後書き）

蛇足はこんな感じの内容です。

## 2　授業

「一体、なにがおきているんでしょうか」
「わからんな」
問いかける高順（ガオ・シュン）に、そっけなく壬氏（ジンシ）は答える。

場所は、後宮内の講堂前。
妃たる勤めを果たすべく、現在、上級妃たちが学んでいる。

周りには、閉めだされた宦官やお付の女官たちが、壬氏と同じ表情（かお）をしている。
秘密にされると気になるもので、扉に耳をそばだてるものさえいる。

一体、なにが。

好奇心を掻き立てられるひとつの理由に、なぜか講師がそばかす顔の若い女官であることがあげられた。

十日前にさかのぼる。

「新しい淑妃が来たことで、妃教育をしたいそうなんだが」
「そうですか」

無表情な女官は、興味なさそうに答えると、せっせと床の拭き掃除

を続ける。下女の仕事を奪うかのように、親の仇かのように掃除をする。それが、壬氏の部屋付になってからの猫猫（マオマオ）の日課である。

他にしてもらいたいことはたくさんあるのに、それを避けるように違う仕事を見つけてくるので困ったものだ。

まあ、元々最低限のことでしか、女官を入れないようにしていたので、問題はないのだが。

「講師をしろとのことだ」
「へえ、誰ですか」
「おまえだ」

目が据わったまま、壬氏を見る。直属の女官になったところで、冷めた塵芥（ちりあくた）を見るような目はやめたりしない。一種のくせになりそうな目で、これを見るとなんだか悪戯（いたずら）を仕掛けたくなるので困ったものである。

「ご冗談を」
「なにが冗談だ」

勅命の書を見せる。
猫猫が目を細めてみるが、自分に都合の悪い文章を発見したらしい。

「おい、目をそらすな」
「なんのことでしょうか」
「今、しっかり見ただろ」
「気のせいではないですか」

壬氏は書を広げ、猫猫にとって都合の悪い部分を指さした。

「ここに、推薦人の名前が書いてあるだろ」
「……」
指をさした先には『賢妃　梨花（リファ）』と書かれてあった。
なにがなんだか、わからなかった。

観念した猫猫は、ため息をつきつつも、実家に文を送ったり、前準備をしっかりしていた。実家と言っても薬屋のほうではなく、親同然に世話になっている妓楼のほうだ。

数日後、届いた荷物とともに、必要経費を請求された。

どんな荷物が届いたのか、確認しようとしたら、けだものをみるような形相（ぎょうそう）でにらみつけられ、寮の自室に持ちかえられた。

一体、何だったのだろう。

そして、現在に至る。

講堂は三百人以上入る空間（スペース）なのに、猫猫は「門外不出です」と、四夫人とそれぞれの侍女頭をのぞき、全員締め出してしまった。

壬氏は立場上いても問題ないかと居座っていたが、猫猫に背中を押され追い出された。
ご丁寧に入口につっかえ棒がかけられる音がした。

気になっても耳を壁にそばだてるわけもいかず、たとえそうしても中の声は聞き取れないだろう。
猫猫は広い講堂の中心に妃たちを集め、内緒話でもするようだった。

妃教育とは、秘密が多いものだが、ここまで隠匿する必要はあるのだろうか。
以前、後宮医官が語った内容は、御子(おこ)ができやすい生活習慣についてだった。
そのまえは、皇太后じきじきに妃たる振る舞いを教えていた。

猫猫が教えられる内容とすれば、身体によい薬についてだろうか。
さすがに、証拠の残らない毒殺講座などやるわけがなかろう。
梨花妃(リファ)の推薦というのだから、身体によくない身近なものを教えているのかもしれない。

どちらにしろ、内緒にするほどでもないと思うのだが。

一時(にじかん)が過ぎたころ、入口からつっかえ棒が外れた音がした。

中に入ると、各々講義に対する感想が、表情に現れていた。

玉葉妃（ギョクヨウ）は、うきうきした顔で「まんねり離脱」と、はしゃいでいる。
侍女頭の紅娘（ホンニャン）は、いつものごとく疲れた顔で付き従っている。

梨花妃は、真っ赤な顔をしながらも、授業内容を反芻（はんすう）するように指を動かしている。なんだか満足した顔である。

里樹妃（リーシュ）は、講堂の隅で壁に額を打ち付けながら、「無理、ぜったい無理」と、青い顔でつぶやいていた。
傍には、最近侍女頭になったばかりの女官が心配そうに背中をさすっている。確か、元毒見役の女だった。

新しい淑妃こと楼蘭（ロウラン）妃は、目を見開き、顔を真っ赤にさせ、化け物でもみるかのような顔をしている。
視線の先には、一仕事終えたと椅子に座り湯冷ましを飲む猫猫がいた。
齢十八の知的で冷静な妃だと聞いていたが、見る限りその片鱗はなかった。

梨花妃と楼蘭妃の侍女頭たちは、楼蘭妃と同じく顔を真っ赤にさせ奇異の目を猫猫に向けている。

一体、どんな授業が行われたのだ。

各々、妃たちは教材として持ち込まれた例の荷を持っていた。あるものは、大事に抱え込み、あるものはおぞましげにさわっている。
どの荷にしても、風呂敷が丁寧にくるまれていて中をうかがうことはできない。

気になることこの上ない。

「なあ、どんな授業をやったんだ」

壬氏がたずねると、猫猫は遠い目をして、

「後日、皇帝に感想をうかがってください」

と、答えた。

全く意味がわからなかった。

# 3　粉

部屋付女官生活がひと月も続くと、大体主人の生活習慣がわかってくるものである。

卯(う)の刻に起床し、着替えと朝餉(あさげ)。辰の刻に仕事に出かけたと思ったら、一度、午(うま)の刻に帰り点心(おやつ)を食べる。帰りは遅く戌(いぬ)の刻のころ、夕餉をとり猫猫(マオマオ)は帰る。

そのあとは湯あみなり、なんなりしていることだろう。もっとゆっくりしていけと言われても、今宵(こよい)の相手と鉢合わせしたくないのでさっさと帰る。

まったくお盛んなことである。

正直、広すぎる棟(むね)の掃除はあらかた終えて暇になっていたところだ。昼間は手がすいて、たまにくる初老の女官と話し込むくらいしか時間を潰すことができない。

実家から調合道具も取り寄せたところなので、なにかしら薬を作りたくてたまらなかった。

むしろ、禁断症状に近い。

最近、指先が震えているのは手がかじかむだけが原因だろうか。

冬虫夏草を加工しようにも、一緒に調合する薬草が必要である。実家から取り寄せるにも限界がある。薬草と毒草は紙一重なので、宮廷に持ち込む時点ではじかれてしまうものが多い。

なので部屋を抜け出すことにした。

部屋付とはいっても、ずっと壬氏の棟に籠もっている必要はないはずだ。

主人(あるじ)が帰ってくる前に用事を済ませてくればいい。

問い詰められたら、切れた油の補充にいったとごまかしてしまおう。

と、いうわけで、猫猫は午前中に仕事をあらかた終わらせ、点心(おやつ)を終えた壬氏を見送ると、棟の外へと飛び出していった。

（おやじ、こちらにも植えときゃよかったのに）

後宮内では、おやじどのこと羅門(ルオメン)が移植した薬草がたくさんあった。のんびりとした苦労人であるが、けっこう好き勝手に後宮内の植生(しょくせい)をかえていたようである。

後宮の何倍の広さもあるのに、材料にできる薬草はあまりない。

見つけることができたのは、蒲公英(たんぽぽ)、蓬(よもぎ)といったどこにでもあるものくらいだ。あと曼珠沙華(まんじゅしゃげ)も見つけた。

冬場であるため見つけにくいこともあるが、それでも期待は薄かろう。

はてはてと歩いてるうちに、見覚えのある影を見つけた。

精悍な顔をした若い武官である。妓楼の常連の李白(リハク)だ。帯の色からみると、出世したようである。

傍に部下らしき男たちとなにやら話している。

（がんばってるんだなあ）

休みのたびに緑青館にきては、禿相手に茶を飲んでいるらしい。

もちろん、本命は白鈴小姐だが、彼女を呼ぶには平民の半年分の年収が必要である。

それでも、最高級妓女としてはかなり安いわけだが、その理由は軽いという一点にあげられる。希少価値がついてこその妓女である、つまみ食いが多ければそのぶん価値が下がるのだ。

哀れ天上の蜜の味を知った男は、高嶺の花の顔を帳の隙間からでも垣間見ようと通うのである。

出世したのも、花に近づこうとがんばっていることがうかがえる。

憐憫の目が届いたのか、李白は猫猫のほうに手を振って走ってきた。

まさに大型犬である。

「おう、今日は妃の付き添いかなんかか？」

「いえ。後宮勤めから、とある御仁の部屋付になりましたので」

「部屋付？誰だ、そんな物好きは」

大変失礼なことを言ってくれる李白だが、まあ、普通の反応であろう。

すき好んでしみだらけの顔をした枯木のような娘を部屋付にはすまい。

別にそばかす化粧を今更するつもりはなかったのだが、主人がいえ

ば従うしかない。面倒など慣れてしまったことであるし。

（一体、なにがやりたいんだ、あの男は）

「そういや、最近、高官がおまえんとこの妓女を身請けしたらしいな」

「そうですね」

（そう思われても、仕方なかろう）

雇用契約が決まり、宮廷に行く際、張り切った小姐たちに全身を磨き上げられ、とっておきの衣装を着せられ、髪を結いあげられ、化粧をふんだんに施（ほどこ）された。到底、新入り女官には見えなかったことだろう。

なぜか、おやじどのが子牛でも見送る目で見ていたのを覚えている。

宮廷内に妓女が入ることもおかしいが、さらに壬氏（ジンシ）が目立つので、いやに注目され居心地が悪かった。

（それにしても）

本人が目の前にいるのに、この男はまったく気づきもせず喋っている。さすが駄犬である。

「ところで、お取込み中のようでしたが、よろしいのですか？」

「ああ、ちょうど行き詰ってたんだ」

部下が近づいてくる。遠くから女官をみて嬉しそうにしていたが、猫猫の顔を確認すると明らかに落胆した顔をした。まったく、上司が上司なら部下も部下である。

話を察するに、昨晩、小火があったらしい。その原因を調べているということだ。
猫猫はなにかしら興味を覚え、小火騒ぎの倉庫に近づく。

（ふうん）

上手く隠しているつもりでも、おかしな点がいくつかある。

本当に小火ですんでいるなら、なぜ李白ほどの高官が出向いているのだろうか。
また、小火というわりに、建物の破片が散らばっている。むしろ、爆発というのではなかろうか。けが人もでているのではなかろうか。

（組織的暴力の疑いありとみているわけか）

概ね平和な時代であるが、皆が不満を持たぬわけではない。
異民族はたまに襲ってくるし、飢饉や干ばつもなきにしもあらず。
特に、先帝の時代ならば、毎年行われる女官狩りによって、農村部の嫁不足が深刻になったこともあった。今だ恨むものも少なくなかろう。

「おい、なにやってんだ」
「あっ、ちょっと気になりまして」

壊れた窓から中をみる。焼け焦げた荷が積まれていた。
床に芋が転がっていることから、食糧庫だとうかがえる。

「勝手にうろうろするな」

李白の言葉を無視するように、猫猫は腕を組む。頭の中で何かがつながった。

「話聞いているのか」

「聞こえてますよ」

聞こえているが、聞こうとしないだけである。

猫猫は近くの廃材置き場に向かう。

「これ、もらっていいですか？」

「ああ、別に問題ないだろ」

猫猫は木箱をみつけると、それに合う板を探し出した。

李白の部下に槌（つち）と鋸（のこ）と釘を探してきてもらった。なんだ、この女官と不満そうに見ていたが、上司も頭が上がらない様子を察し、用意してくれた。

ぶつくさ言っていた李白だが、猫猫がなにをやっているのか興味はあるようだ。

猫猫は真ん中に穴のあいた板を作り、それを空の木箱の蓋にして打ち付けた。

「妙に手馴れてるな」

「育ちが悪いものでして」

仕上げに焼けた倉庫のそばにある荷から、あるものを取り出すと木箱の中に入れた。

「すみません、火種ありますか」

部下の一人が火のくすぶる荒縄を持ってくる。

そのあいだに、猫猫は井戸から水を汲んで持ってきていた。

猫猫は部下に礼をいい頭を下げる。

そして、木箱の前に立った。

「李白さま。危ないので離れていてはくれませんか」

「なにが危ないんだ？嬢ちゃんがなにかやるんだろ。武官の俺が危ないものか」

随分、大きく胸を張るので、仕方ないとため息をつく。

「わかりました。危険なので重々気を付けてください。すぐ逃げてくださいね」

いぶかしむ李白を後目（しりめ）に、猫猫は近くにいた部下の袖をひっぱりこちらへ来いと誘導する。倉庫の裏から見ているように伝える。

戻ってきたところで、先ほどの木箱に火種を投げ入れると、頭を隠しながら走って行った。

箱から炎が噴き出し、激しく燃え上がった。

驚いた李白は、逃げ遅れたらしい。

髪に火が付き慌てふためく李白に、猫猫は桶の水をぶっかける。

「逃げてくださいって言ったのに」

「……」

言い返せず、黙り込む李白。
鼻水を垂らす李白に、急いで毛皮をかける部下。
「倉庫番のかたに、倉庫で煙管(たばこ)はおやめくださいとお伝え願えますか」
「ああ。わかった」
放心した顔で李白が答える。
「なにがどうなってるんだ?」
「燃えやすい粉が空中に舞うと、それに火がつくことがあるんです」
それが爆発するのだと。
「んなことよく知ってるな」
「ええ、よくやりましたので」
狭い花街のあばら家で。小麦のほかに宇金(うこん)や鉄粉もよく燃える。
わけがわからないと、李白も部下も顔を見合わせる。
「風邪をひかぬよう気を付けてください。ひいたらひいたで花街の羅門という男の薬はよく効きますので」
営業活動も忘れない。白鈴に会いに行くついでに買ってくれるかもしれない。
(思ったより、時間を食ったな)

会釈（えしゃく）をすますと、主人の自室に急ぐのだった。

# 4　変人

部屋に戻ると、いつもより帰りの早い主人(あるじ)が慌てた様子で探し物をしていた。
寝台の下をのぞいたり、帳(とばり)の裏を確認している。

「なにかあったんですか？」

疲れ顔の従者、高順(ガオシュン)にたずねる。

「ええ、子猫(こねこ)が見つからなくて」
「猫なんて飼ってましたっけ？」
「いや、今見つかりました。小猫(シャオマオ)」

壬氏(ジンシ)は猫猫(マオマオ)に気付くと、こちらにものすごい勢いで近づいてきた。
走りはしないが、足の動きが半端でない。
なんとなく臆(おく)してしまい、さっと高順の後ろにまわった。

「なぜ、隠れる」
「天上人(てんじょうびと)にいきなり近づかれては、目がくらんでしまいますゆえ」

半分嘘ではない。きらきらしい壬氏をみるたび、そのように思うのだ。
最近は、そうでないほうが多いのだが。

「高順の後ろにまわることはないだろ」
「いえ、なんとなく落ち着きますので」

一瞬、高順の肩が揺れた。脂汗がたらたら流れているようである。

むすっとした顔の壬氏を高順の肩越しに見る。

「高順がよくて、俺じゃなんで駄目なんだ？」

（生理的に受け付けません）

とは、正直に言い難い。

遠回しに伝えることにする。

「そうですね。もう少し、お腹が出て、加齢臭が漂うようになれば落ち着くかと」

（その頃には、今ほど麗しくないはずだ）

そのつもりでいったのだが、なぜか高順の肩がびくりびくりと二回震えて、首がゆっくりもたれていった。

壬氏はなぜか考え込み、左手を顎（あご）にやる。

「腹は別として、加齢臭はどうすればいい？」

薄々、気が付いていたがこやつ、頭は良いが莫迦（ばか）である。

「年齢を重ねることですけど、ほかに心身負荷（ストレス）によって代謝が悪くなると臭いますね」

また、高順の肩がびくりと揺れると、そのまま床に膝と手をつけ、うつむいた。

「どうかしましたか？」

「ええ、ほっといてください」

珍しく投げやりな高順の言葉に猫猫は首を傾げる。

壬氏が夕餉にするぞと呼び立てるので、言われた通りそのままにしておくことにした。

食事中はちくちく小言をいわれた。いっそがみがみいってもらいたいが、粘着質なのでちくちくである。

薬が作れない旨を説明すると、納得したようで鈴の根付のついた札を渡された。複雑な模様の焼き印が押してある。

「これがあれば、医局と書庫に顔が通る」

とのことらしい。

なるほど、冬虫夏草以来のいい仕事である。

もうひとりいる初老の女官に言付けして、門限を守れば、外出してもよいとのこと。

うれしくて笑い出しそうになるが、いかんいかんと顔をこわばらせた結果、いつものようにへどろを眺める目線をおくってしまった。悪い癖になりつつある。

不思議なことに、この視線を壬氏に送ると、なぜかうずうずと好奇

心にかられた顔をするので困る。まるで獣の肉球を前にして、指先で押したがっている顔だ。

（もしかして愛玩動物扱いされているのでは）

食事のときといい思い当たる節はある。さっきの鈴の根付も、首輪みたいなものなのか。

しかし、猫猫にとってはたまったものではない。
自分が愛玩用に向いているとは到底思えないのだ。

（今度、子猫でも貰ってこようか）

猫猫はぐっと拳に力を入れて、ささやかな決心をするのだった。

翌日、初老の女官に途中まで案内されて、書庫にいくと貴重な薬の文献が山のように積まれていた。

目が輝き、一心不乱に読み漁っていると、ちょいちょいと司書の小父さんに呼び止められた。
周りの迷惑になるので、持ち帰って読みなさいとのこと。
また、無意識になにかやっていたらしい。

帳面に題名と名前を明記し、風呂敷一杯に包んで持ち帰ろうとしたところ、また呼び止められた。
貸出は五冊までとのこと。

荷物が軽くなったついでに医局に顔を出すことにした。
用があれば、こちらで薬の材料をもらえる手筈になっているらしい。

園遊会の時に一度たずねているので、広い宮廷内でも迷うことなくつけた。
それでも大小百をこえる建築からなり、どれも赤と緑を基調とした意匠（デザイン）なので、気を抜くと迷いそうになる。

医務室に入ると、不機嫌な顔をした医官が眉間にしわを寄せていた。
気難しそうなやせぎすの男でどのようにさばをよんでも三十路にはいくまい。
猫猫が中に入るのを拒まないものの、明らかに領域を荒らすことにいら立っている。

「なにを考えているんだ、あのかたは」

別に隠すつもりもない小言が聞こえてきた。

まあ、それは普通の反応なのでとりあえず無視する。

素性のわからない醜女（しこめ）の図々しい態度に、医官がさらに眉間のほりを深くするが、そんなもの関係ない。
目の前に広がる巨大な薬棚と、むせ返るような匂いの前に意識がとびそうになる。

（すごい、すごい、すごい）

後宮の薬棚もよかったが、それとは比べ物にならない。
量も半端でないうえ、材料ひとつひとつが丁寧に仕分けされている。

管理の行き届いているのは、薬の名が張ってある宛名（ラベル）に仕入れた日付が書いてあることで読み取れた。
やぶ医者が腐りかけた高麗人参を置いていたのと大違いである。

棚のひとつひとつ名前を調べ、自分の記憶にないものを見つけると、引出をあけ実物を確認する。効用を備え付けの図鑑にて調べて、文章を丸暗記して実物と結びつける。

それを何度も繰り返し、全部の生薬（しょうやく）が頭に入ったときにそれは聞こえてきた。

「初日から門限を破るとはいい度胸だな」

甘さのかけらもない麗しき御仁の声が背中に悪寒（おかん）を走らせた。

どう考えても、申し開きのできない状況なので、素直に正座して三つ指をついて頭を下げた。

壬氏の後ろには、昨日から遠い目をしている高順が付き従っていた。
珍しく香が焚き染められた官服を着ていた。

# 4　変人（後書き）

orz

## 5　羅漢

門限破りをねちねちと言われた猫猫（マオマオ）であったが、どうやら今後、破らなければ今回は目を瞑るという。

よくよく考えてみれば、多少の変態行為に目を向けなければ、随分待遇のいいことに改めて気が付いた。

（それなのに、自分は好き勝手に）

壬氏（ジンシ）に対して、愛想のない返事をしたり、敬わなかったり、変態扱いしたり、這い回る地虫を見るかのごとくながめたり。

自分が主人なら、こんな女官即解雇にしているところだ。むしろ、縛り首にしていることだろう。

（そうなると、薬草が）

給金はどうでもいい、ほかに稼ぐ方法はある。

しかし、渡来物の薬草など花街の薬屋には手の届かない一品だ。

毒実験を数年我慢しても欲しいものはいくらでもある。

今後は、誠心誠意仕えるべきだと、表情筋に妓女教育で鍛えられた営業微笑（えいぎょうスマイル）を貼り付けて壬氏を迎えてみた。

壬氏が呆（ほう）けた顔をしたので、貼り付ける表情を間違えたのかと思ったら、いきなり抱きつかれた。

がらにもなく声を上げてしまったので、何事かと高順（ガオシュン）と初老の女官、

水蓮（スイレン）が飛び出してきた。
高順は額をおさえ、水蓮はあらあらと呑気に「だめじゃないの、坊ちゃま」と軽くいなしてくれた。

忘れていた。
たとえ宦官であったとしても、存在自体が卑猥（ひわい）である。歩くわいせつ物だ。花の顔（かんばせ）に騙されてはいけない。

それにしても、二十半ばにみえるのにいまだ坊ちゃま扱いなのかと、猫猫は思った。

ここのところ、仕事の帰りが早いのは、溜まっていた仕事を片付けていたからしい。

たまたま、部屋を飛び出した日に、仕事が片付いたようだ。

（もう少し時間を置けばよかったか）

今更、遅い話である。

その仕事というのは、どうにも相手が悪かったらしい。

軍部の高官らしく、頭は切れるが変人だと有名らしい。
なにかと難癖をつけて、客人を部屋に連れ込み、または突撃し、将棋をうったり、世間話をしては案件の判（はん）をうつのを先延ばしにするという。

今回、標的（ターゲット）にされたのは壬氏とのこと。
おかげで、毎日、一時（にじかん）は執務室に居座られ、その分残業していたのだという。

「どこの隠居ですか、それは」
「まだ四十路過ぎだ。自分の仕事は終わらせるぶん、たちが悪い」

（四十路すぎ、軍部の高官、変人？）

どこかでおぼえのある言葉（キーワード）だったが、思い出してもろくなことがなさそうなので猫猫は忘れることにした。

まあ、忘れたところで、いつもの嫌な予感はきていたのが。

○●○

「案件はもう通ったはずですが」

招かれざる客に、壬氏は天女の笑みを浮かべていった。ひきつらないようにするには努力を要する。

「いやいや、冬に花見は難しい。ならば、こちらでと思いましてな」

無精ひげに片眼鏡（モノクル）をつけた飄々とした中年がそこにいた。
武官服を着ているが、その容姿は文官にこそふさわしく、細い狐のような目は理知とともに狂気を孕んでいた。

男の名を羅漢（ラカン）、軍師をやっている。時代が時代なれば、太公望と言われた男だろうが、今の世ではただの変人にすぎない。

家柄は良いが、四十を過ぎても妻帯せず、甥御を養子にとって家の管理を任せている。

羅漢の興味のあるものといえば、碁と将棋と噂話。相手が興味なくても無理やり巻き込んでいく。

ここ最近、壬氏に突っかかってきた理由といえば、緑青館（ろくしょうかん）の妓女を身請けした件である。

さすがに、宮廷内に派手な衣装を着た娘が歩いていれば噂になる。正直もみ消すのに苦労した。

表向きは後宮四夫人の話相手である。別におかしな話ではない。妓女といっても、才のあるものはそのまま官にむかえられることも皆無ではないのだから。

それなのに、うら若き娘のごとく噂の好きなこの御仁は、あることないことあること吹き込んで、軍部では壬氏が身請けしたということになっている。いや、間違っているとは言い難いが。

猫猫は「目立つので着替えましょう」と言ってくれたが、今後、まともに着飾ることはそんなにないだろうと、そのままにさせた。その考えが甘かったとは思うが、今その状況に陥っても多分着替えさせることはないだろう。

おっさんのどこからわくのかわからない話の数々を右から左に聞き流し、高順の持ってきた書類に判を押す。

「そういえば、緑青館に昔、なじみがいましてね」

意外な話だ。

色事などまったく興味のないことと思っていたが。

「どんな妓女ですか？」

つい興味をひかれて返してしまった。

羅漢はにんまりと笑うと、瑠璃杯に持参の果実水をつぐ。

「いい妓女（おんな）でしたよ。碁と将棋が得意で、私も将棋は勝てるが碁は負けてばかりだった」

軍師殿を負かすとは、それは強かったのだろう。

「あれほど面白い女にはもう会えないだろうと、身請けも考えましたが、世の中うまくいかないものでね。ちょうど、物好きの金持ちが二人、競り合うように値を釣り上げていた」

「それはそれは」

時に妓女の身請け金は、離宮がひとつ建つ額になる。羅漢にも手が出せないというのはそういうことなのだろう。

「変わり者の妓女でして、芸は売れど身は売らず。それどころか、客を客とも思わない。茶を注ぐにも、主人に接するというより、下賤の民に施しを与えるような尊大な目で見ておりました。まあ、かくゆう私もそのひとりなのですが、背筋にぞくぞくとくる感覚がたまらないものでして」

「……」

どうにも居心地が悪く、目をそらしてしまった。控える高順も一文字にした唇を強く噛んでいる。

世の中、同じ趣味の人間はけっこういるものだ。

その心のうちを知ってか知らずか羅漢は続ける。

「いつか組み敷いてみたいと思っていたものですよ」

にやりと笑う男の目に、狂気に満ちた炎を垣間見た。

「結局、私もその妓女のことは諦めきれず、仕方なく少々汚い手を使いました。まあ、高くて手が出せないなら、安くなれば問題ないわけでして」

希少価値下げたんですよ、と。

「どんな方法をとったか知りたいですか？」

片眼鏡ごしに狐のような目が笑っている。

いつのまに相手を引き込む。これだから恐ろしい。

「ここまできてもったいぶるのですか」

「いやはや、もう時間でして。長居をすると部下に怒られる」

手のひらを返したように、羅漢は果実水を片付ける。もう一本用意していた徳利を壬氏の机の上に置いた。

「部屋付の女官たちにでもあげてくだされ。甘すぎない飲みやすい

口ですから」

中年武官は手を振りながら、

「では、また明日」

と去って行った。

# 6　価値

「変人からの土産だ。水蓮（スイレン）と飲んでくれ」

壬氏（ジンシ）が徳利を卓の上に置く。

栓を開けると、柑橘の匂いがした。

「変人からですか」

なんの感慨もわかない声で答える。

壬氏は長椅子（カウチ）に寝そべり、火鉢に炭をくべる猫猫（マオマオ）を見る。

高順（ガオシュン）は、底の尽きかけた炭をみると部屋を出て行った。とりにいってくれるのだろう、さすがまめ男である。

「緑青館（ろくしょうかん）のなじみとかくわしいのか？」

「派手に立ち回るひとであれば」

「どんな奴がいる？」

「守秘義務ですので」

壬氏はそっけない答えに眉をしかめる。

質問の仕方を間違っていることに気づいたらしく、違う言葉で言い換えた。

「では、妓女の価値を下げるにはどうすればいい」

「不愉快なことを聞きますね」

猫猫は軽くため息をつく。

「いくらでもありますよ。特に上位の妓女ならば」

最高級の妓女になると、仕事の数も月に数回と少ないものだ。売れっ子が常に客を取っているわけでない。むしろ、客を毎日とらねばならぬのは、夜鷹（よだか）といったその日の銭（ぜに）にあえぐものたちである。

上位の妓女ほど、露出を好まない。

詩歌や踊り、楽（がく）を学び、その教養にて客をとるのだ。

緑青館では禿（かむろ）時代に一通りの教育を済ませる。そのなかで、容貌の悪くない、見込のあるものと、そうでないものに分ける。

後者は、顔見世が終わるとすぐ客をとるようになる。芸ではなく身を売るのだ。

見込みのあるものは、茶飲みから始まり、より顧客をつかむ話術の長けたもの、才知の長けたものはどんどん値を釣り上げられる。そこで、わざと人気妓女の露出を減らすことで、茶飲みだけで一年の銀が尽く売れっ子妓女が出来上がるのだ。

なので、身請けまで客に一度も手を付けられない妓女もいる。まあ、男の浪漫（ろまん）というもので、花を最初に手折（たお）るのは自分でいたいと思うのだ。

「手つかずの花だからこそ、価値があるのです」

猫猫は鎮静効果のある香を焚く。

「手折（たお）れば、それだけで価値は半減します。さらに」

猫猫は小さく息を吐いて、鎮静香を吸い込んだ。

「子を孕ませれば、価値などないに等しくなります」

なんの感慨もなく言ってのけたはずだ。

○●○

にやにやとした狐のような御仁は、昨日の言のとおりに現れた。

ご丁寧に柔らかい座布団付の長椅子を部下に持ってこさせていた。

一体、どれくらい居座るつもりなのだ。

「昨日の話の続きをしましょうか？」

持参の徳利から果実水を手酌で注ぐ。

茶菓子まで持ち込んで、書類だらけの机の上に、乳酪香る焼き菓子が置かれた。直に置くのはやめていただきたい、書につく油の跡を見て高順が頭を抱える。

「本当に、随分あくどい事をなされたようですね」

書類に判を押しながらいった。書類の中身は頭に入らなかったが、後ろに控える高順が何も言わないので問題ないだろう。

猫猫の答えから、このずる賢い狂人が何をやったか想像がついた。

そして、もうひとつあまり歓迎できない憶測が頭に浮かんだ。

理解できないわけじゃない、辻褄もあう、いくつかの点で納得ができる。

なぜ、緑青館（ろくしょうかん）の身請け話から突っかかってきたのか。
なぜ、昔の馴染みの話をしたのか。

しかし、そのことを認めてしまいたくなかった。

「あくどいとは失礼な。とんびに言われたくない話だ」

片眼鏡（モノクル）の奥の目を細め、羅漢（ラカン）が笑う。

「ようやく、やり手婆を説得したのに。十年以上かかったんだ」

からんと杯を傾ける。果実水の中には氷の欠片がうかんでいた。

「油揚げを返せと？」
「いいや、いくらでも出しましょう。昔と同じ轍（てつ）は踏みたくないのでね」
「嫌だといったら？」
「そういわれると、何も言えませんな。貴方様に逆らえるものなど、片手の指折（ゆびお）りほどに存在しない」

じわじわと回り込む言い方をする。すこぶる居心地が悪い。

羅漢は片眼鏡を取ると、手ぬぐいで拭く。曇りがとれたと確認すると、左目につけた。さっきまで右につけていたので、ただの伊達であることがわかる。さすが変人だ。

「ただ、娘がどう思うかなのですけど」

『娘』という言葉を強調する。

ああ、いやだ、つまりそういうことなのだろう。

羅漢は猫猫の実の父親だ。

壬氏は判を押す手を完全に止める。

「そのうち会いに行くと伝え願えますか？」

羅漢は乳酪（バター）だらけの指を舐めると執務室を出て行った。

長椅子を置いて行ったままなので、また来るということなのだろう。

壬氏と高順は、示し合せるわけでもないが、同時に頭をうなだれると、大きなため息をついた。

「今度、おまえに会いたいという官がいるのだが」

伝えないわけにもいかず、正直に猫猫に言った。

「どんなかたですか」

猫猫は無表情の奥になにかうずうずしたものを隠しているようだが、いつもどおり冷静な口調であった。

「ああ、羅漢という……」

最後まで言葉を紡ぐ間もなく、猫猫の表情が変わった。

いままで、地虫のように、干からびた蚯蚓（みみず）のように、汚泥のように、塵芥（ちりあくた）のように、蛞蝓（なめくじ）のように、潰れた蛙（かわず）のように、とりあえずいろんな侮蔑（ぶべつ）の目で見られてきたが、そんなもの生ぬるいものであったと気が付いた。

到底、筆舌しがたい。

たとえ壬氏でもこれを向けられたらさすがに生きていけないだろう。

心の根底を叩きつぶし、煮えたぎる鉄に流し込まれ、灰も残らないような。

そんな表情を猫猫は作っていた。

「……どうにか断っておく」

「ありがとうございます」

放心状態のまま、それだけしか言えなかった。

心臓が止まらなかったのが不思議なくらいだ。

猫猫はもとの無愛想な顔に戻ると、自分の仕事に戻るのだった。

# 6　価値（後書き）

顔芸

（；・∀・）

# 7　高順

「無事、送り届けました」
「いつも悪いな」

ここ最近、気苦労の多い主人（あるじ）であるが、今日は殊更（ことさら）激しいようだ。長椅子に寝そべり、力なく手をぶらぶらさせている。絹糸のような髪が乱れて、頬にかかっていた。

あの変人、羅漢（ラカン）のことが原因だとわかるのだが、少し自分が部屋を出たすきにまたなにかあったらしい。戻ってくると、なにやら地獄の釜の中をのぞいたかのような青白い壬氏（ジンシ）がいた。

また、小猫（シャオマオ）にちょっかいをだしたのだろうと思うのだが、当の猫猫（マオマオ）は変わらぬ様子でせっせと仕事に励んでいた。

一体、なにがあったのだろう。

多少の苦労はわかってもらいたいところだが、結局、高順（ガオシュン）のもとにかえってくるので困ったものだ。

「明日は後宮だな」
「はい」

猫猫を送り届けたあと、医局に向かい、あるものを調合してもらう。苦味の多い奇妙な液体である。

二つに分け、まず高順が口にする。もう五年飲み続けているが、や

はりなれそうにない。

口の端を拭いたところで、もう一方を壬氏に渡す。

鼻をつまむ所作は、見た目は大の大人の分、滑稽である。誰もが六つも年齢を鯖読んでいるとは思うまい。

「いやなら飲まなくてもよろしいのに」

「一応のけじめだろ」

手の甲でぐいっと口を拭く姿は、実年齢以上に幼いものだ。

現帝の後宮になり、五年。歪な仮面をかぶり続けて五年。

こうして男でなくす薬を飲み続ける。

下級妃以下は好きなようにしろ、と皇帝の言葉をもらっているのにもかかわらず。

「そのうち、本当に不能になりますよ」

口直しに果実酒を飲んでいた壬氏が噴き出した。口をおさえ、恨みがましそうにこちらをみる。

たまには、これくらい仕返ししても問題なかろう。

「おまえだって同じだろ」

「いえ、先月、孫が生まれたそうです」

子はもう成人している。今更、作る必要もない。

「いくつだったか？おまえ」

「数え三十七ですけど」

十六で娶(めと)り、翌年から年子で三人生まれた。別に無理な話でない。

「はやく孫を抱かせてください」

「努力する」

へたれた主人を見る限り、まだ先のことだと思わずにいられない。これならば、もっと過激に遊ばせておくのだったと、高順は大きく息をはいた。

定例である四夫人のもとへの訪問は、とどこおりなく終えた。

新しく入った楼蘭(ロウラン)妃は、先日の狼狽(うろた)えぶりもなく、うわさ通りの理知的で冷静な妃であった。

ただ妃(つま)たるもののつとめとはなにか、ひたすら演説するかのごとく語るので、聞いていて耳が痛くなった。

そんな話、公務で耳にたこができている皇帝に話したのだろうか。夜の営みにまで、仕事のことは思い出したくないだろうに。

案の定、皇帝の通いは数度で止まり、玉葉妃と梨花(リファ)妃のもとを往復しているようである。

皇帝なりの指針(ポリシー)として、十六になるまで手をださないとあるので、あと一年、里樹(リーシュ)妃は安泰である。

さっさとこさえてしまえばいいのに。

壬氏も高順も同じ気持ちを持っている。

例の妃教育のあと、皇帝の足の運びはずいぶん増えたのだが、結果がでるのはまだ先だろうとおもったが、案外早く出るかもしれない。心配そうに玉葉妃の侍女頭である紅娘（ホンニャン）があることを打ち明けた。

昨日も翡翠宮（ひすいきゅう）に皇帝が訪れたらしく、玉葉妃はけだるげにしていた。心配そうに紅娘が世話をやく。ぬばたまの黒髪が乱れていた。なにかしら苦労の多そうなこの侍女頭とは時折、共感（シンパシー）を持ってしまう。

ちょうどいいと、壬氏はある提案をする。

玉葉妃は目を輝かせ二つ返事でうなづいてくれた。

紅娘もやれやれといった顔をするが、むしろ歓迎した顔である。部屋の外で聞き耳を立てている侍女三人娘にその話をする。

どうやら選択は間違えではないらしい。

○●○

「後宮ですか」

「ああ。おまえの大好きな仕事だ」

猫猫は銀食器を鏡のように磨き上げていた。

曇りひとつないのを確認すると、もとの棚に戻す。

ながら作業で話を聞くのは失礼なことであろうから、さっさとものを

を片付ける。
それくらいのけじめはつけたい。

壬氏は蜜柑を食べている。皮くらい自分でむけばよいのに、水蓮（スイレン）にひとつずつきれいに薄皮を取ってもらい、皿にきれいに並べてもらっていた。

まさに坊ちゃまである。
初老の女官は、この宦官を甘やかす傾向にあるらしい。寒いからと綿入れを着せたり、熱いからと茶をぬるめたり。
大の大人が恥ずかしい。

「玉葉妃の月の道が途絶えているらしい」

（妊娠の可能性ね）

鈴麗（リンリー）公主懐妊時に、妃は二度毒殺未遂にあっている。
心内はおだやかでないはずだ。

「いつからでしょうか」
「今日からでも行けるか」
「むしろ都合がよいです」

後宮内は男子禁制、名前も聞きたくないあれと顔を合わせることはないだろう。
気をきかせてくれたのかもしれないし、都合がよいとしたのかもしれない。

どちらでもよいことだ。

つとめて冷静に動いていたつもりだが、

「あら、いいことあったの？」

と、水蓮が話しかけてきたので、浮足立っていたようである。

## 7　高順（後書き）

後宮編３３　阿多妃　挿入しました。

内容が唐突すぎる後半だったので、少しワンクッションいれました。

# 8　青薔薇前編

（以前は合わないと思っていたが）

そうでもないらしい。

猫猫（マオマオ）は久しぶりの後宮生活を満喫していた。

もともと女だらけの場所で育ってきたので、そういう雰囲気が水にあうのかもしれない。

以前とかわらず、毒見と調合と散策の毎日を過ごしている。

玉葉妃（ギョクヨウ）の懐妊についてはまだよくわからない。

鈴麗公主（リンリー）の妊娠時も、ひどい悪阻（つわり）はなかったらしく、味覚変化もほとんどない。月経不順以外これといった確証はない。

しかし、翡翠宮（ひすいきゅう）内では、箝口令（かんこうれい）がしかれ、万が一の対策を行っている。

一番流れやすい時期を狙うにきまっているのだから。

好色親父こと皇帝には、念のため夜のむつみごとを控えてもらうことにした。

普通に事（こと）を行うのであれば、問題ないのだが、玉葉妃が妃教育を実践していたら普通の範疇（はんちゅう）から外れており、まあいろいろと問題が起きる可能性が否定できないからだ。

自分からいうのも難なので、壬氏（ジンシ）を通して伝えてもらった。

できれば、玉葉妃への訪問回数も減らしてもらいたくないが、そこまでは提言できない。

いきなり夜伽（よとぎ）の数が減ると、勘ぐる輩（やから）もいるだろうけど。

しかし、皇帝は意外にも訪問回数を減らさず、可愛い娘と遊び、玉葉妃とたわいない会話を楽しんでいる。

阿多妃（アードゥオ）の件も思ったが、好色親父とくくりをつけてみるべきでないかもしれない。

ただ、少し物寂しそうな顔をたまにするので、妃教育の残りの教材を渡すことにした。時間つぶしにくらいなるだろうと。

（二次元で我慢してくれ）

後日、違うものを用意しろと言われた時は、やはり好色親父のままでいいのだと確信したが。

こうして、あっというまにひと月が過ぎた。

寒さも薄れていき、春の芽吹きを感じるころである。

やはり、充実した毎日だと日が経つのも早い。壬氏の棟（むね）にいたふた月間は、無駄に長かった気がするのに。

医局の薬棚に未練は残るが、それは今後、やぶ医者を使って後宮医局の改造を行えば問題なかろう。

書庫については、高順（ガオシュン）に頼めば、何かしら見繕ってきてくれる。

これでいつでも後宮の外に出られるのであれば、なおのことよかっ

たがそれは贅沢な話である。

玉葉妃の妊娠はほぼ確実といってよいだろう。血の道は止まったままで、けだるさが続いている。体温もわずかに高いようであり、排せつの回数も増えたようだ。

鈴麗（リンリー）公主が、なぜか玉葉妃のお腹に顔を当ててはにっこり笑うさまをみて、もしかしてなにかがいると気付いているのかもしれない。

子どもとは不思議である。

よたよたと歩き回るようになった公主は、皇帝から賜った赤い履（くつ）をはき、侍女たちを手間取らせていた。

猫猫（マオマオ）は、特に用事もないときは公主の相手をするようになった。他の働き者の侍女たちが面倒見るより、毒見以外ろくに働いていないものが面倒をみるほうが効率よいはずである。

今日も猫猫は、鈴麗公主と遊んでいた。積木（つみき）を組み立てては壊して遊ぶ公主。積木は、わざわざ軽い木材を使用して作らせたものである。

そんなとき、久しぶりにあらわれた見目麗しき宦官は、厄介ごとを手土産にもっていた。

「青い薔薇（そうび）ですか」

「ああ、皆が興味を持ってね」

困った顔でうなづく壬氏。

（また面倒くさいことを）

「私は薬屋ですが」

「なんとなくできそうだと思って」

「それは言えてるわね」

ゆったりと長椅子に座る玉葉妃も尻馬にのる。隣では、公主がちびちびと果実水（ジュース）を飲んでいた。

どこのだれか知らないが、玉葉妃の侍女なら何か知っているのではと、言っていたらしい。

（まさかやぶ医者じゃないだろうな？）

ありえなくもない。

あの気のいいおっさんは、他人を過大評価しすぎるきらいがある。

薔薇の知識がまったくないというわけでなはない。花弁から得られる精油は美肌効果があるとして妓女たちが取り寄せていた。香の強い野ばらの花びらを煮詰めて蒸留し、小遣い稼ぎに作ったこともある。

「昔、宮廷内で咲いていたらしい」

「幻覚でしょう」

「言い出したのはひとりだが、聞けば複数の証言がでた」

「阿片（あへん）は流行っていませんか？」

壬氏は天女の笑みに憂いをのせてこちらを見る。
やはり、このきらきらしい顔は苦手である。
あらあらと玉葉妃が面白そうになにがめている。こちらとしては面白くない。
「無理なのか？」
（身をのりだしてくるな）
これ以上近づいてくるのも鬱陶しい。
ため息がでる。
「どのようにすればよろしいのですか？」
「来月の園遊会に欲しい」
春の園遊会である。
もう前の園遊会からそんなにたっているのか。
しみじみ感慨にふけっていると、あることに気が付いた。
（ん？来月？）
「壬氏さま、知っていますか？」
「なにがだ？」
やはり、わかっていない。
色が云々以前の問題である。

「薔薇が咲くのは、少なくともふた月以上先ですけど」
「……」

（やっぱり）

なにやら、いやな感じがする。
困らせるために無理難題を押し付けるような。

「なんとか、断っておく」
「ひとつ聞いていいですか？」

肩を落とした壬氏がこちらを見る。

「もしかして、とある軍師から持ちかけられた話ではありませんか？」
「ああ。らか……」

慌てて口をおさえる壬氏。

玉葉妃と紅娘（ホンニャン）が、不思議そうに首を傾げる。

いうまでもなく、あの男のことだろう。

（仕方ない）

そうなれば、自分にも責任がある。

「できるかわかりませんが、やるだけやってみます」
「いいのか」
「はい。その点で、いくつか必要なものと場所があるのですが」

逃げているだけも腹立たしい。
どうせなら、にやけた片眼鏡をかち割ってやりたくなった。

# 9　青薔薇後編

春の園遊会は、春牡丹の中行われる。
例年ならば、もう少し早く行われるのだが、毎度寒さに敵わぬものが続出する中このようになった。

赤い毛氈（もうせん）を敷き、長机と椅子が並べられている。
楽団が今か今かと、楽器の手入れを行っている。
慌ただしく女官たちが、用意に不備はないのか確認し、若い武官たちがまだ薄い髭をなでながらそれを楽しそうに見ていた。

背後の目隠しに幕が引かれ、裏で誰かが騒いでいた。

げっそりと痩せた小柄な女官が、大きな花瓶を抱えている。
そこに生けられたるは、季節にはまだ早い、色とりどりの薔薇（そうび）だった。

「本当にできたのか」

壬氏（ジンシ）は、まだつぼみの開ききらぬ花を眺める。色は、赤、黄、白、桃、青、それどころか黒や紫、緑色まで生けてある。

「やはり、難しいですね。開花には至りませんでした」

心底、残念そうな猫猫（マオマオ）。
これは、壬氏に対するすまなさというより、自分の思い通りにできないふがいなさがたった言葉であろう。

「いや、十分だ」

青い薔薇といったのに、ずいぶんと賑(にぎ)やかに盛(も)ったものだ。

過労で倒れそうな娘を翡翠宮(ひすいきゅう)の侍女に任せて、花瓶を宴席の上座に飾る。

つぼみのままの花々は、絢爛たる牡丹の花から注目を奪うには十分だったらしい。

遠巻きに皆、驚いている。

○●○

「あなた、もう水晶宮(すいしょうきゅう)にいっちゃだめよ」

宴席より少し離れた東屋にて、桜花(インファ)が猫猫をひざまくらしている。

桜花は、猫猫が心配でついてきていた。

懐妊がはっきりした玉葉妃(ギョクヨウ)は、今回の宴席を見合わせた。表向きは、淑妃こと楼蘭妃(ロウラン)のお披露目(ひろめ)として席を譲った形となる。

なぜ、桜花が心配するほど痩せこけたのには、原因がある。

どうにも、猫猫は水晶宮にいくと過労になるらしい。

ここひと月あまり、猫猫は再び水晶宮に通っていた。
侍女たちにはあいかわらず物の怪を見る目であつかわれたが気にしない。

壬氏にあらかじめ頼んでおいた場所、それは水晶宮の蒸気（サウナ）風呂だった。
以前、猫猫が突貫工事で作らせたものである。

梨花妃はあいかわらず高貴なかただが、二つ返事で許可してくれたらしい。
猫猫は悪いと思い、

「これは、皇帝の愛読書です」

と、先日新たに妓楼（ぎろう）から取り寄せた書を渡しておいた。
梨花妃は中身に気が付くと、優雅な足取りで自室に戻って行った。

まさか、あんなものが高貴なかたへの袖の下になるとは、誰も思うまい。

館の主人のご機嫌を得たところで、蒸気風呂の蒸気が流れ込むように庭に小屋を作る。窓が大きい、天上にも大窓がついた奇妙なつくりの小屋である。

そこに運ぶのは薔薇の鉢。ひとつふたつではなく、何十と持ち込まれた。

蒸気で温められた空気のなかで、薔薇を育てる。できるだけ日光に

当てるようにし、天気の良い日は外に出した。
いまだ霜が降りるような寒い日は、焼石に水をかけ、徹夜で小屋を温め続けた。

猫猫が何をしたかったのかと言えば、それは薔薇を狂わせたかったのである。
狂い咲きをおこしたかったのだ。

なので、すべての鉢がつぼみを付けるとは思わず、何十も用意した。
花の種類も、できるだけ早咲きのものを選んだ。

期間がひと月あまりと短く、できる確証はなかったが、つぼみができたのをみたときはどんなに喜んだことか。

なにより、花の色をつけるより、花のつぼみをつけることのほうがよっぽど苦労したのだ。

壬氏から宦官を数人よこしてもらったが、温度調節など微妙なものは猫猫が行わないといけない。間違って、薔薇をすべて枯らしてしまったらおしまいである。

時折、物珍しそうにか、怖いものみたさにか、水晶宮の女官がうろつくので、鬱陶しいからと他の事に目をやるようにした。

紅を爪に塗り、布で丁寧に撫でる。
花街では当たり前の爪紅だが、後宮内ではあまりみない。仕事の上で邪魔なのだろうが、普段からあまり仕事をしていない侍女たちは興味津々で食いついてきた。
わざと見せつけるようにのぞかせると、侍女たちは自室に自分の紅を探しに行った。

（これは都合がいい）

少しだけ悪いことを考え、梨花妃にも爪紅をすすめてみた。

後宮には流行（トレンド）がある。そしてその流行最先端（トレンドリーダー）となると、大抵、寵愛を受けた妃たちである。

たとえ下女でも、皇帝の御手付きになれば、妃に召し上げられる。ならば、皇帝の気に入った女の真似をするのは不思議でないことだ。

毒見のために翡翠宮（ひすいきゅう）に戻った際、玉葉妃や侍女たちにも爪紅を見せてみる。紅娘（ホンニャン）は、非効率だといったが、残りはみな興味深そうだった。

（鳳仙花（ほうせんか）と片喰（かたばみ）があればな）

爪紅（つまべに）の異名をとる鳳仙花と、ねこあしの異名をとる片喰を潰して練り合わせて爪につける。片喰が鳳仙花の赤の発色をよくするのだ。

爪紅が後宮内の女官たちに流行るころ、薔薇のつぼみは膨らみ、どれもが白い花びらをのぞかせていた。

猫猫が選んだ薔薇は、すべてが白い薔薇であった。

「あれは一体どうしたんだ？」

壬氏が眉間にしわを寄せる。
後ろに控える高順（ガオシュン）も興味深そうに見ていた。

桜花は壬氏たちがもう大丈夫だといったので帰っていった。表向き、猫猫は玉葉妃付の侍女だが、雇用形態は壬氏付のままである。

「染めただけですよ」
「染めた？そんなことはない。花びらにはなにもついていなかったぞ」
「外側ではありません。内側から染めたのです」

白い薔薇を色のついた水につけ放置した。
ただ、それだけだ。

茎から水ごと色素が吸い上げられ、白い花びらを染め上げる。
だから、薔薇が吸い上げる水ならばどんな色でも問題なかった。
ただ、葉の色はどす黒く汚くなるため、花瓶に生ける際、白い花以外すべてむしっておいた。

同じ花瓶にすべて生けたように見える薔薇だが、そのひとつひとつの茎の根元は、色つきの濡れた綿で包まれ、油紙（あぶらがみ）で固定されている。

実に単純な話である。

方法が方法だけに、なにかしら言いがかりをつけてくる連中がでるかもしれない。その対処法として、前夜、翡翠宮をおとずれた皇帝に種明かしをしておいた。誰もが、一番最初に秘密を教えてもらえるのはうれしいことらしく、何か言われても意気揚々と説明をかってくれるだろう。

「つまり、以前青い薔薇を見たというのは、毎日毎日、青い色水を薔薇に吸わせる暇人がいたんですよ」
「なんでまた、そんなことを」
「さあ、女を口説く道具でも欲しかったのではないでしょうか」

猫猫はそっけなくいうと、胸元から細長い桐箱をとりだす。冬虫夏草の箱に似ているが、中身は別物だ。

「珍しいな」

壬氏が覗き込んでくる。

「爪を染めているのか？」
「ええ、似合いませんけどね」

薬と毒と水仕事で荒れた手は、左の小指の爪が奇妙な形に歪んでいた。赤く染めても、歪さは変わらない。

じろじろと面白そうに見てくるので、またいつもの水面に浮かんだ魚を見るような目を向けてしまった。

（いかん、いかん）

頭を振る。これくらいで気にしていたら、このあとがもたない。まだ仕事は残っている。

「高順さま。頼んでいたものは」
「ええ、言われた通りに」
「ありがとうございます」

舞台は設置（セッティング）してもらった。
あとは、いけ好かないやつに一泡吹かせるだけだった。

# 10　爪紅

嫌味なごとく色とりどりの薔薇（そうび）は宴席の注目を集めていた。

まるで、見せつけるかのようなさまは、生け手の性格の悪さを示しているようである。

宴があったのは覚えている。

薄絹のひれが舞い、弦楽器の音が流れる。

贅（ぜい）を尽くした懐石が振舞われ、酒の匂いが立ち込めた。

どうにも、昔から興味のないことは記憶に残らない。

それがあったのは覚えているが、それに付随する感慨というものがまったく浮かんでこなかった。

気が付けば宴の席は終わり、黒と青の衣装を着た二人の妃たちが、皇帝よりそれぞれの色を示す薔薇を賜っていた。

それにしても、つまらない。

来ていないのか。

何のために挑発したのかわからない。

しかたないから、いつもどおり違う相手をからかうか。腹いせ位させてもらおう。

周りを見ると、まだ多くのものが残っている。

人ごみは苦手である。

多くの人間の顔は碁石のようにしか見えない。
男女の区別はつく、だが男は黒石、女は白石と見えるのだ。それにもへじをつけたようにしか見えない。

顔見知りの軍部の人間でも、せいぜい将棋の駒に変換されるくらいだ。
多くのものは雑兵で歩、階級が上がるほどに香車、桂馬となっていく。
軍師の仕事とは簡単だ、駒に見合った配置を行えばいい。適材適所、それで大体の戦（いくさ）は勝てる。

天女のような笑みを持つ男、皆がほめるそれでさえ、自分にはわからない。
ただ、成り銀を連れた金将、それを探せば問題ない。

それにしても、今日はいつも以上に目が痛い。
赤い色が目につく。指先に皆、紅をつけている。

いまの女官たちの流行は、爪紅（つまくれない）ということか。

よみがえる記憶の中の爪紅は、あれほどけばけばしい赤ではない。
うっすら染まった赤い色。
鳳仙花（ほうせんか）の赤色だった。

懐かしい妓女の名前がふいに浮かぶと、視線の先に小柄な女官がうつっていた。

小さく貧相だがしたたかな、片喰（かたばみ）のような娘である。

がらんどうの目をこちらに向けていた。

自分の視線に気が付くと、ついてこいといわんばかりに背中を向ける。

牡丹園の向こう側、小さな東屋に将棋盤が置かれている。盤の上には、桐箱があり、中から枯れた薔薇(そうび)が躯(むくろ)のごとく横たわっていた。

「お相手できないでしょうか」

将棋の駒をつかみ、棒読みで娘がたずねてくる。

そばには、金将と成り銀が立っていた。

断る理由などなかろう。

可愛い娘の頼みとあらば。

○●○

いったいなにがやりたいのだ。

壬氏(ジンシ)はできれば帰ってくれという猫猫(マオマオ)の言葉を無視してここにいる。

猫猫は心底いやそうだったが、何も口を出さないという条件で黙ってくれた。

軍師殿を誘いだし、猫猫(マオマオ)は将棋の駒を並べている。

その顔に、感情という文字はなく、普段の無愛想がまだ人間じみていた。

「先攻、後攻どちらがよいかね」

片眼鏡（モノクル）の奥の細い目が、心底嬉しそうなのがわかる。あれだけの執着があるのだから、それは当たり前のことだろう。

「その前に、規則（ルール）と賭けの代償を決めませんか」

「それは話が早い」

壬氏（ジンシ）は猫猫の後ろから盤をのぞく。

羅漢（ラカン）から不気味な笑みを向けられるが、負けるわけにはいかない。流すように笑みを返す。

変則なしの五回戦。つまり、三勝したほうが勝ちである。

どうにも壬氏には理解できない。軍師殿は将棋負けなしである。選んだ遊戯（ゲーム）からして間違っている。

高順（ガオシュン）も同じ意見らしく、眉間のしわをさらに深くしていた。

「何の駒がいるかね。飛車か角か」

「なにもいりません」

せっかくの申し出も受け入れない。大人しく受けていればよいものを。

「では、私が勝てばうちの子になってくれるね」

「雇用中の身ですので、年季があけたあとになりますが」

「雇用中？」

狐のような目がじっとこちらを見る。

壬氏は笑ったままで、頬がひきつるのをこらえなければなかった。

「本当に雇われているのかい？」

「ええ、書にはそのように記されていました」

そのとおりである。猫猫の見た書類にはそう書かれていた。

だが、署名（サイン）をしたのは、保護者替わりであるやり手婆だったりする。

おやじどのこと羅門（ルォメン）は、持った筆を奪われていた。

「それならいいんだが。それより、そっちはどうするんだい」

「なにもいりません。ただ、規則を一つ加えていただけないでしょうか？」

「別に問題ないが」

「それでは」

猫猫は高順にあらかじめ用意させていた酒瓶を取り出した。

五つのさかづきに均等に注いでいく。きつめの蒸留酒である。

それに、袖から取り出した薬包紙を開き、さらさらと粉を入れる。

入れたのは三つ、それぞれ違う粉のようであった。猫猫は杯を傾け、

それらを混ぜると、素早く五つのさかづきを入れ替えた。どれがどれなのかわからなくなる。

「一回負けるごとに、相手にこれを選んでもらい飲んでもらいます。

別に一口飲めばそれでかまいませんので」

なぜだろう、ものすごく嫌な予感がする。

壬氏は、猫猫の後ろから横に回る。

無表情だった顔がほんの少しだけ紅潮している気がしないでもない。

さっき入れた粉が一体何なのか、聞きたいが聞き出せない。
そんな自分がもどかしい。

「さっき入れた粉はなんだい？」

壬氏のかわりに、羅漢がたずねてくれた。

「薬です。単体ならば」

三つまとめれば、猛毒になりますけど、と。

おかしな娘は微笑みながらいってのけた。

えぐいことを考えると壬氏は思うしかない。
たとえ三つ飲まなければ問題ないとはいえ、簡単に口にしたいものではない。

相手のゆさぶりをかけるためだろうか。
たしかに、一般の相手ならひるんでしまうかもしれない。
でも相手は、奇人といわれる軍師殿である。ただのゆさぶりで心みだされるとは思えない。

案の定、猫猫は二連敗していた。
多少は心得があるのかと思いきや、どうやら規則（ルール）を知っている程度で、まったく実践はないようである。

すでに二杯の酒を残さず飲み干している。

一体、何を考えているのだと思う。

三戦目は始まったばかりだが、結果はみえている。

三杯目のさかづきを飲んだとして、毒にあたる可能性を考える。
最初に毒のもとを選ぶ確率は五つに三つ、次に再び毒のもとを選ぶとすれば四つに二つ、最後に三つにひとつ。
つまり十にひとつの可能性で、猫猫は猛毒を食らうのだ。

正直いえば、猫猫ならば毒にあたったところで問題がなさそうだと思えるのが怖い。

羅漢がそれをどこまで知っているのかは知らないが。

さて、賭けに負けた後のことを考えようと、高順と顔を見合わせていると、

「王手です」

と声が聞こえた。

羅漢ではなく、猫猫の声が。

高順と顔を見合わせ、盤上を見ると、王将がと金に狩られようとしていた。
ひどく拙い駒の流れであったが、たしかに王将に道は空いていなかった。

「まいったよ」

両手をあげ、お手上げする羅漢。

「お情けでも、勝ちは勝ちということでよいですね」

「ああ、娘に間違っても、毒をすすめるわけにはいかんからね」

さきほどの二杯の酒で猫猫の表情はかわらなかった。飲んだものに、薬が入っているのか、入っていないのかわからない。

おどけた笑みを浮かべ、無表情の娘を眺める。

「さっきの薬っていうのは味があるのかい？」

「どれも苦味が強いので、一口飲めば味が違うのはわかります」

「それならわかった。どれを選んでくれる？」

「お好きなものをどうぞ」

なるほど、羅漢は二回までなら負けることができる。そのうち一つでも苦味があれば、猫猫に害が及ばないとわかるだろう。確率としてはかわらないが、確実である。

やはり抜け目ない男だ。

羅漢は真ん中のさかづきをとると口にする。

「苦いな」

壬氏は首をうなだれた。

これで、次の対局で猫猫が勝つことはできないだろう。

「それに、あついな」

羅漢の言葉に顔を上げると、羅漢は真っ赤な顔をしていた。そして、次第に血の気が引き、真っ青になると力なく倒れこんだ。

高順が走り寄って羅漢を起こす。

「おまえ、どういうことだ？一種類では問題ない薬なのだろ？」

いくら憎らしいといって本当に毒を盛るものか。

「いえ、薬ですよ」

猫猫は心底、面倒くさそうにいった。脇に置いていた水差しをとると、羅漢と高順のもとに近づいた。

羅漢が昏睡していないことを確認すると、水差しをそのまま突っ込み水をくびぐび流し込む。かなり乱暴な手つきである。

「壬氏さま」

高順が困惑した顔で見る。

「酔っているようです」

「百薬の長ですから」

猫猫はとりあえずやっときますか、という程度のやる気のない看病をしていた。

一応は薬師という職業柄、やってしまうらしい。

「下戸なんですよ、この人」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9636x/

薬屋のひとりごと

2011年11月26日01時03分発行